

第76回日本学校農業クラブ全国大会
令和7年度 西関東大会

クラブ員代表者会議
会 議 資 料



—— 大会スローガン ——

西関東に集いし精鋭 農クが叶える未来の農業
富士山をも越える 農クの力 西関東から轟かせ

期	日	令和7年10月21日(火)～10月22日(水)
会	場	山梨県立北杜高等学校
実施担当校		山梨県立北杜高等学校
		〒408-0023 山梨県北杜市長坂町渋沢1007-19
		TEL 0551-20-4025 FAX 0551-32-3194

クラブ員代表者会議実施委員長挨拶

クラブ員代表者会議実施委員長
山梨県立北杜高等学校
校長 花輪 孝徳

全国からお越しいただいた農業クラブ員の皆様、そして引率の先生方、山梨県へようこそお越しくださいました。心より歓迎申し上げます。

本大会は、「西関東に集いし精鋭農クが叶える未来の農業」「富士山をも越える農クの力、西関東から轟かせ」というスローガンのもと、山梨県・東京都・神奈川県による「西関東大会」として開催されます。山梨県では、クラブ代表者会議や農業鑑定競技会などが行われます。

山梨県は本州の中央に位置し、日本最高峰・富士山をはじめとする名峰に囲まれ、四季折々の美しい風景が楽しめる自然豊かな地域です。県内は、甲府盆地を中心とする「国中地域」と、富士北麓・東部地域からなる「郡内地域」に分かれています。

国中地域では、日照時間が長く降水量が少ないという気候を活かし、果樹栽培が盛んに行われ、桃、ブドウ、スモモの生産量は全国一を誇る、「フルーツ王国やまなし」として広く知られています。一方、郡内地域は、世界遺産・富士山や富士五湖、日本三奇橋の一つである猿橋などがあり、標高が高く冷涼な気候と雄大な自然が魅力の、国内外から多くの観光客が訪れる世界的な観光地です。

今回、クラブ代表者会議の会場となる北杜高校は、山梨県北西部・北杜市に位置し、八ヶ岳中信国定公園、秩父多摩甲斐国立公園、南アルプス国立公園に囲まれた、豊かな自然環境に恵まれた地域にあり、周囲は稲作を中心とした農業が盛んな地域でもあります。

さて、近年、環境や社会構造の急激な変化により、農業教育を取り巻く状況も大きく変化しています。少子高齢化による担い手不足、DXやスマート農業の進展、「みどりの食料システム戦略」に基づく学習テーマの拡大、教員不足、学習内容の高度化など、多岐にわたる課題が山積しています。これらの課題に対応するためには、主体的に他者と協働し、新たな価値を創造できる力を養い、持続可能な社会の担い手としての資質・能力を身につける必要があります。

クラブ代表者会議に参加される皆さんには、「農業クラブ活動の事例をもとにした情報交換と連盟運営に関する意見交換を行い、クラブ員の資質向上と農業クラブの発展を図る」という目的を理解し、充実した情報・意見交換を通じて親睦を深め、互いに高め合いながら、将来の農業を支える人材へと成長するきっかけとなることを願っております。

最後に、本会議が皆様にとって新たな学びと交流の場となり、地域や農業を担うリーダーとして、今後ますますご活躍されることを心より祈念し、開催のご挨拶とさせていただきます。お越しいただき、心から歓迎申し上げます。

生徒実行委員長あいさつ

クラブ員代表者会議生徒実行委員長
山梨県立北杜高等学校
総合学科 3年 亀井 志海

全国の農業クラブの皆様、こんにちは。ようこそ山梨県北杜市へお越しくださいました。全国でも有数の生産量を誇るブドウやモモなど豊かな果樹と、美しい富士山、八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳などの3,000mを越える山々に囲まれたこの地で、第76回日本学校農業クラブ全国大会令和7年度西関東大会クラブ員代表者会議を迎えられることを、北杜高校一同心より嬉しく思います。山梨県でこの全国大会が開催されるのは、67年ぶりです。この記念すべき大会に、運営として関わることができる喜びと責任を胸に、私たちは今日まで準備を重ねてきました。

このクラブ員代表者会議は、全国の農業クラブ員の皆様が普段行っている各単位クラブでの取り組み、学校の特色などを共有し、意見を交わす場です。分科会では、SNSを活用した地域や学校のつながり、農業クラブの活性化、持続可能な農業について、それぞれが自分の言葉で話す場が用意されています。農業という共通点を持ちながらも、私たちが学ぶ地域や学校には、それぞれの特色や課題があります。だからこそ、全国からの「声」を聴けるこの場は貴重で、自分たちの活動を見直すヒントがきっと見つかると思います。“ちがいを”受け入れ、“つながり”に変えていく。そんな対話が、この山梨の地でたくさん生まれることを願っています。

全国大会の実施にあたり、昨年の岩手大会から「感謝と友情のバトン」を引き継ぎました。西関東大会ではどのようにして全国の皆さんをお迎えできるだろうか、と考えて活動してまいりました。カウントダウンボードの製作、アナウンス講習会でのアナウンスや進行のスキルの向上など、全国の皆様に「来てよかった」と思ってもらえるように、小さなことも一つ一つ、心を込めて準備してきました。こうふ亀屋座で行った100日前イベントでは、プロジェクト発表や意見発表のデモンストレーションを行い、モモをはじめとする旬の農産物販売を行い、農業高校の学びとともに農業クラブの活動をお伝えすることができました。また、今回の全体会の講演会では、「生命とは何か？から考える農と未来の暮らし」と題し、パーマカルチャーの先駆者である四井真治さんをお迎えし、講演を頂きます。ここ山梨がもつ多くの魅力が、皆様の記憶に残るものになれば嬉しいです。

農業クラブの三大目標、「科学性・社会性・指導性」。この会議を通して、報告やレポートから科学性を、他校の仲間との交流や分科会での意見交換から社会性を、そして議論をまとめ、未来を語る力から指導性を、それぞれ育てていける機会になるはずです。ここでの経験が、皆様のこれからの農業クラブの活動、そして将来の農業や地域づくりに少しでもつながっていくことを、私たちは心から願っています。

クラブ員代表者会議概要

- 1 期 日 令和7年10月21日（火）～22日（水）
- 2 会 場 山梨県立北杜高等学校
- 3 目 的 クラブ活動の事例をもとにした情報交換と連盟運営に関する意見交換を行い、クラブ員の資質の向上とクラブ活動の発展を図る。
- 4 実施担当校 山梨県立北杜高等学校
- 5 実 施 委 員

生徒実施委員長	山梨県立北杜高等学校	総合学科3年	亀井 志海
生徒実施副委員長	山梨県立北杜高等学校	総合学科3年	差ヶ久保 瑞希
実 施 委 員 長	山梨県立北杜高等学校	校 長	花 輪 孝 徳
実 施 副 委 員 長	山梨県立北杜高等学校	教 頭	坂 本 篤
実 施 主 任	山梨県立北杜高等学校	教 諭	清 水 綾 子
実 施 副 主 任	山梨県立北杜高等学校	教 諭	福 島 ひ と み
実 施 副 主 任	山梨県立北杜高等学校	実 習 教 諭	原 正 武

6 指導助言者

指導助言者代表	東京都立瑞穂農芸高等学校	校 長	大 畑 哲 也
指導助言者			
【第1分科会】	神奈川県立三浦初声高等学校	教 頭	藤 森 明 夫
【第1分科会】	埼玉県立秩父農工科学高等学校	教 諭	大 木 圭
【第1分科会】	埼玉県立羽生実業高等学校	教 諭	長 島 肇
【第2分科会】	埼玉県立川越総合高等学校	教 諭	安 藤 智 哉
【第2分科会】	群馬県立富岡実業高等学校	教 諭	福 田 幸 太
【第2分科会】	群馬県立藤岡北高等学校	教 諭	栗 原 勇 夫
【第3分科会】	静岡県立磐田農業高等学校	教 諭	福 島 徹 也
【第3分科会】	静岡県立遠江総合高等学校	教 諭	松 田 早 織
【第3分科会】	静岡県立小笠高等学校	教 諭	高 木 農

7 日 程

（1）事前打ち合わせ全体会・分科会 10月21日（火）

12：50～13：20 受 付（本館 生徒昇降口）

13：30～14：00 事前打合会（全体会 体育館）

14：00～16：00 事前打合会・リハーサル（各分科会会場 教室）

※参加者：分科会司会者・記録者、指導助言者代表、指導助言者、事例発表校

(2) クラブ員代表者会議 10月22日(水)

8:20～9:20 受付(体育館入口1階)
 9:30～10:00 開会式(体育館)
 10:15～12:00 分科会Ⅰ(各分科会会場 教室)
 12:00～13:00 昼食(各分科会会場 教室他)
 13:00～13:50 分科会Ⅱ(各分科会会場 教室)
 14:00～14:50 講演会(体育館)・報告会リハーサル(各分科会会場 教室)
 15:00～16:00 分科会報告・閉会式(体育館)

※分科会司会者・記録者、指導助言者代表、指導助言者は午後の日程が以下のようになります。

12:00～13:00 昼食(各分科会会場 教室他)
 13:00～13:50 分科会Ⅱ(各分科会会場 教室)
 14:00～14:50 分科会まとめ、報告会リハーサル(各分科会会場 教室)
 15:00～16:00 分科会報告・閉会式(体育館)
 16:15～16:45 総まとめ会(大講義室)

※総まとめ会参加者：指導助言者代表、指導助言者、実施委員長、実施主任、実施副主任

8 分科会テーマ

分科会	テーマ	会場
第1分科会	農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。	第1会場
		第2会場
		第3会場
第2分科会	クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。	第4会場
		第5会場
		第6会場
第3分科会	高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。	第7会場
		第8会場
		第9会場

9 運営担当校

分科会	会場	運営担当校	司会者	記録者	指導助言者
第1分科会	第1	神奈川県立 三浦初声高等学校	鈴木 晴 捺 敦 森 和 香	今 瀬 恵 太	藤 森 明 夫
	第2	埼玉県立 秩父農工科学高等学校	山 中 優 那 彦久保 心里	山 中 涼	大 木 圭
	第3	埼玉県立 羽生実業高等学校	佐 藤 黎 中 村 瑞 希	菅 原 杏衣來	長 島 肇
第2分科会	第4	埼玉県立 川越総合高等学校	赤 間 至 利 工 藤 悠 希	石 川 大 貴	安 藤 智 哉
	第5	群馬県立 富岡実業高等学校	佐 藤 愛 莉 神 山 輝	笠 原 小 春	福 田 幸 太
	第6	群馬県立 藤岡北高等学校	坂 木 莉 彩 岡部 留々香	新 井 琉 貴	栗 原 勇 夫
第3分科会	第7	静岡県立 磐田農業高等学校	土 屋 沙 気 金 原 湊	永 田 大 悟	福 島 徹 也
	第8	静岡県立 遠江総合高等学校	松 本 菜 佑 瀧 澤 茉 南	鈴 木 琉 夏	松 田 早 織
	第9	静岡県立 小笠高等学校	松 本 拓 也 鈴 田 七 海	原 田 權 瑠	高 木 農

10 事例発表校

分科会	会場	事例発表	発表者	指導責任者
第1分科会	第1	<u>東北ブロック</u> 秋田県立大曲高等学校	関口 宗浩・佐藤 美音 森本 美桜	菅 原 慎 太 郎
	第2	<u>東海ブロック</u> 岐阜県立岐阜農林高等学校	藤井 優風・大野 遥稀 野一色 美咲	三 川 遥 之
	第3	<u>四国ブロック</u> 高知県立幡多農業高等学校	尾形 銀太・岡 紫菜 藤本 桃花	安 部 誠 一 郎
第2分科会	第4	<u>関東ブロック</u> 静岡県立田方農業高等学校	杉本 優姫乃・鈴木 優心 千頭和 結衣	原 川 均
	第5	<u>近畿ブロック</u> 奈良県立磯城野高等学校	下山 咲梨乃・大田 心愛 藤岡 なな子	大 賀 健 太 郎
	第6	<u>九州ブロック</u> 大分県立大分東高等学校	村上 勇斗・久保田 凜 田口 厳智	長 木 哲 也
第3分科会	第7	<u>北海道ブロック</u> 北海道旭川農業高等学校	大沼 尚央・松田 光稀 村椿 ここみ	沼 田 雅 美
	第8	<u>北信越ブロック</u> 長野県佐久平総合技術高等学校	茂木 こはな・高橋 妃菜 永峯 ゆら	小 海 清 二 郎
	第9	<u>中国ブロック</u> 鳥取県立智頭農林高等学校	山根 充希・伊藤 瑛斗 児玉 真智瑠	天 川 敏 之

参加者課題レポート

第 1 分科会

第 1 会場

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第1会場	秋田県立大曲農業高等学校	神奈川県立三浦初声高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	北海道	深川東高等学校	生産科学科	2	柴尾 尚央
2	茨城県	石岡第一高等学校	園芸科	2	森本 みくる
3	群馬県	安中総合学園高等学校	総合学科	3	萩原 杏菜
4	埼玉県	羽生実業高等学校	農業経済科	3	早川 桜姫
5	東京都	園芸高等学校	園芸科	2	坂本 ひなた
6	神奈川県	相原高等学校	畜産科学科	3	井上 未来
7	新潟県	加茂農林高等学校	生産技術科	2	五十嵐 梓
8	長野県	下伊那農業高等学校	園芸クリエイト科	2	市瀬 悠斗
9	愛知県	猿投農林高等学校	農業科	2	君嶋 希彩
10	三重県	相可高等学校	生産経済科	3	今西 葵
11	和歌山県	紀北農芸高等学校	施設園芸科	3	堀田 知宏
12	岡山県	新見高等学校	生物生産科	3	生田 湊
13	愛媛県	伊予農業高等学校	園芸流通科	2	篠澤 怜
14	大分県	日出総合高等学校	農業経営科	2	西田 尚生

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
15	秋田県	大曲農業高等学校	農業科学科	3	関口 宗浩
16	秋田県	大曲農業高等学校	生活科学科	3	佐藤 美音
17	秋田県	大曲農業高等学校	生活科学科	3	森本 美桜

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
18	神奈川県	三浦初声高等学校	都市農業科	2	鈴木 晴捺
19	神奈川県	三浦初声高等学校	都市農業科	1	敦森 和香
20	神奈川県	三浦初声高等学校	都市農業科	1	今瀬 恵太

「地域の輪を創るための情報発信～農フのあるべき姿～」

東北ブロック 秋田県立大曲農業高等学校

農業科学科 3年 関口 宗浩

生活科学科 3年 佐藤 美音

生活科学科 3年 森本 美桜

1 学校紹介・課題

秋田県立大曲農業高校は秋田県南部大仙市に位置し、創立134年の秋田県内で2番目の歴史をもつ伝統校です。大仙市は仙北平野に囲まれた稲作が盛んな地域で、大曲の花火が有名な市です。本校は農業科学科2クラス、食品科学科1クラス、園芸科学科1クラス、生活科学科1クラスの4学科5クラス総勢477名の農業クラブ員が所属する学校です。

学科名	男子	女子	合計
農業科学科	144名	56名	200名
食品科学科	31名	66名	97名
園芸科学科	38名	59名	97名
生活科学科	2名	81名	83名
合計	215名	262名	477名



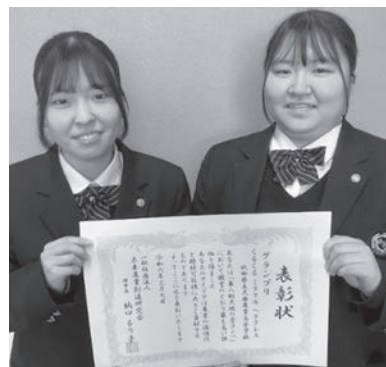
課題研究に力を入れており、農業クラブ各種発表会をはじめ、様々な全国大会で優秀な成績を収めています。



R 6 東北大会プロⅡ類最優秀賞



R 7 東北連盟大会



R 6 大地の力コンペグラント



第 52 回毎日農業記録賞



農業クラブ役員

本校が抱える課題として情報発信不足があります。昨年度末の学校評価アンケートでは、「情報発信を積極的に行っていると思いますか？」という質問に、そう思うと答えた保護者は31.4%でした。これまでの情報発信は学校ホームページや地域へのポスター掲示だったため、情報発信不足を実感しました。農業クラブ役員で今後の発信方法を話し合ったところ、477名が通う本校での農ク活動は多岐に亘り、それぞれの担当者の情報発信では不十分であり一貫性がないことが明確になりました。そこで私達は、①地域に1年中話題を届ける②地域交流の場を増やす③校内組織を整理するという3つの手立てを考え活動を開始しました。

2 活動内容

まず、「①地域に1年中話題を届ける」ことです。SNSでの情報発信を強化するため今年4月、本校初となる公式Instagramを開設しました。



週3回程度の投稿を目標に、普段の日常生活や学校行事、課題研究、農ク活動など投稿できる話題を一年中隙間なく発信しています。数名の担当生徒がInstagram専用のgoogle classroomに写真とコメントを投稿し、それを担当の先生が確認しInstagramにアップする方法で、情報が新鮮なままお届けできるよう工夫しています。現在500名近いフォロワーがおり、更に増やして行きたいと思います。

次に、「②地域交流の場を増やす」ことです。

農業高校には地域農業や地域交流を活性化させる拠点という役割があります。本校には平成30年に開業したアグリマーケティングハウスという交流拠点施設があり、生徒が栽培した農産物や実習で作った加工品を販売する農産物販売会やニコニコ農業塾などで活用しています。ニコニコ農業塾は、8年前から野菜部を中心に運営しており、農業体験や弁当製造販売、寄せ植えやそば打ち講習など、地域の方が農業に触れる機会を創出しています。今年は地域の人気店に協力いただき、ケバブ丼の製造販売も行いました。カフェとしての活用も計画中です。



農産物販売：毎回大盛況！たくさんのお客様で賑わいます。



そば打ち体験：真剣な眼差し



初挑戦のケバブ丼製造販売



学校近くの秋田県立農業科学館では、展示や農産物販売、地元の伝統野菜である石橋ごぼうやりんご栽培を共同研究で行っています。研究成果を地域の方に知っていただく貴重な場となっており、新たな繋がりも生まれています。りんご栽培は今年から支援学校の生徒と交流しながら行うことになりました。

地域の若者が企画・運営する地域のナイトマーケットにも参加しています。大農卵の味付け卵の販売ではたくさんの卒業生が声をかけてくださり、改めて地域に根ざした学校なのだと実感することができました。今年新たに個人商店での販売にも挑戦しました。長年地域で店を構えてきた方からお話を伺いながら、普段の販売イベントでは出会わないお客様との交流を楽しむことができました。



農業科学館での学校紹介展示



販売実習



手踊り披露後の交流



ナイトマーケットでの煮卵販売



学ぶことも多かった個人商店での販売



保育園児との交流では、農作業や食育、循環型農業の普及など、保護者への情報提供も意識した活動を行いました。地元の方にお借りした耕作放棄地での作物栽培にも挑戦し、地域の方々の協力を得ながら日々活動を行っています。



循環型農業の教材をプレゼント



稲刈り学習の先生役



耕作放棄地再生

そして、「③校内組織を整理する」ことです。本校では農業クラブが生徒会を兼ねており、学校行事の運営すべてを行っているため、17名の農ク役員の負担が大きくなっているのが課題です。そのため全校生徒に有志を募り、分業することを意識しました。今年度はインスタグラムの専門のチームも結成し、より大農の認知度を上げる活動を行っています。また、5年前に本校で発足した愛農会という農業系進路を目指している生徒の会にも協力を要請しました。秋田県連が企画した県連農ク6校でスイカの重さを競う「ジャンボスイカフェスティバル」の栽培管理を愛農会に任せました。これまで農ク役員が全て行っていた活動を全校農クで活動を分散させることにより活動の質が上がりました。

率先して農業学習に励む愛農会メンバーにスイカの栽培を依頼



3 活動評価

以上のような活動を行ったことで、役割が細分化され話題提供や交流が活発になったことでメディアに取り上げられる機会も増え、校内外に農ク活動を広げることができました。地域の方から「頑張ってるな。応援してるぞ。」と声をかけられることが増え、農業高校ならではの特徴を活かして地域に根付いていく感覚を得ることができました。地域コミュニティの輪が広がったことで、地域の貴重な資源といえる魅力的な人々やイベントなどの情報も知ることができました。農ク活動を農ク役員だけの負担にするのではなく校内全生徒や地域の方々と連携して行うことで持続可能な発信方法を確認できました。

多くの県内ニュースに出演し、活動を紹介することができました



4 農クのあるべき姿・今後の目標

地域、学校内の課題を理論的に考え判断し解決する科学性、農クだけで無く社会の一員として社会対して関心を持ちコミュニティを広げ、地域社会に貢献する社会性、地域や学校をより良い方向へ導くための責任感を持ちリーダーシップを発揮する指導性。これらのFFJ三大目標を農業クラブ員一人ひとりが心に刻み、日々活動を積み重ねることが大切です。秋田県で2番目に長い歴史を持つ高校、地域農業の核である高校として、大曲農業高校を残すためにさらなる魅力発信活動を行い、これからも地域に根付いた農ク活動を行っていきます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道深川東高等学校
生産科学科 2年 柴尾 尚央

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校ではSNSを活用した情報発信はまだ行っていません。しかし、私たちが日頃、行っている学校の活動や教育活動の一環である農業クラブ活動の認知度を上げるために取り組んでいることとして、学校ホームページを定期的に更新し、情報配信に努めています。また、本校で実施する販売会の行事等においては、新聞に折込広告を入れたり、町の広報誌に掲載したりと紙媒体を使った情報発信を行い、地域住民の年齢構成や家族構成など現状に合わせ、適切な方法で情報発信することで、地域とのつながりを深くさせると私は考えています。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現在、本校のクラブ員は34名。うち5名が執行部として、農ク事業や学科行事等の企画運営を行っています。しかし、三大目標を掲げ活動していますが、成果として満足できていないことに私は疑問を持ちました。活動単位の大小にかかわらず、目標達成のためには執行部の意識改革、そしてクラブ員をまとめていく手法が必要だと考えました。北海道連盟主催のリーダー研修で実践内容や具体的な課題解決に向けた取り組みなど、本校で活用できる事例について、まずは執行部で共有しました。

農業クラブ活動充実のため、新入生を対象にしたオリエンテーションでは、できるだけ楽しさが伝わるように工夫しています。2・3年生に対しては三大事業や、各活動で主体的に行動できるよう啓発につながる掲示をしています。また、それぞれの活動について目標設定や内容、反省を含め後輩に引き継げる資料を作るようにしています。

活動の継続・定着を図り、少しずつでも発展していける環境を創造することで、農業クラブ活性化につながると考えています。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

本校の所在する北海道深川市では、60歳以上の経営主の割合が55%を超え、年々上昇傾向にあるという全国と同様の課題を抱えています。そこで本校では地域の農業系短期大学と連携し、環境保全型農業を基盤とした地域経済を維持・発展させることや、新しい時代の農業および地域社会について考えました。私たちが農業の知識や技術を身につけ、発信することで、農業経営者・農業関連従事者・農業理解者を増やし、私たち自身も参画することで持続可能な農業の実現に貢献できると考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 茨城県立石岡第一高等学校

園芸科 2年 森本 みくる

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

～TikTokやInstagramなどで農業クラブのアカウントを作り、活動内容や学校の紹介をする～

- ・今の若い世代にも農業クラブのことや各学校の活動を知ってもらうためには、長尺のYouTube動画よりも、短時間で記憶に残る動画を投稿しやすいアプリケーションを活用するのが効果的だと考えました。日常生活の一コマや農業系の行事の様子などを手軽に発信することで、興味を持ちやすくなり、「楽しそう」「面白そう」といった良い印象を与えることができると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

～同じ県内の農業関係高校同士での交流会を年に1回ほど行う～

- ・同じ県内の学校同士で交流会を行うことで、移動の負担が少なく、気軽に会いに行けるという利点があると感じました。茨城県内でも年に1回以上、交流の機会となる行事は実施されていますが、移動費の負担などからクラブ員の一部しか参加できない状況がありました。現在ではオンラインでの交流も可能ではありますが、対面での交流によって、普段知ることのできない環境や活動に触れられる機会が得られるため、より有意義だと考えます。
- ・交流会では、イベントなどを開催することでクラブ員の興味・関心を引きつけ、学校間の連携をさらに深めることができると考えました。また、お互いの高校で育てている作物や取り組みを発表し合うことで、独自の活動を紹介でき、自分たちの学校への理解や関心を高めるきっかけにもなると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

～SNSを有効に活用し、農業の今を知ってもらう～

- ・農家さんの圃場や施設を実際に見学し、お話を伺う機会を設ける、あるいは農家さんが発信している動画や記事を参考にすることで、農業の現場をより深く理解できます。そうした情報を分かりやすくまとめて地域に発信することが重要だと考えます。発信方法としては、広報文よりも動画の方が若い世代の関心を引きやすく、農業の現状に興味を持ってもらえる可能性が高いです。
- ・自分たちが栽培した農産物を使って創作料理のレシピを考案し、地域のイベントや駅構内などで販売実習を兼ねた試食の機会を設けることで、食と農のつながりをPRできます。若い世代にも農業への関心を持ってもらえるような工夫として、当日の様子をSNSで発信することで、より高い効果が期待できると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立安中総合学園高等学校
総合学科 3年 萩原 杏菜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

学校でのクラブ活動や県内のクラブ員同士の交流している様子、さらに地域と学校間での農業をととした交流の様子をInstagramやエックスのアカウントを作り投稿する。そして、地域交流した企業や施設にSNSのアカウントがあるならば、活動をしている様子を投稿してもらう。SNSを有効活用すれば、農業クラブについて知らない人にも農業クラブ活動の魅力を伝える機会を増やすことができるので、地域の方々からも農業クラブ活動に参加してみたいという声が増えるきっかけになると考えられる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

県内の農業クラブ員同士が協力して、農業関連高校の合同文化祭のようなイベントを開催する。農作物や花苗の販売だけでなく、花苗を使ったフォトスポットや収穫体験など小さい子から大人まで、参加した全員が楽しめる出し物を企画することで、クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めることにつながると考えられる。

また、それぞれの学校での出し物については、各校の企画を持ち寄った農業クラブ員が学校間で連携してまとめ、各校の役割を決める。準備の段階から当日の運営までを一緒にすることで農業クラブ活動を活性化させることができると考えられる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

今日では、日常生活の色々な場面で機械化が導入されており、農業分野においても自動運転トラクターやドローンを使った農薬散布、自動灌水装置などスマート農業が浸透しつつある。そこで、農業の大切さを学んでいる私たち農業高校生が、小学生に実践を取り入れながらわかりやすく教え、「農業って面白い」と体験させることで、将来、農業をしたいと思う機会を増やすことにつながると考える。そして、今の若い世代の人はSNSを日頃からチェックしてる人が多いので、教えている様子や機械を使った農作業をしている様子などの画像をSNSに投稿することで、農業の魅力をより多くの人の目にとまらせ、持続可能な農業が広まっていくと考えられる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立羽生実業高等学校
農業経済科 3年 早川 桜姫

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・地域の除草作業、落ち葉はき等の活動にボランティアとして参加し、チラシ（学校の公式SNSのQRコード添付）を配布して宣伝する。
- ・県内で各校の生産物を持ち寄ってコラボ商品を計画・製造・販売を行う。
- ・地域のお店とコラボして商品開発を行う。
- ・学校行事として農ク主催のイベントを行う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・農業単独校以外の学校において他学科の生徒に農業体験をしてもらう。
- ・ミーティングの回数を増やし、校内の連携を強める。
- ・農クについてまとめた掲示物を校内で掲示し、流れができれば地域にも掲示できるようにしていく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・SNSを活用し、農業の魅力や日々の活動の様子を伝え、農業へ関心をもってもらおう。
- ・見た目が映える野菜を生産し広めていく。
- ・高校生でも生産できる場所を作り、そこで生産したものを販売できる場所も作り、その回数を増やすことで農業の持続化を図る。
- ・各種イベントへ参加し著名な方と交流ができる環境を整え、コラボできる流れを作る。
- ・スマート農業を広める（ドローンなどの機械へ興味を持ってもらう）。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立園芸高等学校

園芸科 2年 坂本 ひなた

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSで活動の様子や、収穫、農業の豆知識を発信する。動画や写真を使い、親しみやすい形で、情報を届ける。作物の配布、販売を告知し、地域の方や農家の声を活動に取り入れる。

他校との合同イベントを開催し、その様子を発信することでお互いの活動を知る機会をつくる。共通のハッシュタグを活用してSNS上で情報を共通しあうことにより、全国のクラブ員がつながる場をつくる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

作物栽培の工夫や新品種の栽培、スマート農業技術の体験などを通じて学びを深める。また、OBや農業経営者、専門家の講演により将来への視野を広げ、収穫祭や栽培コンテスト、農業体験交流会など、イベントを実施し、協力関係を築く、SNSやニュースレターで活動を共有し、クラブ員の一体感を高める。また、アレンジメント・栽培コンテストなどのイベントをクラブ全体で協力し企画運営をし、リーダーシップを育成する。成果発表や表彰の場を設け、モチベーションを高める。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

新しい技術や効率的な栽培方法を活用し、SNSや体験イベントで農業の魅力を発信しながら、地域や学校と連携して持続可能な農業を広める。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立相原高等学校
畜産科学科 3年 井上 未来

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校では販売活動、農業教育ファームを通して地域の方と交流している。しかし、新たな交流を図る機会が少ない。そのため、SNSを活用して情報発信、情報の拡大を行っていく必要がある。SNSは身近なツールであるため人の目に止まることが多く、情報の発信もしやすく、アンケート機能の利用によりニーズに合った情報を発信できるため、農業クラブ以前に農業高校そのものをよく知らない人にたいして、有効に情報提供できると考える。農業クラブの認知度を上げるために、まずは農業高校について知ってもらうことが必要だと考える。

また、地域・学校間のつながりを大切にするためには、今ある交流の輪を絶やさないことが大切だと考える。現在の相原高校は地域のお祭りやスーパーなどで販売活動をさせてもらっているが、いつ交流がなくなってしまうかわからない。そのため、交流を持ち続けたいと思ってもらえるような態度でいることが大切である。

SNSを活用することで地域・他校に情報を発信し、地域のイベントなどに参加し農業クラブの活動について広めていくことが認知度向上につながっていくと思う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業高校の生徒は、農業クラブ員である自覚があまりにないので、農業クラブの一員であることをすべての生徒に自覚してもらう必要がある。そのために農業クラブの活動についてのポスター掲示や、農業クラブ主導の活動やイベントを企画し、実際に農業クラブ活動に本部役員以外の生徒にも参加してもらうなどの取り組みを実施することが有効と考える。

また農業クラブ間の連携を高めるためには、校内にとどまらず、他校の農業クラブ員と交流する機会を充実させることが必要である。県連役員会だけでなく、他校間交流などが実施できると農業クラブがより活性化すると考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業への関心を高めることが、持続可能な農業を実現できると考える。そのためにSNSなどの情報発信のできるツールを利用することが有効な手段と考える。SNSで販売の日程やイベント告知、収穫した生産物、農法などを発信することで多くの人に農業を知ってもらうことができる。またSNS以外にも地域の人に向けた農業体験イベントを実施し、年間を通して農業に触れる機会を増やすことや、小学生や幼稚園生に向けた教育イベントで地域の子どもの間に農業に触れてもらうことで、世代を超えて農業に関心を高められる。多くの人に興味を持ってもらうことが、持続可能な農業を広めるためには最も大切だと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立加茂農林高等学校
生産技術科 2年 五十嵐 梓

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

他の学校の生徒と販売を行い、お互いの交流を深めることができる。本校では、田上道の駅で定期的な農産物販売を行っている。生物工学科が、各専攻の農産物や加工品を集め、販売者となり、1～2か月に1回程行っている。こういった取組を、新潟県内の農業関係高校へ派生し、県内の高校生が一体となって、人が多い道の駅などで農産物や加工品を販売し、農業高校生同士でより良い商品を作ろうと互いに成長しあえ、農業高校の取り組みを多くの人に知ってもらうことができる。

そのために、本県で行っている新潟県連盟の分科会や代議員会で交流を深め、SNS等で繋がっていく必要がある。また、イベントの様子を他の農業高校生と一緒にSNSで発信し、人気のあったものや売り上げを公開し、見た人が買いたいと思うような動画を発信する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校のクラブ員には「農業クラブの活動はどのようなものか知らない。」といった意見も多い。そこで最低でも年に一度農業クラブの活動に参加する場を設けたいと考えている。

ある小学校では全校生徒が地域のごみ拾いの活動をしていると聞く。そこで、クリーン作戦を全校単位で行えば、活動時に農業クラブにはどのような活動があるか知ることができ、クラブ員同士の交流にもつながると考えている。

まず農業クラブ活動にはどのようなものがあるか紹介し、一人でも多くのクラブ員に農業クラブの活動を知ってもらう。そして、各委員会や部活動に一つずつ別の農業クラブの活動を行ってもらい、最終的には全校生徒が同じ農業クラブの活動を行い、交流を深めたいと考えている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

近年、SNSを利用したショート動画（縦型動画）が発展し、様々な内容の動画が世の中を出回り、その中には農業に関する動画もある。視聴層には中高生や大人はもちろん、保護者から携帯を借りて動画を視聴する小学生以下の子どもも増え、幅広い年代に知られているようだ。

そこで、SNSを活用し、持続可能な農業の大切さや、近年発展しているスマート農業の動向を撮影、投稿することで、幅広い年代に知ってもらうだけでなく、農業高校生の日常などを映すことでの農業高校の学習の実情が中学生に共有され、農業高校に受験する中学生が増えるのではないかと考える。

以上のことからSNSの活用は高校生から若い世代だけでなく、中高年の世代にも伝えられるようになり、少しでも農業に興味を持つ人が増えるのではないかと考える。いずれはSNS上で農業の投稿が増え、農業に関する情報が増えるようにしていきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県下伊那農業高等学校
園芸クリエイト科 2年 市瀬 悠斗

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSをコミュニケーションツールとして考え、日々の活動をアップロードすることでフォロワーを徐々に増やし、文化祭、農業クラブ行事を継続的に告知する。イベント時の様子をアップロードしたい。

本校で取り組んでいる地元中学校とのりんご並木の交流会、放置竹林整備、茶葉を加工した和紅茶などのPRし商品化していきたい

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

やらせされている活動でなく、自ら取り組む活動にしていきたい。

農業鑑定、級位検定を学んだことがどう役立つのか実感をクラブ員に持たせたいと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

小中高での農業体験を進めていきたい。AI、ロボットなどの最先端技術に触れるきっかけを作りたい。食品ロスが出た時の対策を考えていくことが持続可能な農業につながる（具体例：地元特産品の干し柿である“市田柿”摘果後の実、皮の活用。柿酢など）

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立猿投農林高等学校
農業科 2年 君嶋 希彩

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を上げるためには、農業クラブの活動を学校外の人に多く伝えることが重要だと考える。例えば、若い世代や企業の方に情報を伝えるために、Instagramで各学校の農業クラブ公式アカウントを作成し、競技会や会議の様子やプロジェクト活動の成果等を発信する。更に農業のイメージ改善を図ることで現状の認知度を改善できると考えている。例えば、若者（学生も含めて）の考える農業のイメージは3K(稼げない・きつい・汚い)などのマイナスな印象が強い。そのため、このイメージの改善をするために、学校での実習の様子や実際に先進的な農家への見学研修の様子等を発信することでイメージを改善しつつ、学校と地域の連携の様子を多くの人に知ってもらうことができる。さらに、中学校や小学校との連携では、意見発表会やプロジェクト発表会の内容をわかりやすい形に変え、発表することで学校間の結びつきを強くするとともに、将来のクラブ員となる農業高校を進路選択としてくれる人も増やすことができると考えている。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるために、校内のクラブ員と農業クラブの執行部、常任委員での交流イベントを開催する。本年度、本校の執行部を中心に豊田市の花である「ヒマワリ」を栽培して、一輪ブーケとすることで生花の消費を校内のクラブ員に促して試みを実施している。交流活動以外では、校内のクラブ員に農業クラブの活動を詳しく知ってもらう。各種競技会や上位大会への進み方、各競技の勉強方法などを解説し、少しでも農業クラブの活動に魅力を感じてもらうように働きかけていきたい。この活動を執行部、常任委員が中心となって行うために、執行部、常任委員の生徒から各種活動に積極的に取り組み、経験・体験を記録していくことも大切であると考えている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

前提として、若い世代や農業高校生に農業の担い手になってもらうことが必要である。幼い子どものいる家庭をターゲットにした農業体験を高校で実施することで、幼いころから農業に触れてもらう機会をつくる。体験では大人（保護者）と子どもに分けて内容を変更し、年齢に関係なく農業に触れてもらう。大人（保護者）には、農業機械を用いた先進的な農業体験や企業の方や農家の方から、「日常の料理等に活用できる農作物の説明」や「買い物をするときにどういった野菜や果物が良いものか」等の身近な生活に関する内容も織り交ぜて講座を実施する。子どもたちには、播種などの体験をしてもらい、農作業の楽しさを理解できる講座を定期的で開催する。定期的に開催することによって、最終的に定植や収穫といった作業を体験してもらい、植物を育てる楽しさや奥深さを知ってもらう。さらには、子牛や雛などの家畜となる動物に触れることで、農業という産業に対する視野を広げてもらいたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立相可高等学校
生産経済科 3年 今西 葵

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

相可高校では、SNSの発信だけに力を入れるわけではなく、地域との関わりにも力を入れています。地域の企業との共同で商品開発や、栽培研究を行い、地域企業との関係を深め、企業側のSNSに相可高校が載ることで、相可高校に興味がない人に対して、相可高校に興味を持ってもらうことや、認知を広げることができると思います。また、企業の社長さんだけでなく、社員の人たちのSNSに載ることにより、企業のSNSだけではつながれないより広い人たちに、社員さんたちのSNSを通じてつながることができると思います。このように、SNSを活用しながら、地域や学校とのつながりを大切にし、農業クラブの活動を多くの人に知ってもらえるよう、工夫していくことが、認知度向上につながると私は思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員に農クの活動に興味、関心を持ってもらうためには、まだ相可高校で実践できていませんが、各専攻（園芸、作物、松阪牛、果樹）から食材を集め、自分たちが日ごろ育てているものがどれだけ美味しいか、試食会を開き、クラブ員に興味を持たせていきたいと思っています。また、校外活動として、ほかの農業高校との関りを深めるために、他学校の生徒同士で農作業を一緒に行うのも、興味、関心、交流をも深め、農業クラブの活性化につながると思います。実際に、他学校の生徒で、相可高校の松阪牛を育ててみたいと言ってくれた生徒もいます。私自身も、ほかの高校で、相可高校にはいない家畜の肥育や野菜、果樹などの栽培をしてみたいと思っています。このように、クラブ員が主体的に関われる活動を増やし、仲間とつながる機会を作ることで、農業クラブはより活発で魅力あるものになっていくと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

若い世代に農業に興味を持ってもらうためには、農業の魅力を知ってもらう必要がある。そのためには、小中学生中心に農業体験の場を作る。例えば、相可高校では実際に小学生に来てもらい、伊勢いもの収穫体験や松阪牛の畜舎見学などを行っています。松阪牛の体験をした小学生は、牛の説明についてほとんど知っていました。このことから、多気町では、松阪牛の農業について広めることができていると実感しました。小学生にも知ってもらい、興味関心を持ってもらうことで、より若い世代に持続可能な農業を広められると思います。また、高齢化が進んでいると言っていますが、現代の農業があるのは、先人の知恵があるからこそだと思うので、今は忘れさらつつある農業の技術や知識を、高齢の方たちと関わることにより、後世に伝えることや、逆に高齢者と農業を触れ合わせるにより園芸福祉につなげていくこともできると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 和歌山県立紀北農芸高等学校
施設園芸科 3年 堀田 知宏

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域での販売活動や保育園との交流体験のようすをInstagramなどで発信しているので、SNSのQRコードを記載したチラシ配りをする事で、農業クラブ活動について多くの人に知ってもらえると思います。農業高校同士だけでなく、様々な高校と連携し販売会や地域を巻き込んだイベントを行うことで農業クラブの存在を知ってもらえる機会が増えると思います。また地域の飲食店とコラボメニューの作成、販売することで地域交流だけでなく、農業クラブをアピールすることができると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

和歌山県では県内の農業高校が協力し「MKAK市場」というイベントをおこなっています。このイベントでは各校の生産物などを販売するだけでなく、各学校での取り組みや和歌山県の農業クラブの活動を展示したりしています。県内だけでなく県外の人にも知っていただきたいと思い、人の行き来が多いイオンモールなどで開催しています。普段の学校生活だけでは経験できないことや、多くの人と交流することができるので良い経験の場になっています。こういったイベントをすることでクラブ員の意識が高まっていくと思います。また他校のクラブ員と交流の機会も増え、各校、各地域の特産品についても知ることができると思います。県の農業クラブ全体で取り組む活動を増やし、活動の様子を校外だけでなく校内でも発信することで、より多くの生徒に農業クラブへの興味・関心を持たせることができると思います。多くの生徒が農業クラブに興味・関心を持ち、積極的に参加することでより農業クラブが活性化していくと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業は汚れる、しんどいや農業だけで生活するのは難しいといったマイナスなイメージが若い世代に定着していると思います。これらのイメージを変えるためには個人で小規模な経営をするのではなく、法人化し大規模経営する事でマイナスイメージを払拭できると思います。法人化する事で栽培班、企画班など各々の得意分野を活かして働くことができると思います。また大規模経営することで個人経営よりも借りられる金額も増え、最新型の大型機械などを購入する事が可能になり若い世代の新規就農者が増えていくと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立新見高等学校
生物生産科 3年 生田 湊

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSの運用は基本的に独立しており、各校での連携した運用は見られない。

より、効果的に活用するためには各校の農業クラブが気軽に情報共有や交流を深めることを目的としたGoogleアカウントを新設し、運用することで繋がりを強化することができるのではないかな。

競技会も運営・選手以外の生徒が身近に感じられるようSNSを使って発信できたら良い。

地元企業などのSNSとコラボすることで、地域間への発信も可能となる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

活動内容の認知度が低く、表面的に見れば会の運営に終始しているため、他の生徒からは面倒なことをしているだけと捉えられる可能性がある。

農業クラブを主体として、役員生徒以外も会の運営などに携わる機会を設けることが認知度の上昇につながるのではないかな。また、堅苦しい会だけでなく、農業クラブが主催となって他の生徒が楽しいと感じられる販売会やイベントの計画をする必要があるのではないかと考える。

また、SNSの効果的な利用も必要である

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

現状支援策はたくさんあるが、新規参入農家の目指す方向に最適な支援策が結びつけられておらず、新規参入のハードルが上がっている。

技術の投入はあるが、最新機器は総じて価格が高く導入が簡単ではない。農業以外の知識も問われることも使用しにくい点の一つである。

3Kの印象は完全に払拭出来ておらず、収入の安定化に対して懸念がある。

学校でやっている内容などをホームページやSNS等を使って様々な人に見てもらう機会を増やす。また、外部でのイベントなどに販売などで参加し、農業への関心を高めてもらう。

特に地元の市役所などと連携し、就農支援策やイベントでのコラボなどを学校と積極的に行うこともPRにつながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立伊予農業高等学校
園芸流通科 2年 篠澤 怜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・地域課題の解決に向けた取組を積極的に行う。

伊予農業高校では、各学科で地域と連携して、交流活動、商品開発、栽培研究など様々な活動に取り組んでいます。しかし、それらは学校側の意図に沿った学習機会を地域から提供していただくパターンが多く、地域の方々に支えてもらっている感覚が大きいです。地域と学校がより深い繋がりを持つためにも、地域から学校に要望がありそれらに応えていく地域課題解決型の取組を積極的に行っていくといいと考えます。そのためには、現在の取組だけではなく、過去の活動事例や、伊予農業高校の生徒はどのようなことができるのかなどについても積極的に発信していく必要があると思います。また、現在はホームページでの情報発信が主なので、生徒がSNSなどを用いて情報発信ができる体制の構築も必要だと考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・話し合いの場面を持つ。

伊予農業高校では、農業クラブ役員で農業に関する諸活動の是非についてディベートマッチをしています。学校内における様々な活動について、クラブ員である私たち自身がしっかりと目を向けて、その意味を理解したり、改善点について洗い出したりするいい機会となっています。この活動をクラブ員全体や、さらには地域の方々も巻き込みながら実施することで、農業クラブ活動がより活性化していくのではないかと考えています。

- ・地域行事へ参加する。

伊予農業高校では、農業クラブへの関心を高めてもらうために、地域行事へ積極的に参加しています。具体的には、野球拳全国大会やはんぎり競漕大会に毎年出場しています。また、今年はオドル野菜プロジェクトにおいて運営の一役を担いました。このような活動は、農業に興味がある人以外にも、農業クラブの活動を認知してもらえる有効な活動になっていると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・農業の経験がない人でも気軽に農産業に就労できる環境を創造する。

持続可能な農業を進めていくためには、人手の確保は無視できない問題だと思っています。高齢化が進む中で若い世代の農業への参入が注目されていますが、農業は50～60代でも現役世代と呼ばれる世界です。そのため、幅広い世代を農業の後継者として捉え、働きやすい環境を整備することが大切になると考えます。一つの手段として、農業の企業化を推進し労働時間や給与を安定させることで、職業選択のハードルを下げることなどが有効だと思います。そのためには、施設園芸の拡大や技術革新が必須になります。若い世代が新しい農業の在り方を研究・推進し、農業を生業とする会社を起業できるようになればいいと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 大分県立日出総合高等学校

農業経営科 2年 西田 尚生

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- (1) 実態：①HPやSNSの活動が少ない。②学校内の生徒の中で農業クラブの活動内容や、存在を知らない人が多い。
- (2) 問題点：①農業クラブのことに、興味、関心がない生徒やそれ以前に存在を知らない人が多い。②SNSで授業風景や、実習での様子を投稿できていない。③SNSの活動が少ない。
- (3) 問題点解決のための具体的取り組み：①ショート動画や農業クラブのHP作りやハッシュタグ作りなどのSNSの活用②取材やポスターの取り組みを増やし、農業クラブの知名度をUPさせる。
- (4) まとめ：①農業クラブに対して「やらせている感」をなくし、SNS活用を増やして、幅広い年代に広めて、農業クラブの知名度をUPさせる。②農業クラブの活動を共有し、バランスの取れた情報発信を行う。③これから、農業クラブを学校の魅力として推していく。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- (1) 実態：①農業クラブのことがあまり知られていない。②実感がないまま入っている。
- (2) 問題点：①SNSに力を入れると高齢者の方たちに伝わらない。②ポスターや新聞は時間がかかる。③写真や動画をあげられない学校がある。
- (3) 問題点解決のための具体的取り組み：①インスタグラム等でアカウントを作り、活動している写真や動画をあげる。②活動している様子を動画や写真を撮り分かりやすく説明する。
- (4) まとめ：①インスタグラム等でアカウントを作り、活動を広める。②規則が厳しいところは、先生と相談し、慎重に動画を作る。③入学してすぐ、どのような活動をしているか動画や写真などで楽しそうに紹介する。④地域の人たちに簡単なポスターを作り、即売会等に来てもらう。⑤学科新聞や学級新聞とは別に農業クラブの新聞を作る。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- (1) 実態：①授業での普及（そもそも高校生と高齢の農業者との接点が少ない。）②先進地見学や外部講師招聘の実施
- (2) 問題点：①地域連携などで高校生と積極的に交流しているのは若手農業者がほとんど②まずは交流する機会を作らないといけない。
- (3) 問題点解決のための具体的取り組み：①ベテラン農業者との繋がりを持つ機会を得る。②座談会形式で双方の考え方を伝え合うような機会を作る。③交流した動画や写真などをSNS等でコンテンツとしてUPする。
- (4) まとめ：①利益を出している若い農業経営者のもとにインターンシップ等で行き、実践や経理を学ぶ。②都道府県や地方振興局側が若者に興味を向かせるようなアプローチをして、高校生や中学生に現在の農業のあり方を発信してほしい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 秋田県立大曲農業高等学校

農業科学科 3年 関口 宗浩

生活科学科 3年 佐藤 美音

生活科学科 3年 森本 美桜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

繋がりを大切にするには年間を通して地域に話題を提供することが必要であり、地域交流の機会を増やすべきだと考えています。本校では若者世代に向けたSNSを活用した情報発信のため学校公式インスタグラムを開設しました。日々の行事や農ク活動を週3回を目安に投稿しています。半年に満たない期間で約500名の方にフォローしていただき若い世代に農クの活動を発信できたと感じています。地域交流では農業高校が地域農業の拠点となることを目標に農業塾、農産物販売会、放課後カフェなどを開催し農業を通じた地域の方との交流を行っています。地域行事にも積極的に参加し、校外での展示会や販売会、共同研究など幅広い分野での地域・学校間での繋がりを実現しています。地域の宝である農業を学ぶ高校生だからこそ、学校と地域の交流を実現させ繋がりを深めることができると考えています。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

活性化させるためには単位農ク間での交流や農クならではの活動を行うことが必要だと思います。本校の所属する秋田県連盟ではジャンボスイカフェスティバル活動があります。どれだけ大きなスイカを栽培できるか県連6校でのコンテストを毎年行っています。Googleclassroomなどで栽培状況を定期的に投稿し収穫後にオンラインで結果発表交流会を行っています。しかしジャンボスイカは基本的に美味しくなく食べることができないため栽培のモチベーションが低く、栽培を担当するクラブ員が少ないことが課題です。今後は食べられるスイカや新たな作物の栽培コンテストを行い、夏の研修会での試食会などを考えています。このような単位農ク間での交流や各単位農クでの農業に対する魅力のある栽培や生産を行うことで農ク活動を活性化させることができると考えています。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続可能な農業を広めるためには地域の方と協力して普及活動に取り組み、持続可能な農業を身近に感じてもらうことが必要だと思います。農林水産省がみどりの食料システム戦略を掲げ持続可能な農業を進めている中で、農業高校生、農クとしてできることとして教育があると考えます。子どもたちに新しい農業として循環型農業など目に見える持続可能な農業を農業高校と地域が共同研究し、開発した教材などで魅力ある農業を普及することが考えられます。このことにより、子どもたちが農業に興味関心寄せてくれ、将来の持続可能な農業の維持にも繋がると考えます。地域の消費者の方々にもこのままの農業を続けていては、持続困難であることを伝えることにより、生産物や環境に優しく価値のある持続可能な農業を実現させることができると考えています。今の農業を学び、今を生きていく農業高校生の力は地域に広げることができる大きな力です。農クが率先して広めることでより価値のある持続可能な農業が実現できると考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立三浦初声高等学校

都市農業科 2年 鈴木 晴捺

都市農業科 1年 敦森 和香

都市農業科 1年 今瀬 恵太

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

主な活動内容として神奈川県では、人通りの多い場所である新幹線が通る駅の「小田原」、「新横浜」、「海老名SA」の3か所で各地に農業クラブ本部役員が出張します。出張先で、各校から花、野菜、ジャムやクッキーなどの加工品を募り、学校生産物として販売します。この出張販売で、他県の人や外国人などに対して農業高校を認知するきっかけとなる場所になると見込まれます。さらに農業高校を知らない人もいて、抵抗がある人でも、クッキーなどの加工品を提供し試食を実施することで、より手に取りやすくなると考えます。

農業体験を上げると、これは既に各学校の学科や専門研究部にて行われている農業高校もあります。実例を挙げると、平塚農商高校では近隣の小学生と協力して田植え体験を行っています。また、相原高校の地域活性の活動の一つとして、一般の人を対象としたポニーのエサやり体験などを行っています。他にも各種特色のある体験等があるため、これらの活動から地域や学校間の繋がりが得られると考えられます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

学校全体での行事である文化祭などを通して、出し物の一つとしてのミニ鑑定競技のようなものや、ポスター作成による広報活動を行っている事例が多いです。また、農業クラブ以外が主体のイベントでは農業クラブへの興味・関心を持ってもらにくいという意見が出ました。以上のことから農業クラブが主体のイベントを行い、興味・関心をもって、もらいやすくするという意見でまとまりました。

イベントの具体案としては、三浦初声で行われている収穫祭を元としたようなイベントや、鑑定競技の内容を引用したクイズ大会、LHRなどの時間を利用したクラブ員全員での交流、農業クラブと専門部で連携した販売などのイベントなど、以上の案ができました。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

神奈川県の各農業高校は地域の人たちに農業について教える活動をしようとまとまりました。中央農業高校では、瀬谷区の小学校4～6年生を対象に酪農、養蜂、小麦、いも、オリーブを使った調理体験を行いました。吉田島高校ではアジサイ祭りで快晴ブルーを販売や、平塚農商では小中学生が農業の体験を生徒と行いたいと考えています。相原高校では小学生、幼児に向けた農業体験、出張授業、食育活動をしています。このような活動をして農業に対しての関心を高めることで、持続的な農業を広められるのではと考えました。

参加者課題レポート

第 1 分科会

第2会場

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第2会場	岐阜県立岐阜農林高等学校	埼玉県立秩父農工科学高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	北海道	帯広農業高等学校	農業科学科	2	小島 琉 維
2	栃木県	宇都宮白楊高等学校	農業経営科	2	松 本 蓮
3	群馬県	吾妻中央高等学校	環境工学科	3	丸 山 慶
4	埼玉県	鳩ヶ谷高等学校	園芸デザイン科	3	碓 井 律 芽
5	東京都	農芸高等学校	食品科学科	2	長 瀬 海 音
6	神奈川県	三浦初声高等学校	都市農業科	3	大 向 莉 生
7	新潟県	新発田農業高等学校	食品科学科	2	山 口 友 菜
8	長野県	木曽青峰高等学校	森林環境科	3	板 野 光 希
9	愛知県	佐屋高等学校	園芸科学科	2	川 村 尚 久
10	三重県	愛農学園農業高等学校	農業科	3	植 西 拓 仁
11	和歌山県	南部高等学校	食と農園科	2	火 縄 真 代
12	岡山県	興陽高等学校	造園デザイン科	2	清 水 夢 海
13	愛媛県	伊予農業高等学校	食品化学科	2	塩 見 美 桜
14	鹿児島県	山川高等学校	園芸工学・農業経済科	3	椎 葉 琉 樹

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
15	岐阜県	岐阜農林高等学校	流通科学科	3	藤 井 優 風
16	岐阜県	岐阜農林高等学校	流通科学科	2	大 野 遥 稀
17	岐阜県	岐阜農林高等学校	森林科学科	2	野 一 色 美 咲

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
18	埼玉県	秩父農工科学高等学校	農業科	3	山 中 優 那
19	埼玉県	秩父農工科学高等学校	農業科	3	彦 久 保 心 里
20	埼玉県	秩父農工科学高等学校	農業科	3	山 中 涼

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか」

東海ブロック 岐阜県立岐阜農林高等学校

流通科学科 3年 藤井 優風

流通科学科 2年 大野 遥稀

森林科学科 2年 野一色美咲

1 はじめに

岐阜県内には7校の単位クラブがあり、約2600人のクラブ員が所属しています。7つの学校は最大160km離れており、一堂に会することが難しいです。

しかし、2020年オリンピックに向けて岐阜県連で何かできないかと相談したところ、「岐阜県農業チャレンジ！ひょうたんイルミおもてなしプロジェクト」をスタートしました。県下7校で協力し、ひょうたんを収穫し穴をあけました。開ける穴は、清流をイメージし、各校で自由にあげてもらいました。各校の協力のおかげで、無事に全てのひょうたんランプを完成することができました。こちらが完成したイルミネーションの様子です。昼間でもたくさんの人が興味を持ってくださり大成功しました。

また、県内のクラブ員や地元岐阜の方々にも作品を見てもらいたいと考えました。そこで、岐阜市主催の「駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション」事業に参加しました。設置作業では、県下七校の農業クラブ員が参加し、一丸となって行うことが出来ました。



2 活動内容

① JR岐阜駅前のひょうたんイルミネーション

2022年～2024年の3年間、「ぜひ設置してほしい」という岐阜市からの要望に応じてJR岐阜駅前でイルミネーション事業を本校単独で行っています。活動内容として、クラブ員にイルミネーションのデザインの案を募集しました。提出されたデザイン案を執行委員で絞り、クラブ員の投票によってデザインの案を決定しました。また、クラブ員が放課後に集まり、1時間ほどひょうたんにニスを塗り直したり、ひも状の電飾にひょうたんをくくりつけたりするなどボランティアを募り、多くのクラブ員に参加し、校内でもさらに農業クラブを知ってほしいと思い、活動を実践しました。昨年度のボランティアの参加人数は合計で約80人でした。JR岐阜駅での設置では、約30人のクラブ員がボランティアとして参加し、5時間ほど作業をしました。こちらが完成したイルミネーションです。ボランティアに参加したクラブ員からは、「普段関わることが少ない他学科の人と関わることが出来て楽しかった」「1つの作品を作り上げたみたいで達成感があった」など様々な感想がありました。

イルミネーションの設置や破損したひょうたんの取り換えなどで駅前に行った際には「このイルミネーションすごいねえ。いつも見てるよ」「ひょうたん何個使ってるの?」「ひょうたん触ってもいい?」と声をかけていただき、地域の人と交流をすることが出来ました。

SNSを活用して若い世代に活動を広めることを目的として、ハッシュタグの設置も行いました。Xやイ

Instagramで全10件ほどしか投稿はありませんでしたが、「めっちゃきれいだった!」「光り方がお洒落できれい」「イルミネーションが素敵!」との声がありました。今まで、班での指示がうまくできない、ひょうたんが落ちたり割れたりする、電飾が断線するといった課題が出てきました。こうした課題を改善するため、今年は執行委員がひょうたんの付け方をよく理解すること、クラブ員とコミュニケーションをとり指示を理解してもらうことなどを改善していけたらと思います。今までのSNSの利用方法としては、ハッシュタグの設置のみを行いました。このハッシュタグは、ひょうたんイルミネーションを見た人に、SNSに投稿する時に使っていただくことをねらいとしたものです。執行委員の話し合いでは、ひょうたんイルミネーション事業専用のSNSアカウントを作成する案も出ました。しかし、SNS利用の壁に直面し、慎重になる必要があると考えたため行いませんでした。その壁とは、個人情報特定の危険性や、運用の難しさのことです。例えば、ひょうたんイルミネーション事業のアカウントをフォローしている人の中には岐阜農林高校の生徒がいるのではないか、それに加え、過去の投稿をさかのぼり、個人情報が特定されてしまうかもしれないという危険性があったからです。さらに、1年に1度の行事のため、投稿する内容が少なく、広報活動としてあまり効果的ではないのではないかと考えました。

SNSの活用で得られた効果は大きいと感じていますが、地域の人と現地で交流し想いを聞くことで、学校や農業クラブの活動を直接広めていけたのではないかと感じています。



② 岐農祭でのひょうたんストラップ体験

ひょうたんイルミネーションには令和元年に本校で栽培したひょうたんを使っています。ですが、年々ひょうたんが劣化し、割れてしまうものが増えてきたため令和6年度、再びひょうたんを栽培する計画をたてました。しかし、イルミネーションに利用する予定だった千成ひょうたんの栽培はうまくいきませんでした。その理由として、栽培方法の理解不足、成長が早く管理が追いつかなかったなどの栽培管理が甘かったことや土壌の状態を考えずに追肥してしまったことが要因としてあげられました。そこで、別の場所で栽培していた豆ひょうたんを利用する計画へと変更しました。昨年12月、本校で行われる文化祭、通称「岐農祭」に訪れた方に向けて、豆ひょうたんを使ったストラップづくり体験を実施しました。



この体験は「ひょうたんに触れてみよう！～自分だけのストラップづくり～」と名付けました。作り方は、豆ひょうたんにペンで思い思いの絵を描き、飾りひもを結ぶというものです。会場の教室のホワイトボードにスライドショーでイルミネーションの様子を流して説明を行っていききました。特に飾りひもの結び方の説明は難しく、執行委員と一緒にやりながら教えていったため、1人1人のお客様とじっくり話をすることができました。「これ学校で作ったの？すごいね！」「イルミネーション見に行きたい」と興味を持っていただくことが出来ました。また、この活動によってより多くの地域の方に農業クラブを知ってもらえた実感しました。

最終的に約60名の方が参加してくださり、ストラップ体験は大成功で終わることが出来ました。

3 活動の成果

ハッシュタグの設置でSNSを利用してもらうことによって、農業クラブの活動を周知しやすくなり、より多くの皆さんに関心を抱いていただくことが出来ると実感しました。一方で、どんな人なのか、どんな気持ちを抱いていただけたのかなど、雰囲気や言葉、表情などからお互いを知ることがより大切であると実感できた経験となりました。JR岐阜駅でのイルミネーションを継続していったことで、市民の皆さんだけでなく駅を利用していただく方、駅に訪れてくださる方にも興味をもっていただけたと感じています。

4 これからの展望

今回は、SNSでの投稿が少なく、十分に情報を発信することが出来ませんでした。もし今後もこの活動を実施していくのならば、それを改善するために「#岐農農業クラブ」など親しみやすく、岐阜農林高校だと分かるようなハッシュタグを設定し、SNS投稿が増えるといいと思っています。また、様々な年代の人が閲覧できる学校のホームページでの広報をしたりしていけたら、ひょうたんイルミネーションをもっと多くの人に知っていただけたと考えています。また、もしSNSアカウントを作成するならば、先輩から後輩へと1つのアカウントの引き継ぎ、写真の撮影・編集までを生徒が行い、先生に投稿をしていただくなどの実践をして継続的な運営ができると良いと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道帯広農業高等学校
農業科学科 2年 小島 琉維

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

クラブ員が地域の発展を牽引するスキルを磨くため、学校・行政・地域が一体となった農業学習を展開しました。北海道博報堂や地元企業の満寿屋商店と協働した「社会課題の解決を学ぶ新商品開発プログラム」ではクラブ員が主体的に商品企画から製造・販売を行い、地域産業の担い手としてスキルアップを図りました。商品化された製品を満寿屋商店で販売し、地域への還元と活性化に結び付けることができました。また、社会福祉法人刀圭会と運営した子ども食堂は「みんなのカレープロジェクト」と題し、スープカレーで有名な奥芝商店と連携。SDGsを意識したカレーのレシピ開発に携わり地域社会の課題に地域とともに取り組むことができました。この活動は97%のクラブ員が関連産業と協働した活動が地域振興につながったと回答。地域活性化のロールモデルとなる活動をSNSで発信することで、農業クラブの認知度向上につながると考えました。



2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

帯広農業高校では5学科が一致団結し、「帯農フェス～大収穫感謝祭～」を企画しました。収穫体験に加え、生産物の販売会や各科の特色を生かした体験コーナーを設置。体験コーナーでは自動操舵トラクターの試乗体験や森林科学科が本校実習林の林間散策ツアーを実施。クラブ員が主体的に運営し、地域に日々の学習成果を発信することができました。この活動は98%のクラブ員がチーム帯農として、地域のニーズに応えることができたという回答。地域社会と農業がともに歩む姿を具現化し、持続可能な農業の推進への一歩となり、農業クラブ活動の活性化につながると考えました。



3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

帯広農業高校は「DXスマート農業推進校」として、大学・団体と連携し、スマート農業に特化した農業学習を展開しています。営農支援アプリ「アグリノート」、作業記録ツール「レボサク」を活用し、農場データの記録・分析から実地データの効率的な活用技術を身に付けています。さらに、9名のクラブ員が農業用ドローンオペレーターの資格を取得。持続可能な農業の実現に繋がる手段として、体得することができました。この取組は98%のクラブ員がスマート農業の可能性を実感できたと回答。次世代技術の導入が私たちの世代の持続可能な農業を担っていく決意に繋げることができました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立宇都宮白楊高等学校
農業経営科 2年 松本 蓮

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

・宇都宮白楊高校では、産業教育フェアなどの校外での活動に参加し、環境整備や会場装飾など行うと同時に白楊高校についてまとめた学校紹介の展示を行っています。このような校外でのイベントは様々な年齢層の方々が参加するので多くの人に情報発信をすることができると思います。また、地域の方々とコミュニケーションを取ることができるので、会話を重ねて地域の方々との繋がりが強くなることでより、農業高校の魅力が伝わりやすくなると思います。このようなイベントに各農業高校が積極的に参加し、学校紹介の展示などを行うことでより多くの人に情報を発信できるのではないかと思います。SNSの活用については学校のHP上に農業クラブ活動のページはありますが、更新がほとんどされていない現状なので今後の課題として取り組んでいきたいです。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

・宇都宮白楊高校では、地域の方々と交流目的での塗り絵の催し物を行っています。このような催し物は地域の方々と交流し、話を聞けるのと同時に話を聞く中でその地域に隠れていた課題やSDGsに関する問題に気付く場にもなっています。「問題に気付く」といった小さなことを重ねていくこと、それが地域課題解決やSDGsに繋がっていくのではないかと思います。私たち個人が出来ることはとても小さいので、まずは問題に気づき、それを仲間に伝えて協力し合い、先生方や学校、地域連携をしながら問題解決へと近づいていく、それが私たちのできる最大限の行動だと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

・宇都宮白楊高校では、校内意見発表会と校内プロジェクト発表会を通してスマート農業や農業に関する情報を発信するなどのPR活動を行っています。これらの発表会は、まだ入学したばかりの新入生も含めた白楊高校の農業クラブ員に対して、新しい知識や画期的な考えを与えてくれる場となっています。私も高校入学時、先輩や同級生の話を聞いてとても驚かされました。その時から農業に対する興味が強く沸き、農業クラブに入るきっかけにもなりました。農業クラブ活動での発表も大切にしながら、若い世代の集まる場などに出向きPRすることで若い世代にも興味を抱いてもらえると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立吾妻中央高等学校
環境工学科 3年 丸山 慶

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校では学校公式のInstagramで学校全体の活動が投稿されており、地域の方々も活動を知ることができるようになっています。そこに生物生産科が育てた花と環境工学科が作ったプランターを地域に贈呈（図1）している様子も投稿されており、地域の方が農業クラブについても知ることができます。また、その活動の様子は地域の観光協会のInstagramに投稿され、さらに多くの人に見ていただき、農業クラブの認知度が上がったのではないかと思います。

このような取り組みはメリットが多くありますが、リスクも伴います。具体的には個人情報の特定や関係のない人が映り込んでしまうことです。そのようなことが起こらないように、投稿する写真や動画のチェック、何かあった際の迅速な対応ができるように事前に対策しておくことが大切だと考えます。リスク管理をしつつ地域への奉仕活動をSNSに投稿していくことで地域や学校間での繋がりが強固なものになると思います。



図1 赤岩地区プランター贈呈

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

最先端の技術で仕事をしている外部の方をお呼びした授業や、複数校と一緒に施設を見学するような合同授業があればクラブ員の興味、関心、交流が高められるのではないかと考えました。しかしそれにはデメリットや課題もあります。まず、外部の方をお呼びした授業をするという考えについては学校と外部の方の予定が合わないといけませんし、何より外部の方の時間を奪うことになってしまいます。そのため、外部の方をお呼びするには綿密な計画を早い時期から進めていくことが大切です。しかし、実施できた際は通常の授業より実践的なことが身につくと思います。

尚、複数校と一緒に施設を見学することについてはすでに行われていますが、施設の見学がメインで学校間の交流はあまりできませんでした。施設の見学をしつつ、学校間の交流ができる場があればより農業クラブの活性化につながるのではないのでしょうか。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

若者に対してはSNS、高齢者には広報や回覧板での情報の発信、そして全世代に消費者の声が届きやすい環境の整備などがあると考えました。10代、20代のInstagramやツイッターといったSNSの使用率を調査したものを調べるといろいろなサイトで60～80%を超えており、SNSでの情報発信が若者世代に効果があると考えました。それに対し、50代、60代の使用率は30%代まで落ちてしまい、あまり効果が無いのではないかと考えました。そのため高齢者に対しては広報での情報発信が有効だと考えます。公益社団法人日本広報協会によるある市の広報の閲読頻度の調査によると、ほとんど毎号読む割合が10代、20代では20%程なのに対し、50代、60代は70%を超え、70代に関しては80%を超えるそうです。若者にはSNSで、高齢者には広報で消費者の声が届きやすい環境の整備を行うことで、生産者のモチベーションにつながると考えます。自分の作った作物を「美味しい」と言って食べている様子がわかるような仕組みがあれば、消費者や次代を担う子供たちのためにも、生命の持つ能力を活かし補い合うことで、化成肥料や農薬の使用削減や環境への配慮をした持続可能な農業にチャレンジしていただけるのではないかと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立鳩ヶ谷高等学校
園芸デザイン科 3年 碓井 律芽

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

日々の活動である花壇づくりや野菜・花の栽培、文化祭での出し物といった取り組みを写真や動画で紹介すれば、普段農業に触れることの少ない人にも農業クラブの存在を身近に感じてもらうことができます。また、他校の SNS の内容に対して感想や意見、質問などを送り合ったりすることで、自分たちの学校の活動の幅が広がると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

たとえば花壇制作では、単に花を植えるだけでなく、花壇のデザインをクラブ員のみんなで考えるなど、創意工夫の場を設けることでクラブ員それぞれの個性を活かしながら楽しんで参加できるようになると思います。また、育てた作物を使ったレシピを考えてみんなで発表し合ったり、文化祭での出し物をクラブ員全員でアイデアを出し合ったりして準備を進めることで、連携や交流を深められると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業は高齢化が進み、担い手不足が問題となっています。そのため若い世代である私たちが農業を理解し、積極的に発信していくことが大切です。最近ではお米などを始め、食材の高騰や食の安全といった身近な問題と農業を結びつけて考えることで、多くの人に関心を持ってもらうことができると思います。また、ドローンやICTなど新しい技術を学び、実際の農業に取り入れる体験を通して、若者の視点で持続可能な農業の未来をつくることもできると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農芸高等学校
食品科学科 2年 長瀬 海音

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSを活用して農業クラブの認知度をあげつつ、一般の方とのつながりをより広げ、企業の公式SNSやブログのやり方を模倣することであると考えている。例えば、ライフハックや珍しい情報などを豆知識として公式SNSに発信し、豆知識になる情報を発信することである。そうすることで、フォロワーは保護者などの学校関係者だけでなく、大衆が興味を惹かれて私たちを知るきっかけになり、地域ごとの特性で他校と差別化しつつ共存もできると考える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現在都立農芸高校が関係する農業クラブを活性化させるものとして、選挙で選ばれた役員の交流会、都連盟大会などがある。特に都連盟大会は一年生の時に全員が参加し、農業クラブ活動へのあこがれを持つことができる。そこで、農業クラブにかかわる情報（プロジェクトの進捗・独自の活動）をそれぞれの高校から集めて投稿することで農業クラブを行う上で良い刺激になることから、このSNSで他校や外部に知ってもらい、新しい連携を生み出すなどの期待が考えられる。自校のことが投稿されるようになったときに関係のない生徒にもこのSNSがあることを呼び掛けることで農業クラブ活動を知る機会にもなると考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

日本の少子高齢化はとどまることを知らず、この先はどの産業でも今の社会を維持しようとすれば人手不足になることが予想される。この対策として日本政府は特定技能制度を制定している。私はこの制度を活用することで持続可能な農業を目指せると考える。そのためにも課題は大きく2つあると考える。ひとつは外国人労働者とのコミュニケーション、もうひとつはアピールと募集である。一つ目の課題の解決策として、農業系高等学校や農業大学校、農業研修での実用的な英語教育の充実が必要であると考えている。外国人労働者が全員英語を話せるとも限らないが、フィリピンは英語が公用語であるし、ベトナムなども英語教育をしている。それに対し、少なくとも我が校でのことであるが英語の授業は教科書を淡々とこなすだけでテストも暗記でどうにかになってしまい、スピーキングの授業が少なくて足りていないように感じる。農業大学校の研修科には英語のカリキュラムがないところがほとんどである。外国人労働者と協力して持続可能な農業を行うにはしっかりとコミュニケーションをとることが大切であると考えている。そのための解決策として、国と民間のどちらもが日本の農業や農村についてのアピールをすることが必要であることから、日本で農業をすることの素晴らしさを海外に発信していく。SNSを活用し、作っている作物や環境、美しい自然について、農業のすばらしさを発信するのが良いと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立三浦初声高等学校
都市農業科 3年 大向 莉生

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

主な活動内容として神奈川県では、人通りの多い場所である新幹線が通る駅の「小田原」、「新横浜」、「海老名SA」の3か所で各地に農業クラブ本部役員が出張します。出張先で、各校から花、野菜、ジャムやクッキーなどの加工品を募り、学校生産物として販売します。この出張販売で、他県の人や外国人などに対して農業高校を認知するきっかけとなる場所になると見込まれます。さらに農業高校を知らない人もいて、抵抗がある人でも、クッキーなどの加工品を提供し試食を実施することで、より手にとりやすくなると考えます。農業体験を上げると、これは既に各学校の学科や専門研究部にて行われている農業高校もあります。実例を挙げると、平塚農商高校では近隣の小学生と協力して田植え体験を行っています。また、相原高校の地域活性の活動の一つとして、一般の人を対象としたポニーのエサやり体験などを行っています。他にも各種特色のある体験等があるため、これらの活動から地域や学校間の繋がりが得られると考えられます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

学校全体での行事である文化祭などを通して、出し物の一つとしてのミニ鑑定競技のようなものや、ポスター作成による広報活動を行っている事例が多いです。また、農業クラブ以外が主体のイベントでは農業クラブへの興味・関心を持ってもらにくいという意見が出ました。以上のことから農業クラブが主体のイベントを行い、興味・関心をもって、もらいやすくするという意見でまとまりました。イベントの具体案としては、三浦初声で行われている収穫祭を元としたようなイベントや、鑑定競技の内容を引用したクイズ大会、LHRなどの時間を利用したクラブ員全員での交流、農業クラブと専門部で連携した販売などのイベントなど、以上の案ができました。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

神奈川県の各農業高校は地域の人たちに農業について教える活動をしようとまとまりました。中央農業高校では、瀬谷区の小学校4～6年生を対象に酪農、養蜂、小麦、いも、オリーブを使った調理体験を行いました。吉田島高校ではアジサイ祭りで快晴ブルーを販売や、平塚農商では小中学生が農業の体験を生徒と行いたいと考えています。相原高校では小学生、幼児に向けた農業体験、出張授業、食育活動をしています。このような活動をして農業に対しての関心を高めることで、持続的な農業を広められるのではと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立新発田農業高等学校
食品科学科 2年 山口 友菜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

新発田農業高校ではHPやnoteを活用した情報発信を行っているが、地域や他の学校への情報共有のツールとしてあまり機能していないように感じる。そこで、現代の情勢に合わせて学校の公式Instagramを開設し、実習風景や農産物・加工品の販売日を投稿することを代案として考えた。現在、多くの地域団体・学校がInstagramを通じた情報発信を行っており、人々の情報収集に欠かせないツールとなっている。また、地域や学校間の繋がりを深めるための糸口となるものが少ない状況でもあるため、Instagramという共通のツールを交流の糸口とすることが有効と考える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現在、農業クラブ各種大会にて学校間の交流があるが、年に数回程度であり顔や名前を覚えるだけで終わってしまうのが現状である。また、農業クラブを活性化させるためには学校間における競争意識を高めることが重要と考える。

まずは、学校間の交流を会議や大会のみならず、農産物の栽培状況の報告・情報交換など交えることで農業実習の充実に繋げたい。また、農業クラブの3大行事における鑑定の共同学習や研究内容の報告会などを学校間で行い、「あの学校には負けたくない」という競争意識を芽生えさせることで農業クラブ活性化への刺激となると考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

①保育園・小中学校との交流

高校生が指導者となり、保育園児や小中学生とともに農産物の栽培体験を行い、農業の魅力や楽しさを伝える。

②地元の農家との交流

農業の実情を知るためにはやはり現場で働く人に聞くことが一番である。

農家の方から農業の実情・魅力等を聞くことで実際に農業へ挑戦しようとする気持ちに繋がると考える。

③補助金の増加

農業に興味がある人は多く存在するが、設備など費用の面で敬遠されるケースが現状である。新規就農における補助金の増額が行われれば負担も減り、農業を始める一歩を踏み出しやすくなるのではないかと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県木曽青峰高等学校
森林環境科 3年 板野 光希

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの活動を学校公式Instagramなどに投稿し、様々な方に農業クラブの存在を知ってもらうことが重要だと思います。活動としては、地域の農家や企業と連携して実習・研修を実施する、地域団体との共同イベントなどが例として挙げられます。「SNSで興味を引き、地域の方々と直接交流し、その様子を再びSNSに投稿する。」この循環を作ることによって、認知度と連携力を同時に高めることができると考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員同士が積極的に関わり合い、地域や他団体との結びつきを強める活動が必要不可欠だと考えます。例えば、農業クラブ員で小中学校に訪問し、農業の体験や農業の魅力を知ってもらえるようなイベントを行うことで、幅広い世代に農業の魅力を感じてもらおうと同時に、イベントの企画運営においてクラブ員同士の連携も深まるのではないかと考えました。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

SNSや動画配信、収穫体験などで農業の魅力ややりがいを広く発信し、興味を持ってもらうことが重要だと考えます。さらに、ドローンやセンサーなどのスマート農業技術を導入して省略化と高品質化を図り、技術や経験を学びつつ、販路拡大や広報活動を若者が担うことで、世代間の協力体制を築きます。そうすることで、地域の活性化にもつながると考えます。

そして農業に対するネガティブな印象をなくしていく努力も必要です。「きつい」や「汚い」などといった印象をなくすためには、SNSや地域に向けて農業の良さを発信し、農業は楽しいことだと捉えてもらうことが重要だと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立佐屋高等学校
園芸科学科 2年 川村 尚久

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域活動に参加して地域の方々と関わり、写真などを撮り投稿したり、農業クラブの行事や日常生活、実習の風景をInstagramを使ってストーリーや投稿をしたりする。他校と協力して地域でやれることの話し合いをし、地域の強みをそれぞれ発信する。たとえば、本校のある近隣地域の弥富市だったら弥富文鳥に癒される写真を撮ったり、愛西市だったらハスの花を綺麗にアレンジされた写真を撮ったり、共有する。他校と協力するにあたって、Instagramでストーリーを共有し合い見てもらう機会を増やしてもよいと思う。最近の流行などを取り入れた投稿をして、できるだけ若い世代に注目してもらえるようにする。写真の撮り方にも工夫を取り入れて加工などの技術を活用し、印象に残る投稿や映えを意識したり、クイズや質問ができる機会を作ったり、そのアプリを生かしたやり方を行う。農業の強みを生かし、楽しさが伝わることをする。そして、投稿の頻度を増やす。例えば、それこそ自分たちが活動しているときの様子を撮り、農業クラブの日常風景の投稿をすることで楽しさが伝わり、面白い形をした野菜、不思議な形をした花、変な行動をする動物などを、積極的に写真や動画で撮れる準備を心掛け、投稿数を増やしていき、見てもらえる機会を増やしていけると思う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを活性化させるためには、農業クラブ委員の興味や関心を引き出す活動が大切だと思う。たとえば、自分たちで新しい作物を育てたり、地域の方々と一緒に作業したりすることで、実際の農業の楽しさや大変さを学ぶことができる。また、本校ならではの活動として家庭クラブとの交流会を開き、農業クラブで育成した野菜を使っていただき家庭科クラブで調理してもらい校内で無料配布を行っている。た、SNSで現在行っている内容の発信をすることで、ほかの学科の農業生にも情報をすぐに共有することができる。さらに、クラブ内で育成班や広報班などのチームを作り、みんながそれぞれの役割をもって活動すると、やる気や仲間意識が高まる。こうした活動を通して、農業の楽しさややりがいを感じながら、農業クラブをもっと盛り上げていきたい。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業に対する「大変」「難しい」などのマイナスなイメージを減らしていくために、スマート農業や作業の自動化などにより現代では簡単に農業を始められることを動画やSNSを活用して発信していく。農業の楽しさを感じてもらうために学校で、地域の方や小中学生を対象とした体験イベントやワークショップを開催する。また、簡単に育てられる野菜や花に育成キットを配布または販売することで、農業への興味を持ってもらう。これ以上農業就農者の高齢化が進む前に現在の農業に対し興味を持っている人に知識や技術を継承する。きっかけがないと物事が変化していく確率は少ないため、イベントの数を増やし知識を増やす機会を作る。などの活動が必要だと思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 私立愛農学園農業高等学校
農業科 3年 植西 拓仁

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

校内での農業クラブ活動をSNSなどで発信していくことは地域の方に自分たちの活動を知ってもらうために大事なことです。イベントやマルシェなどの外部での販売に積極的に参加し顔が見える形でのつながりを持っていくことも大事なことでと考えます。自分たちが生産者としてどのようなこだわりを持って農業に取り組んでいるか、農業クラブ員としてどのような活動をして、プロジェクトなどでどのような取り組みをしているか、SNSが広まっている昨今では直接的な交流の重要性もより強くなっていると考えます。そのためにSNSを有効に使ってより多くの人に外部販売について、学校内行事について広く知ってもらうことが重要だと考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

校内では自分たちで育てた農産物をクラブ員同士で共有しあえる場を設けることで、でクラブ員同士が交流できる機会を作ることができると考えます。それぞれが実施しているプロジェクトの経過報告などを共有し専攻ではない分野にも興味を持ってもらえると考えます。他にも専攻をまたいで合同実習を行ったり、農産加工品などの共同開発やアイデアボックスなどを用いて新製品の提案ができたりすると農業クラブ活動がより活性化すると考えます。

校外では、地域向けに収穫体験をしたり、マルシェやイベントに参加したりして農業クラブ員が主体的に交流を深めていくことが活性化につながると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

まず自分たちが楽しそうに農業に取り組む姿勢が重要です。次に自分たちの姿を見てもらうことが重要だと思います。愛農高校では就農率40%を超える状態ですが、それは農家実習を住み込みで1～2週間体験することや、先輩の農家の方の話や生き方を見る中で「農業が尊い仕事だ」「カッコいい」と強く思えるからです。私たちが経験したことは私たちの農業に取り組む姿勢に反映されて来ていると思っています。その姿をどうしたら見てもらえるのか。自分たちが大切だと思うことを、確かに伝えていくことが大切だと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 和歌山県立南部高等学校
食と農園科 2年 火縄 真代

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域、学校間などの繋がりを大切にするためには、イベント情報や、生徒が作った商品などをSNSに発信することで、学校に地域の方が商品を購入していただくことにつながる。地域の方が学校に来ると、生徒との交流にもなり、地域、学校間の繋がりになる。SNSだと多くの方にも見られているという利点を生かし、農業クラブの活動の特集する動画をつくるなど考える。具体的には、SNSの情報を見て、地域の方に購入してもらい、交流するということである。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員が主体的に取り組む環境が必要だと考える。現在は、イベントを行う際には、先生方が計画を立てているので一人一人が農業クラブ員としての自覚が持ちにくい状況である。本校では「南高フェス」というイベントがあるが、参加するクラブ員は毎回同じメンバーであるという課題がある。主体性を促すためにも、イベントに参加するメンバーの役割を決めることで、多くのクラブ員が活動できる環境を作り、一人一人の自覚が芽生えるようなアンケートを作り、各学年の意見を集めることが必要であると思う。イベントを通して得た経験を機にクラブ員が参加する機会が増えると嬉しい。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

IT技術の導入による効率化が必要だと考える。IT技術の導入とは、ドローンやロボットなどのデジタル技術を農業分野に適用し、「生産性の向上」、「品質の改善」「省力化」などから持続可能な農業の実現を目指す取り組みである。そのような取り組みを若い世代が伝えることが重要であると考え。IT技術によって、高齢化による担い手不足の解消にも期待ができ、持続可能な農業の実現にもつながってほしい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立興陽高等学校
造園デザイン科 2年 清水 夢海

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

現状

- ・ SNSを使用している学校は多いが、外部へは十分に伝わっていない。
- ・ 各学校での発信頻度や内容に差がある。問題点
- ・ SNSを使いこなすスキルがあまりない。
- ・ 地域、学校間のつながりとしてはリアルな交流（販売会など）に限られるため。対策
- ・ SNS運用チームを作り定期投稿などを行う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現状

- ・ 農業クラブの大会は誰でも参加や販売実習などの学びの機会が多い。
- ・ 日常的な活動が単調になり、クラブ員のモチベーションの差がでる。

問題点

- ・ 積極的なメンバーに負担が集中し、他の生徒が受け身になりやすい。
- ・ 活動に対する意義が伝わっていないため意欲が続かない。
- ・ 日常の活動が「見える化」されていないため、他者に伝わらず、達成感を感じない。

対策

- ・ 校内掲示、動画制作、SNSでの定期発信などを通じて、「誰かに見てもらえる喜び」を育てる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

現状

- ・ 高齢化によって担い手不足が起きている。
- ・ 若い世代は産地や生産者に高い関心をもっている。

問題点

- ・ 若い世代が農業と関わるきっかけが少ない。

対策

- ・ 若い世代は、SNSをよく見るので、SNSを若者視点で若い世代の農家などがSNSを活用すれば農業に興味を持つきっかけになりやすい

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立伊予農業高等学校
食品化学科 2年 塩見 美桜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

私が所属している食品化学科では、地域の特産品を活用した商品開発に取り組むことで、地域と学校の繋がりを大切にしています。地域と学校の繋がりをより大切にするためには、地域・他校とのコラボ企画や交流イベント、オンラインでのイベント開催などが有効ではないかと考えます。そのためには、学校・農業高校生として何ができるのかを積極的に発信していくことが必要だと思います。他校がどのようなプロジェクト活動をしているのか、農業高校に通う私でも情報があまり入ってきません。また、全国の農業クラブ員と日常的に関わりを持てる場面も少ないです。日常の中に農業クラブ活動をもっと感じることができるとコンテツが創出できればいいと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

今年、農業クラブ役員としてオドル野菜プロジェクトという企画に参加しました。「農業」と「ダンス」の融合という異色の組み合わせは、農業への興味や関心を高め、参加していた小学生から大人までの幅広い世代を繋ぐものとなりました。また、食の大切さや農業の魅力を知ってもらう機会にもなっていたことに加え、消費者と農家さんを繋ぐ役割も果たしていました。このように、「農業」×「〇〇」という発想は、クラブ員の意識を高めるだけでなく、これまでにはなかった繋がりを生み出すために有効な手段だと思います。伊予農業高校には6学科あり、学科ごとに特色ある様々な活動を実施していますが学科単独での取組が多いです。学科を横断したプロジェクト研究の実施や、他校・地域と連携したイベントなどを企画することで、より多くの農業クラブ員が活動できる機会が生み出せるだけでなく、日々の学習の成果を予想外の場面で発揮できることにも繋がり、多くのクラブ員が活躍することで農業クラブが活性化するのではないかと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

スマート農業への移行を推進することで、農業の省力化、精密化、高度化を図っていくことが必要だと思います。しかし、活用技術の習得や導入費用の高騰など多くの課題があります。導入費用や労力に見合った所得を得られるようにすることが、持続的な農業を展開していくためには必要になると思います。

また、農産物に対する価値の適正化や創出も必要になります。農業経営をすべて一括りにすることはできません。高品質な農産物を生産する農家がいれば、規格外の農産物を販売することで所得を確保する農家、環境に配慮した農業を推進する農家などいろいろあります。品質対価だけでなく、労働対価、社会的対価などの価値を適正に評価する必要があると思います。そのためには、若い世代から消費者としての意識改革が求められると思います。持続可能な農業を目指すために、農業の様々な価値を若い世代に発信していくことが大切だと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 鹿児島県立山川高等学校
園芸工学・農業経済科 3年 椎葉 琉樹

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- 「#」を付けて投稿し、農業クラブの知名度を上げる。
- 多くの人が面白い又は興味を持てると言ってもらえるような内容を投稿する。
- 農業クラブのイベント事を増やす。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- 校内外の活動や交流の機会を増やし、農業クラブの意義や活動をクラブ員に知ってもらい、成長できる農業クラブ活動を行っていく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- SNSを活用し、農業のマイナスな印象ではなく「楽しい」「稼げる」「貢献ができる」などの印象をつける。
- スマート農業を活用し、農業は「大変」「肉体労働が辛い」などの印象を変える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 岐阜県立岐阜農林高等学校

流通科学科 3年 藤井 優風

流通科学科 2年 大野 遥稀

森林科学科 2年 野一色美咲

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・各県連やブロックでInstagramやライン公式アカウントなどを作り、農業クラブに関する漫画やショート動画をアップしていく。また、そのアカウントで大会中継や大会動画を配信していくことで他のクラブ員の意欲も引き出すことが出来るのではないかな。
- ・販売物にアカウントのQRコードを貼り、他校で販売・宣伝してもらう
- ・他校と協力して農ク新聞を作成し、それぞれの学校で掲示する

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・岐阜農林高校の場合では、ひょうたんイルミネーション事業のようなクラブ員の中からボランティアを募集し、執行部と協力して作り上げる活動がある。
→クラブ員と関わることができる。
- ・農業クラブの新聞やPR動画を作成するなど活動を知ってもらい興味を持ってもらう。
- ・農業クラブ祭やクイズ大会など農業クラブを主体とした校内でイベントを開催する。また、他学校の人たちと交流する機会を作る。
- ・地域ならではの野菜や特産林産物を栽培し販売をすることや、校内で新しいブランドを作る。
→クラブ員を超えて地域の人と交流ができる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・SNS（YouTube、Instagram等）を利用し、若い世代に興味を持ってもらえるような取り組みの紹介や持続可能な農業とはどんな農業なのかを紹介し若い世代に発信していくことで広められると考える。
- ・農業＝高齢者のイメージ、3K(きつい、汚い、危険)のイメージをなくすため、高校生を主体とした農業体験を定期的に行う。その中で、スマート農業についての体験や講習を行っていくことでさらに若い世代に広めていけるのではないかな。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立秩父農工科学高等学校

農業科 3年 山中 優那

農業科 3年 山中 涼

農業科 3年 彦久保心里

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・地元農家や企業と一緒にイベントに参加したり、商品開発を行い、協力関係をつくる。
上記の活動をSNSを利用して継続的に配信し、アンケートや投票を取り入れ、意見や地域の声を積極的に取り上げる。アクセス数や反応を分析し効果的な投稿内容を見つけ、今後に活かしていく。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・自分たちが楽しめる活動を自主的に企画する。そしてクラブ員が自発的に活動していく。その取り組みをSNSで情報発信し、交流を促進していく。

例) 地域イベントに参加

- ・体験の共有
販売の喜びや発表会での成果を振り返ることでやりがいにつながる。上記の活動をもとにパンフレットを活用して農業クラブ活動の内容を地域や校内に配布。SNSでも情報発信していく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・スマート農業やAIを使った精密農業の導入。センサーやドローンを使用し生育を管理。国に補助金を働きかける。
- ・誰がやっても同じ技術を身に着けることのできるAIによる技術の指導補助と継承（技術の見える化）
- ・地域先進農家から経営や栽培技術の指導助言がもらえる制度の導入。
- ・新規就農者にとって優しい法整備、対応が必要。無償で農業機械の提供・土地の提供（経営が軌道に乗るまでの限定措置）

参加者課題レポート

第 1 分科会

第3会場

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第3会場	高知県立幡多農業高等学校	埼玉県立羽生実業高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	北海道	岩見沢農業高等学校	畜産科学科	3	佐藤 はるな
2	栃木県	鹿沼南高等学校	食料生産科	2	大貫 致蓮
3	群馬県	大泉高等学校	生物生産科	3	澁谷 帆南
4	千葉県	流山高等学校	園芸科	2	山本 佳和
5	東京都	瑞穂農芸高等学校	食品科	2	土屋 和子
6	山梨県	北杜高等学校	総合学科	2	三井 康輔
7	長野県	下高井農林高等学校	地域創造農学科	3	豊田 みく
8	長野県	南安曇農業高等学校	生物工学科	2	三木 冬華
9	愛知県	田口高等学校	林業科	2	藤田 彩愛
10	三重県	伊賀白鳳高等学校	生物資源科	3	中森 太悟
11	鳥取県	倉吉農業高等学校	環境科	3	天野 李香
12	岡山県	井原高等学校	地域生活科	3	濱田 啓輔
13	福岡県	八女農業高等学校	生産技術科	2	久原 海姫
14	鹿児島県	種子島高等学校	生物生産科	3	日笠山 青空

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
15	高知県	幡多農業高等学校	園芸システム科	2	岡 紫菜
16	高知県	幡多農業高等学校	園芸システム科	2	藤本 桃花
17	高知県	幡多農業高等学校	グリーン環境科	2	尾形 銀太

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
18	埼玉県	羽生実業高等学校	園芸科	2	佐藤 黎
19	埼玉県	羽生実業高等学校	園芸科	2	中村 瑞希
20	埼玉県	羽生実業高等学校	農業経済科	3	菅原 杏衣來

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか」

四国ブロック 高知県立幡多農業高等学校

グリーン環境科 2年 尾形 銀太

園芸システム科 2年 岡 紫菜

園芸システム科 2年 藤本 桃花

1 はじめに

四国ブロックは愛媛県・香川県・徳島県・高知県の4県で構成され、温暖で降水量に恵まれた気候を活かし、多種多様な作物が栽培されている。平野部では水稻や野菜、果樹栽培が盛んで、香川県の讃岐平野では水が少ない土地を補うために1万か所以上のため池が築かれ、稲作と小麦の二毛作を支えてきた。徳島県は全国のすだち生産の9割以上を占め、阿波尾鶏のブランドでも全国的に知られる。愛媛県は温州ミカンやキウイフルーツの産地として有名で、品質の高い果実が豊富に生産されている。高知県では未来の農業を切り開くIoP（Internet of Plants）が導入され、ハウス内の環境や生育データをAIが解析し、最適な管理を自動化することで、匠の技を共有し次世代に繋げている。



図：四国の農業をイメージしたAI出力画像

2 高知県立幡多農業高等学校

高知県立幡多農業高等学校は、開校から80年以上の歴史を刻み、清流・四万十川のそばに位置する約17ヘクタールの広大なキャンパスは四季折々の生命の営みを感じながら充実した高校生活を送れる場所である。4学科がそれぞれ特徴のある学びを展開し、生徒が主体的に学ぶキャリア教育を推進し、地域と連携した新商品の開発・販売など、3年間学び続けられる環境が整っている。

また、IoTやスマート農業といった次世代農業への転換が進む中、本校でもJGAP認証の取得を通して安全で持続可能な農業経営を学ぶとともに、生徒が自ら試行錯誤しながら、情報化社会を生き抜く力を身につける教育に取り組んでいる。

「4学科の特色ある学び」



図：ウメの収穫

園芸システム科	施設園芸を中心に、野菜や果樹、草花などの栽培技術を学びます。さらに、ICTを活用した先進的な栽培にも取り組んでいます。
アグリサイエンス科	畜産や食品加工を中心に学び、命の大切さについて深く理解します。地域ブランド牛の飼育や、ハム・ベーコンなどの加工実習も行います。
グリーン環境科	森林の保全や木材の加工について学びます。自然と共生する力を養い、木工製品の制作やチェーンソーの取り扱いなど、実践的な技術も習得します。
生活コーディネーター科	被服・調理・看護など、生活に関わる幅広い分野を学びます。衣食住の基礎を身につけ、将来の福祉・保育・家庭生活などに生かせる力を育てます。

3 地域と繋がるためのSNS活用

①Instagramと「SNSアピール班」

2022年3月に学校公式Instagramが誕生した。開設から3年が経過し、現在ではフォロワー数を2000人まで伸ばすことができた。SNSを活用し、より地域へ活動をアピールしていくために、クラブ員内で「SNSアピール班」が誕生した。校内で日々成長する動植物の成長課程を追い、リアルタイムで発信するなど、農業高校生のリアルが伝わる仕掛けが、どれだけ地域の方々の反応に繋がるかを検証している。



図：Instagramフォロワー2000人達成！



図：ジャガイモの成長を紹介

Instagramのダッシュボード機能を活用し、どのような人たちが投稿をみているのか分析してみたところ、18歳から24歳が28%で最も多く、次いで13歳から17歳が19.7%で、比較的若い年齢層が閲覧していることが分かった。またグラフ全体を見て分かるように、閲覧の年齢層にあまり偏りがなかったことから、老若男女様々な層に学校の活動を見て頂いていることが分かる。次にどの地域が閲覧しているかを調べたところ、四万十市・高知市・宿毛市が多く比較的近隣の閲覧が多いなか、愛媛県松山市や大阪からのアクセスが確認できた。今後はアップロードの回数を増やし、どうすれば再生回数を増やせるか、特に若い世代に見てもらい農業クラブ活動の素晴らしさが伝わるようなコンテンツを目指したい。



図：ダッシュボードを活用した閲覧者の分析

②地元中学生向けYouTube動画の作成

四万十市は過疎高齢化が進む地域で、幡多農業高校の生徒数も年々減少が続いている。学校や各科の特色ある取り組みがより伝わり、幡多農業高校の授業が楽しく、クラブ員が明るく実習に励む様子が分かるような動画作成に取り組んだ。作成された動画は、近隣中学校を対象にした学校説明会やオープンキャンパスに使っていただき、また学校公式YouTubeに投稿し、学校のリアルな様子を知ってもらう機会に繋がった。YouTubeへの投稿を令和7年の6月に行い、現在までの2か月で約900回再生された。地元の中学生在がこの動画をきっかけに、農業クラブへの活動に興味を抱き、農業高校への志願者が増えることを期待する。

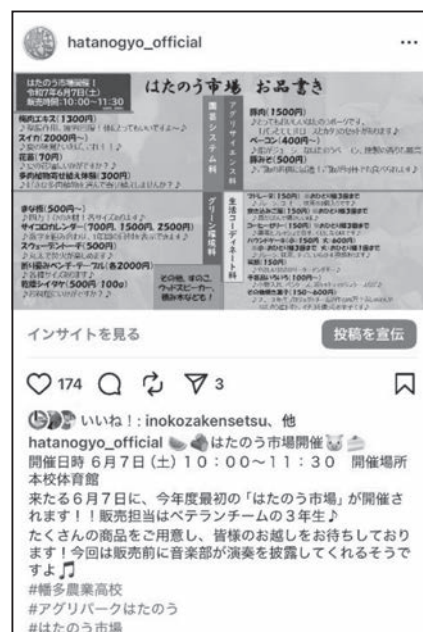


図：作成したYouTube動画

③SNSを活用したはたのう市場の宣伝

幡多農業高校では年に3回「はたのう市場」という地域の方々に向けた販売実習を行っている。5月は3年生、11月は2年生、2月は3年生が販売を担当し、毎回多くの地域の方々に喜んで頂いている。これまでの宣伝方法は、口コミや新聞の折り込みのみで、地域の方々に「知らなかった」「早く知りたかった」などの意見をいただくことが多かった。それを改善すべく、学校のInstagramや学校ホームページを活用した宣伝活動を開始した。

令和7年の6月に本校体育館で開催したはたのう市場では大勢のお客様が朝から列を作り、10時に開始した販売が10時30分にはほとんどの商品が売り切れてしまうほどの大盛況となった。コロナの煽りを受けお客様が少し遠のいた時期もあったが、SNSを活用した呼び込みの効果もあり、6月開催のはたのう市場はコロナ以前の集客数になった。



図：Instagramで発信



図：大盛況のはたのう市場

これからもクラブ員として日々の生産活動に励み、活動をより知っていただくためのSNSを模索し、地域の方々に喜んでいただける活動を続けていきたい。

④親子料理教室の開催

生活コーディネート科の取り組みの一つに、学校で育てた食材を活用した「親子料理教室」がある。親子で手を取り合い、調理に挑戦し、地産地消や食品ロス削減の大切さを学びつつ、高校生と地域住民が交流し、農業への理解と関心を深めることを目的とするこのイベントは、毎回大好評で多くの応募がある。

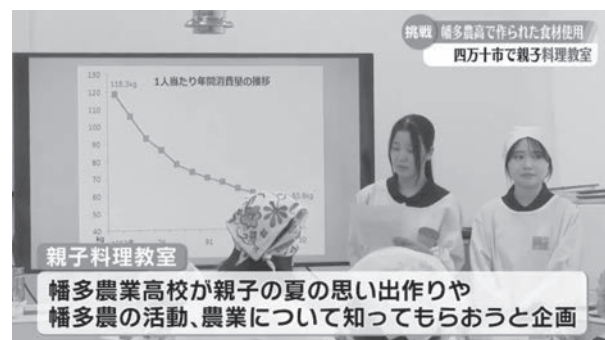
令和7年8月26日、高知県四万十市の「しまんとぴあ」で開催された親子料理教室は、生活コーディネート科2年生が講師となり、本校で栽培した米から作られた米粉や、形が悪くはたのう市場に出せないイチゴを使った手作りジャムのマフィン作りを企画した。午前・午後に分かれた教室には18組46人が参加し、大盛況に幕を閉じた。今回のイベントはより多くの方に知ってもらおうとチラシ作成にこだわり、Instagramでの宣伝を行った。また、応募専用フォームをgoogleフォームで作成し手軽な応募方法を考え採用した。募集開始後、間もなく募集上限に達し、SNSを活用した宣伝効果の高さと、ネット上の入力フォームは安全で手軽に応募・集計ができることが分かった。今後は益々SNSを活用し親子料理教室を広め、地産地消・食育を進め、農業クラブの三大目標のひとつであう指導性を磨いていきたい。

4 まとめ

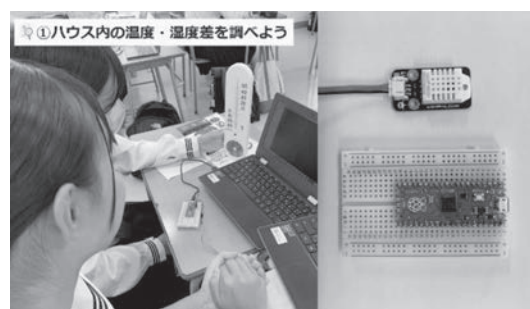
年々利用者が増加するSNSやインターネット。今まではテレビや新聞を活用した宣伝が主であったが、最近ではYouTubeやInstagramなどネットを活用した宣伝が広まり、また一般人でも活用しやすい形態で定着しつつあるように感じる。また、加速度的に進化しているAIの分野。ネット上では近頃、AI画像やAI動画なども頻繁に見かけるようになり、ものづくりや表現の部分でもテクノロジーが私たちの社会の多くを占めるようになってきた。農業クラブの活動をより深め、多くの人たちに知ってもらうためにも、SNSやAIの活用は必須だと考える。スマート農業が進み、農業とテクノロジーが融合していくこの時代に、農業の本当の価値を考え、どうすれば農業で今後の社会が豊かになるかをクラブ員同士で議論をしていくことが重要と考える。まず幡多農業が発信の拠点となり、他県のクラブ員の刺激となるよう日々の実習・研究に励んでいきたい。



図：Instagramを活用した宣伝



図：親子教室の様子(テレビ報道より)



図：プログラミングで温湿度センサーの制御

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道岩見沢農業高等学校
畜産科学科 3年 佐藤 はるな

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

私は、地域・学校間などの繋がりを深めるためには、SNSで各校の取り組みを積極的に発信し、学校に関わりのある方・ない方を問わず、多くの人に理解される活動が重要と考えます。

例えば、ブロック全体で農業クラブの各種大会や各校の農業クラブ活動を地域や他校に向けて積極的に公開することで、クラブ員の興味関心や課題解決に向けた意欲的な活動ができると思います。本校では、農業の魅力を現在YouTubeで発信しているOBとコラボし、農業クラブ活動とともに農業の魅力などを発信していく予定です。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

私は、クラブ員の意欲が向上できれば、農業クラブを活性化できると思いました。本校では、上位大会に進むための力をつけていけば興味や関心が生まれると思い、活動を展開しています。

クラブ員のスキルをアップさせるための活動では、テレビやラジオで活躍している講師の方を招いた講座を開催しました。終了後には、悩めるクラブ員に向けた個別相談会も実施し、学びに対する理解を深めることができました。また、各学科の代表者と本校のOBを招いたシンポジウムを開催し、他学科の取り組みや本校での活動を地域の方にも知っていただき、クラブ員との交流だけでなく地域との連携も高めることができました。これらの取り組みにより、クラブ員の興味や関心を引き出し、学科間の交流、そして地域との連携を高めたことで農業クラブを活性化させることができました。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

現在、農業従事者の高齢化や都市への若者層の流出などにより後継者不足が進んでいるため、若者の新規就農が望まれています。これを改善するためには、若者だけでなく幅広い世代に農業について興味を持ってもらうことが重要だと考えています。そこで私たちは、本校農業クラブのオリジナルラジオ番組として「あぐらじ」の放送を開始し、学科代表者が継続的に農業の魅力や本校の取り組みを発信しました。すると、これらの取り組みに興味を持っていたFM北海道と連携し、活動発信や地元農林業の魅力などを配信したことで、地域だけでなく全国にまで農業の魅力を届けることができました。また、学びの変容を地域と一体で確認するために市民公開型シンポジウムを開催し、本校で得た学びを地域と共有し、今後の農業について明確になりました。

このように、高齢化が進んでいる農業に持続可能な農業を広めるためには私たちの世代が農業についての学びを深めながら、農業の魅力発信を行うことなど、取り組みやすい内容から積極的に実行していくことが大切だと考えました。深刻化している今の農業を、私たちが少しでも良い方向に導いていけるよう、これからも様々な取り組みを行っていこうと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立鹿沼南高等学校
食料生産科 2年 大貫 致蓮

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校ではホームページを作成し、定期的に学校で行った活動内容を投稿しています。その中に農業クラブのページがあります。SNSの活用のメリットは、費用があまりかからないことです。ポスターや地域イベントの開催を行うと、多くの費用がかかってしまいます。デメリットとしては、個人情報の漏洩や炎上の可能性があるということです。アップする文章は、読み手に二通りに解釈されない表現を心掛けなければなりません。私たちの学校では、安全上の観点からホームページの作成以外のSNSを活用するようなことができません。SNSに関するモラルが私たちに醸成させることができれば、DM機能などを駆使して次の活動につなげるきっかけとなると私は思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校では、収穫祭と中学生向けの一日体験学習で、農業クラブ紹介を行っています。収穫祭では他学科の生徒も含む全校生徒で、食料生産科が育成した牛や野菜を食べて、一年間の食への感謝をする目的で学校行事を行っています。中学生向けの一日体験学習では農業クラブの紹介ブースを設け、紹介ポスターを用いて農業クラブの紹介や発表大会、競技会などの説明、農業鑑定競技会を模したクイズを行いました。中学生にも好評でした。このような活動から農業クラブ活性化のために農業体験会のイベントや、農業の最先端技術に気軽に触れる機会があるとよいと思いました。興味を持つことで関心をもってクラブ活動に参加してもらえと思っています。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

本校では、スマート農業や現代農業について外部講師の先生による講話の機会があります。そこでは農業の魅力が感じられ、農業現場の課題なども知ることができました。私たちは、農業の最先端の技術に触れる機会がなかなかありません。でも、こうした講話や最先端の技術に実際に触れることで、農業に対するイメージが変わります。若い世代が農業に興味を持ち、持続可能な農業を広めていくには、魅力的な職業としてとらえられるように農業の魅力を最大限に伝えることが大切だと感じています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立大泉高等学校
生物生産科 3年 澁谷 帆南

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

学校のHPなどで、授業の様子やイベント情報をアップするとともに、各校でも現在始まっている学校公式インスタで、各種大会の様子やどんなことを学習するかなど、積極的にアップすることが必要である。

また、各種イベント時に事前予告などを行うことで、来場者数の増加を図るとともに、次のイベントにもつながり、学校や農業クラブ活動の認知度向上に影響を与えると考ええる。

授業の様子や地域貢献活動など校外での活動の様子や、保育園との食育・食農活動などもHPやインスタにアップすることで、地域住民に農業高校の様子を知ってもらうとともに、地域間の繋がりが強化と、さらなる輪を広げるきっかけになると思う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

他校との生徒交換・交流を行い、その学校で学んだことをスライドや動画などで発表し、他のクラブ員に共有する場を作る。（どうしても自分の学校だけの活動では限られてしまうので、他校を知る（体験）機会が欲しい）

学校内での行いとしては自分たちが他の学科を体験したり、もてなす側になったりできるイベントを開催する。例えば、校内で行っている文化祭や農産物直売会などで、農業クラブのブースを作り、他のクラブ員がどのような活動をしているか知ってもらう。また、現状として、新1年生には新入生オリエンテーションを行い、農業クラブ活動や大会を知ってもらうとともに、興味関心をもってもらい機会を作っている。また、課題研究発表を校内外で行うことで、自分の学科だけでなく、他学科の学習・研究内容を知ることができるように、交流が持て、新たな発展や連携に繋がれると思う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

各種SNSに農業についての発信をし、体験会を様々な所で開き、実際の農業を体験してもらう、そして農産物を持ち帰ってもらう。また私達より下の世代にも農業の楽しさを知ってもらい今後の進路への判断材料にしてもらう。例えば、本校では生徒が地域の中学校や生涯学習センターなどへ出前授業を行うことで、農業への興味関心を持ってもらえるよう活動している。

若い世代が持続可能な農業を広げるためには、AIを活用した農業経営など、今までの「きつい・汚い・危険」と呼ばれる職業から、コスパ良くしっかりと休暇などがとれるような経営体系の構築が必要だと思う。農業は休暇や福利厚生の部分の曖昧だったり、他の産業に比べ充実していないことが若い世代が参入しない一因でもあると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立流山高等学校
園芸科 2年 山本 佳和

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域の直売所や道の駅と連携し、農業クラブの生徒が育てた野菜や加工品を販売するイベントを開催します。イベントでは、SNSで事前に告知を行い、来場者に向けてフォトスポットやハッシュタグキャンペーンを用意することで、来場者自身が情報発信者となる仕組みを作ることができると思います。

近隣の農業クラブと連携し、合同でオンライン座談会やリモート農業体験、共同研究などを行います。活動の様子はSNSで相互に紹介し合い、学校間のつながりを可視化することで、より広いネットワークを築くのではないかと考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

地域の農家や企業、他校の農業クラブと連携し、共同イベントや交流会を開催します。例えば、「地域の直売所での販売体験」や「他校との合同農業体験」など、外部との関わりを通じて視野を広げ、実社会とのつながりを実感することができると思います。

近隣の農業高校と合同で研修会や意見交換会を行うことで、視野を広げ、他校の取り組みから刺激を受けることができます。これにより、クラブ員同士の連携も深まると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

日本の農業は高齢化が進み、担い手不足が深刻な課題となっています。この状況を打開するためには、若い世代が農業に関心を持ち、持続可能な形で関わっていくことが不可欠です。高校生としてできることは、身近な活動から始め、農業の魅力や可能性を広めていくことが重要であると考えます。

まず、ICTやスマート農業の学習・実践が挙げられます。ドローンやセンサー、AIを活用した農業技術は、若い世代が得意とする分野であり、効率的で環境に優しい農業の実現に貢献できます。学校の授業や農業クラブ活動を通じて、これらの技術を学び、実際に活用することで、未来の農業の担い手としての意識を高め、担い手不足の解消につながるのではないかと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立瑞穂農芸高等学校
食品科 2年 土屋 和子

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

まずは地域の方たちにどのような活動をしているのかを知ってもらうために自分たちの学校が主催する物産展などのイベントを地域のショッピングモールなどで開催し、SNSに投稿する。

また、いきなり大きなイベントを開催しようとしても人はなかなか集まらないと考えることから、小さいことからコツコツと認知度を上げていくことが大切である。イベントを開催するだけでなく日頃から地域のイベントにも積極的に参加することで認知度は上がっていくと考える。

また、ある程度、地域の間で認知度が高まったら、近隣の地域や他校と合同でイベントを開催し、各農業高校の特徴を生かした商品開発をSNSに投稿し、文化祭や地域のイベントに出すことも視野に入れる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

学校同士でクラブ員全員が参加できるお祭りを、農業クラブが主催するのが良いと考える。

なぜなら、自分は興味・関心が無いことを説明されてもなかなか積極的に動こうとは思えないからである。それならば、クラブ員全員が参加できるイベントを開催し農業クラブや他の学校の推したいところを“体験”してもらい興味をもってもらうのがいいと思ったからである。体験してもらうことによって、農業クラブに対して自分なりの興味・関心を示すことが大切である。

その他にも出し物を自分たちで考えるとすれば学校内での交流や連携が増え、お祭りを開催している学校に足を運ぶことによって他校の生徒と交流をするいい機会ができ、農業クラブの活動を活性化させることができるのではないかと考えた。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業を一つの会社として経営をしていくことが良いと考えた。今の農業は、人ひとりの負担が大きく、給料も安定しないというイメージが強い。そのイメージを無くすために株式会社として経営をしていくのが良いと思う。会社として活動すると、休みを交互に取ることができるので一人一人の負担が少なくなり活動がしやすくなり、後継者が集まりやすいというイメージが会社にはあったので若い世代の人たちに農業が広まると考えた。他にも“株主”から資金を集めることができるので、赤字を回避できていれば、金銭面でも安定すると思う。しかし、メリットだけでなくデメリットも必ず存在するため、今すぐに解決できる訳ではないが、この案は、若い世代の人にも農業が広められると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立北杜高等学校
総合学科 2年 三井 康輔

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの知名度を上げるためには、インターネットなどを用いた宣伝活動をもっと活発に行うことが大切だと思います。現在、FFJ、農業クラブとインターネットで検索すると活動報告などの情報が出てきます。活動報告は大事な内容ですが、農業クラブを知らない人の興味をそそることは難しいと思います。そのため、SNSを活用した「農業クラブは明るくて楽しそう」と思えるようなサイトが必要だと思います。農業クラブ員の中から投稿できる人が、近くの学校や協力してくれる地域の農業従事者の方を巻き込んで、興味や関心を高めることのできる企画を考え、若い人たちが興味を持つようなユーモアのある内容を取り入れ、農業クラブを多くの人に知ってもらおうと良いと思います。また、各県で農業クラブの公式インスタグラムを開設することも若い人の興味を引けると思うので良いと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを活性化させるためには、県内だけではなく県外の学校も交えた会議を増やしたほうが良いと考えました。山梨県ではクラブ員の話し合いは年に数回はありますがそれは県内の高校の大体同じメンバーでの話し合いだけとなっています。そこで、県外の学校を交えて規模を大きくした交流会も定期的を開催することが良いと考えました。現在は生徒1人1人がBYODを持っており、リモート会議も簡単にできます。多くのクラブ員が参加できるような活動を取り入れて、様々な環境の多くの人とつながることによって、その地域の課題やその改善策、工夫などを共に学びあうことができ、農業クラブを活性化させることができると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業に対するイメージは、3Kと言われている「汚い」「きつい」「稼げない」というようなものがほとんどだと思います。その影響で農業に関心のある若い世代の人が減少し、後継ぎのいない農家が増えてしまっています。そこで、若い世代の人を増やすために次のことを考えました。まず、農業の楽しさを発信して農業に興味を持ってもらえるようにするとよいと考えます。現在の農業はAIやドローンなどの機器の導入により、3Kのイメージからは格段に良くなっていると思います。さらに、農家のやりがいや生産物への熱い思い、農業の持つ魅力などをインターネットなどで発信し、農業に興味を持つ若い世代の人を増やすことができるようになってきていると思います。また、市町村や地元の農家などが中心となって機械のレンタルなどをすれば安い費用で誰でもスマート農業をすることができるようになります。こうすることによって、農業に興味を持った人が3Kのハードルをクリアした農業を営むことができると考えます。また、これらのことを何年も続けることによって持続可能な農業ができると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県下高井農林高等学校

地域創造農学科 3年 豊田 みく

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- 現 状 地域との繋がりを大切にしている
- ①地域の方々と一緒に活動を行う
 - ②地域の資源を活用し学びを深めている

問題点 農業クラブの認知度を上げるための、SNS などの有効活用法

- 対 策
- ①農業クラブで行った活動をSNS に掲載し、農業クラブについてくわしく知ってもらう
 - ②農業クラブ主催のイベントやボランティア活動の参加を、SNS を活用し様々な人に呼びかける

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- 現 状 農業クラブを活性化させるために地域と連携した活動を行っている
- ①ボランティアを一緒に行う
 - ②果樹や野菜、花の販売実習

問題点 農業クラブ員の興味、関心を高める

- 対 策
- ①農業の相談窓口を設けて地域との交流を深める
 - ②様々なイベントに積極的に参加し農業にもっと興味、関心をもつ

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- 現 状 農業の担い手が不足している
- ①少子高齢化が進んでいる
 - ②農家が減少傾向である
 - ③地方の人口減少
 - ④新規就農のハードル

問題点 農業は辛い、始めづらいと思っている人が多い

- 対 策
- ①スマート農業で機械を使い農業の辛さを削減する
 - ②農業の初心者、経験者が交流できるサイトをつくる
 - ③農業機械を安く貸し出す

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県南安曇農業高等学校
生物工学科 2年 三木 冬華

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を上げるために、3学科9つの研究部が地域の企業と協働で食品の商品開発、地域下水道終末処理場から排出された下水汚泥を肥料に地域に普及などの研究をしています。また、地域の保育園、小学校との交流、各研究部が年間を通して学校開放講座を開講して地域の方々に多く参加していただくことで地域との繋がりを大切にしています。その活動を学校のHP、InstagramなどのSNSを有効活用しています。その他にも新聞やテレビなどでも取り上げていただいて農業クラブ活動の認知度を上げています。なので、農業クラブ活動をSNSや新聞、テレビなどを有効活用することで農業クラブの認知度を上げていけるかと考えられます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブ員の興味、関心を高めるために、昨年、農業クラブ役員で話し合い、南農を宣伝してくれる存在を作りたいと、マスコットキャラクターの図案を全校の生徒に応募したところ40枚以上の応募があり、その中から「南農」だとイメージすることができる象徴性、オリジナリティにあふれ、個性的である独創性、多くの人に親しんでもらえ、幅広い支持がある共感性を兼ね備え、明るく元気な印象がある1枚を時間かけて厳選しました。選ばれたのが「なんやぎくん」です。南農はヤギを飼育しており、3学科それぞれ内容が違うので身に着けるものを変えれば多くの機会に活躍できることから選ばれました。文化祭では、全校に親しんでもらうためにうちの一面を飾ってもらいました。また、缶バッジを作成し農業クラブ展示の青空市場で来ていただいていた子供に配布をしたり、フォトスポットを作ったりして多くの方に「なんやぎくん」の宣伝をしました。今後は「なんやぎくん」の着ぐるみの完成を目指して農業クラブの活性化をしていきたいと思っています。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

安曇野地域は稲作を中心に果樹、北アルプスの湧き水を利用したワサビ栽培など農業の盛んな地域ではありますが、高齢化や人手不足などといった課題を抱えています。

南安曇農業高校農業クラブでは若者の農業就業意欲の低下による後継者不足といった高齢化やそれに伴う人手不足などの課題を一刻も早く打破したいと思い、3学科9つの研究部に分かれ、プロジェクト活動を行いながら、地域と連携し農業に若い世代にどのようにして持続可能な農業を広めていくための課題解決に向けて、保育園、小学校、地域の方などと交流活動を続けてきました。また、私たちの活動は地域の人たちに必要とされる知識や技術を教え、コミュニケーション能力を身に付けるため、現在、安曇野市教育委員会と協働して各研究部が年間を通して学校開放講座を開講して地域の方々に多く参加していただくことで、南農の農業クラブ活動に理解していただき、今後も地域の活性化に大きく貢献していきたいと考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立田口高等学校
林業科 2年 藤田 彩愛

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校は地元の3つの中学校と連携型中高一貫教育を実施している。また、各中学校の文化祭では、事前に録画したプロジェクト発表の内容を披露している。夏季休業中は本校生徒が中学生との交流として、実習や授業の様子を見学できるような取り組みを行っている。中学生にとって面識のある先輩が行うプロジェクト発表や実習の披露は、農業高校で身に付けることのできる知識や技術を認識する絶好の機会であるとともに、入学後の自分を想像する場となっている。

普通科高校に比べ、農業高校は、勉強内容や実験実習の内容がイメージしにくいとので、地域へ情報を発信し、交流する場を多く設定することが大切だと思う。

SNSを利用し、地域の方に販売実習の宣伝や様子、競技会への取り組みをSNSで発信することにより広く情報を発信することに繋がると考える。

SNSをあまり利用しない高齢者には、販売実習を活用し、プロジェクト活動や販売物へのこだわりなどをポスターやチラシ等に分かりやすくまとめて展示することにより、広い世代への情報の発信に繋がると考える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校は林業科と普通科があり、林業科では2つの専攻に分かれプロジェクト活動を進めている。2つの専攻それぞれが地域の課題を解決する方策を考え、実践している。プロジェクト活動に関わっていない1,2年生を対象に専攻の研究内容を発表する機会を設けている。

農業クラブ役員が中心となって、農業鑑定競技会勉強会を開催している。学校全体で農業鑑定競技会へ取り組む姿勢に変えることができた。また、1年生には農業クラブ活動への良い導入となっている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

本校は山間地に位置しており、周辺は山林に囲まれた自然豊かな環境である。私は、これまでこのような自然に愛着を持ち帰郷される「Uターン」の方や憧れを持って「Iターン」される方を身近に見てきた。その方々が山間部での農業や地域文化の担い手として重要な役割を果たしている光景を目の当たりにしてきた。こうした経験から、農業に関心や接点のない方々に広く農業の魅力や重要さを発信し、伝えていくクラブ活動こそが、若い世代に興味をもってもらい入口となるのではないかと考える。特に、持続可能な林業を目指して、プロジェクト活動に取り組んでいる。その活動を校内だけでなく地域の人や林業従事者に伝え、持続可能な林業を広める取り組みをしている。

近年、森林計測にドローンが利用されており、本校でも、授業の中でドローンの扱い方について学んでいる。子どもたちを対象にドローンの操作体験を実施し、スマート農業に興味をもってもらいイベントや森林内で行えるレクリエーションを今後検討していきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立伊賀白鳳高等学校
生物資源科 3年 中森 太悟

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校では学校のHP・Instagramがあるが、農業クラブとしてのInstagramなどの発信は行っていない。なので、学校のHP・Instagramについては、学校行事中心の発信となっており、農業クラブに特化したものとなっていない点が本校の課題である。まずは、本校の農業クラブがSNSなどを有効活用することで、他校・地域の方々と繋がっていければと考えている。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員の興味、関心を高めるためには、まず、授業等で説明される最初の印象がとても重要だと思う。話を聞くよりも、全国大会のDVDや先輩達の活動の様子を動画で知ること、自分にもできるかなという不安が募るが、同じ高校生だから、私にもできるという気持ちを持つことで、農業クラブ活動に積極的にできると思う。

校内・校外とも農業クラブ員の交流、連携については、役員同士の段階にとどまっている。校外の農業クラブ員と交流する機会が役員にしかないことが問題であると考え。実施するには、時間・場所など実施計画を立てる必要があり、対面での実施が難しければ、オンラインで実施することも考えていければと思う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

高齢化が進んだ農業で、若い世代が活躍できる場として、体力に加え、データサイエンスや先端テクノロジー（ドローン・IoTなど）があると考え。高齢化が進んでいる地域ほど、先端テクノロジーの活躍の場面は少ないかもしれないが、経験だけではない、若い世代が得意とする効率的な農業で、日本の農業を支えていくことは大切になってくると考える。また、生産だけではなく、流通・経営面においても、若い世代の活躍できる場は多くあると考える。今までになかった市場外流通の活用、生産だけに終わるのではなく、加工・サービス（カフェ・レストラン等）も視野に入れた経営において、農業を持続可能なものとしていける。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立倉吉農業高等学校
環境科 3年 天野 李香

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

ホームページや学校Instagram等を活用し、学校行事・農業クラブ活動について投稿、情報発信に努めている。本校は「全国農業高校お米甲子園2024」にて最高金賞を受賞し、地域の情報誌に掲載していただいた。報道機関への情報提供を行いつつ、日頃の学習内容を地域に伝える機会を作るよう取り組みを進めている。

この度の会議では、他校ではどのような取り組みを行いながら地域・学校間の繋がりを生み出しているかを知る機会としたい。



図1 「全国農業高校お米甲子園2024」について掲載いただいた情報誌

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校では行事として「農業クラブ総会」を年に1度実施している。未だ農業クラブについての理解が深くない1年生にも活動の理解を深めてもらうため、農業クラブについての説明や関連競技についての説明、FFJ検定の解説、練習問題に取り組む時間や、昨年度の生徒の受賞結果など、活動報告を行う機会としている。

この度の会議の中で、どんな取り組みをすることで活発化を図っているか、考えを共有したい。



図2 農業クラブ総会の様子

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

本校造園部門では、「芝残渣を活用したきのこ培地利用」の研究が取り組まれている。鳥取県は芝栽培が盛んであり、産出額は全国2位となっている。本県の芝残渣は約14万袋が廃棄されている計算となり、有効利用することで新たな地域資源の創出、地域への貢献が行えると考え、マッシュルームを中心とした7種のきのこの培地として利用できるか検討している。

その他、梨の剪定枝の利用を検討する研究や、スイカ残渣の肥料化に取り組む研究など、持続可能な農業への探求が進んでいる。他校での取り組みについて知り、今後生きる視点を得たい。

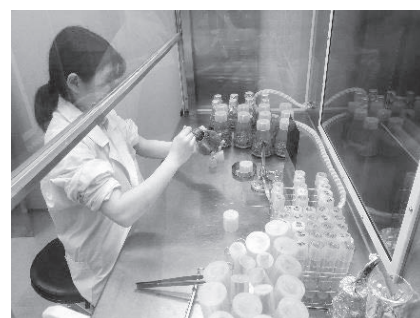


図3 芝残渣を活用したきのこ培養実験の様子

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立井原高等学校
地域生活科 3年 濱田 啓輔

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

現状、SNS を活用しているが効果的な広報活動となっているかは不明であり、学校内だけでなく校外においても農業クラブの活動が十分に認知されていない。問題点としては、イベントや交流会の不足、SNS 運用に関する知識の不足、農業に対する誤解の存在、SNS 利用者層の限界などが挙げられる。対策としては、社会貢献活動への積極的な参加、SNS での複数校の活動発信、ポスター作成や地域広報誌への掲載実施、また学校ごとのイメージキャラクター作成を計画している。ふれあい市（販売会）において TikTok や Instagram の QR コードを配布する。校内において農業クラブ活動についての紹介等を実施する。地域の小中学校へ出前授業を実施する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現状、農業クラブ活動に興味を持つ人が少なく、役員以外はあまり積極的に活動していない。活動内容が毎年同じものになっており、問題点としては地域や他学年との交流の少なさ、クラブ員の主体性の欠如、予算の不足などが挙げられる。対策としては、地域と協力した花壇作りの実施、学年を超えたイベントの企画（文化祭出店など）、活動内容の多様化、クラウドファンディングによる資金確保を計画している。他学年とのオリエンテーションを増やし、段階的に農ク活動についての興味関心を高める。課題研究の内容を紹介する。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

現状、若い人の農業への関心が少なく、農業従事者の約7割が高齢者となっている。問題点としては、後継者不足による耕作放棄地の増加、技術伝承の不足、労働力や食料自給率の低下、農家の収入の低さなどが挙げられる。対策としては、スマート農業の導入、新規就農者への支援、農業高校生による農家訪問での魅力伝達、SNS での「バズる農業」発信による拡散などを計画している。小中学校との交流を増やし、若い世代へ魅力を発信する。地域の方々との実習体験会を開催する。農業の魅力を積極的に発信する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 福岡県立八女農業高等学校
生産技術科 2年 久原 海姫

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブについてSNSでの情報源が少ないため、農業クラブがどんな活動をしている組織なのか知っている人がとても少ない。農業高校生やその家族以外の認知度が非常に低い。また、地域での単位クラブ活動を知ってもらえるような催し物が少ない。

具体的な取り組みとして、県連盟独自のホームページを作り情報発信ができる環境を整える。農業クラブでの活動を分かりやすく、見て楽しいようにまとめ農業クラブ加盟校が販売している商品などや各校のホームページに飛べるQRコード・URLを掲載し、ホームページの存在を多くの人に認知してもらう。

まとめとして、インターネット上での情報が非常に少なく、農業クラブのことを知らない人がほとんどだと思われる。情報を発信する手段を増やすことが重要で、今あるホームページをわかりやすくし、地域の人達にとって魅力的な内容にする。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業の魅力や良さなどをクラブ員が理解しておらず、農業クラブ活動に関しても生徒一人一人が興味を示していない。クラブ員同士の連携もクラス内の活動ではできているが、3学年を通しての連携や活動ができていない。

具体的な取り組みとして、農業クラブ役員が主催の農業イベントを実施し、クラブ員が関われる活動を増やす。また、農業クラブ活動について農業科目の授業を通して、学ぶ機会を取り入れ、SNSやホームページを使った情報発信にもクラブ員が興味・関心を持つ内容を入れる。

まとめとして、農業クラブの活動を発表会以外にも学ぶ機会を設け、クラブ員みんなが関われるような活動を増やす。文化祭などの学校行事の時も、農業クラブ主催のイベントを入れる。また、SNSの利用やホームページを充実させ、情報発信をしていく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業体験授業や校内の生産物販売所での販売、文化祭などを通して、地域の小さい子供から各世代の人達へ気軽に農業と関わる機会つくっている。また、本校生徒は、インターシップなどを通して、地域の農業関係者から直接話を聞いたり、農業体験をしたりしている。

具体的な取り組みとして、InstagramやホームページなどのSNSを使って農業について知ってもらう。施設を利用する農業では、温度や湿度などの調節の調節ができるスマート農業の取入れや農作業の省力化・DX化を進め、近代的で儲かる農業を知ってもらう。

若い世代への農業後継者や新規参入者を増やすためにも農業高校の役割は大切だと思います。学校の生産物販売や地域のイベントへの参加などを通して農業への理解を深めてもらうことで、農業への興味を持ってもらうこともでき、非農家の農業高校生にも農業という職業への興味関心を持たせることができると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 鹿児島県立種子島高等学校

生物生産科 3年 日笠山 青空

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

ア 現状と課題

- ・農業クラブの活動の意義や内容を深く分かっておらず、情報の発信が出来ていない。
- ・情報発信が出来ていても内容が面白くないため、関心を持ってもらえない。

イ 理想（求める姿）

- ・クラブ員が農業クラブについて理解を深め、活動を充実させる。
- ・クラブ員が主体となり、小さな規模のイベントから開催する。
- ・地域のイベントに参加し、地域や地域住民との交流を深める。

ウ 解決策

- ・SNSで農業クラブに関する投稿をしても、投稿頻度が少なく内容が充実していないためまずはクラブ員が農業クラブやSNSに対して関心を持ち、内容を充実させる必要がある。
- ・農業クラブに対する認知度や関心が低いいため、地域ぐるみの活動や行事に参加する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

ア 現状と課題

- ・クラブ員が主体となった活動が少なく、毎年同じ活動を繰り返しており刺激が少ない。
- ・他校のクラブ員との交流が少なく、他校の取り組みが分かりづらい。

イ 理想（求める姿）

- ・従来の活動ではなく、クラブ員が主体となり活動内容を充実させる。
- ・県連や各単位クラブのSNSを開設し、他校のクラブ員と交流を実施する。

ウ 解決策

- ・SNSなどを通して他校のクラブ員と交流できる機会を増やしたり、クラブ員が主催となった活動を増やしたりして、農業クラブへの興味・関心を高めていく。また、県連や各単位クラブのSNSを活用し、農業クラブの活動や意義について知ってもらう。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

ア 現状と課題

- ・若い世代が農業に対してあまり関心をもっていないため、従事者の高齢化が進んでいる。

イ 理想（求める姿）

- ・若い世代が農業に対して関心を持ち新規就農者を増やす。
- ・農業の役割を知ってもらうとともに楽しい農業・稼げる農業を展開する。

ウ 解決策

- ・スマート農業や稼げる農業、楽しい農業を発信し、若い世代にもっと関心をもってもらい成功している事例を沢山見てもらい知ってもらう。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 高知県立幡多農業高等学校
グリーン環境科 2年 尾形 銀太
園芸システム科 2年 藤本 桃花
園芸システム科 2年 岡 紫菜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

・SNSの効果的な活用

幡多農業高校ではInstagramやYouTubeを活用して地域の方々に「知ってもらおう」活動を行っている。その効果が少しずつ見えてきて、はたのう市場ではたくさんの方々にご来場いただいた。

・インターネット・AIを活用し先端農業を学び、議論を深めていく

スマート農業が進み、農業とテクノロジーが融合していくこの時代に、農業の本当の価値を考え、どうすれば農業で今後の社会が豊かになるかをクラブ員同士で議論をしていくことが重要と考える。まず幡多農業が発信の拠点となり、他県のクラブ員の刺激となるよう日々の実習・研究に励んでいきたい。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

・宿泊研修や交流会で出会い、深める

県外のクラブ員と繋がり楽しい体験をすることで連携が強まり、団結力が生まれる

・グループラインを作る

若者が仲良くなるために手っ取り早いのがグループライン！そしてインスタの交換で互いを知る。その後直接出会い、農業クラブの活性化につなげる

・学校への留学制度を設ける

上と繋がるが他の農業高校への留学制度があれば、自然と輪も広がり、知見も広がる

・自ら学びたいと思う課題研究の設定と地域に触れる

課題研究を自ら深堀りしたい！という意識が大事。どうしても教員にやらされている部分が強くあるように感じる

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

・スマート農業を学ぶ

若い人はスマホやパソコンに慣れているから、ハウスの環境制御の操作や機器の取り扱いを担う

・どんどん農家と関わっていく

現場や実状を知らないクラブ員が多い。たくさんの農家と触れ農業の素晴らしさを地域で農場で知ることが大事

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立羽生実業高等学校

園芸科 2年 佐藤 黎

園芸科 2年 中村 瑞希

農業経済科 3年 菅原 杏衣來

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・地域の除草作業、落ち葉はき等の活動にボランティアとして参加し、チラシ（学校の公式SNSのQRコード添付）を配布して宣伝する。
- ・県内で各校の生産物を持ち寄ってコラボ商品を計画・製造・販売を行う。
- ・地域のお店とコラボして商品開発を行う。
- ・学校行事として農ク主催のイベントを行う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・農業単独校以外の学校において他学科の生徒に農業体験をしてもらう。
- ・ミーティングの回数を増やし、校内の連携を強める。
- ・農クについてまとめた掲示物を校内で掲示し、流れができれば地域にも掲示できるようにしていく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・SNSを活用し、農業の魅力や日々の活動の様子を伝え、農業へ関心をもってもらう。
- ・見た目が映える野菜を生産し広めていく。
- ・高校生でも生産できる場所を作り、そこで生産したものを販売できる場所も作り、その回数を増やすことで農業の持続化を図る。
- ・各種イベントへ参加し著名な方と交流ができる環境を整え、コラボできる流れを作る。
- ・スマート農業を広める（ドローンなどの機械へ興味を持ってもらう）。

参加者課題レポート

第2分科会

第4会場

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるためにはどのような活動があるか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第4会場	静岡県立田方農業高等学校	埼玉県立川越総合高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	北海道	岩見沢農業高等学校	農業科学科	3	浦端 元遥
2	栃木県	栃木農業高等学校	食品科学科	2	村田 和香奈
3	埼玉県	熊谷農業高等学校	生物生産工学科	3	下田 莉央
4	千葉県	流山高等学校	園芸科	2	須藤 美結
5	東京都	農産高等学校	食品科	2	中尾 梢
6	山梨県	農林高等学校	食品科学科	2	雨宮 魁杜
7	長野県	須坂創成高等学校	環境造園科	3	渡邊 眺太郎
8	福井県	若狭東高等学校	地域創造科	3	吉野 龍司
9	愛知県	鶴城丘高等学校	総合学科	3	長尾 海杏
10	滋賀県	長浜農業高等学校	農業科	3	田中 そら
11	鳥取県	鳥取湖陵高等学校	食品システム科	2	稲垣 瑠菜
12	岡山県	真庭高等学校	食農生産科	2	前田 ひなみ
13	福岡県	田川科学技術高等学校	農業食品科	2	下川原 凱翔
14	沖縄県	南部農林高等学校	食品加工科	2	赤嶺 寧夏

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
15	静岡県	田方農業高等学校	ライフデザイン科	3	杉本 優姫乃
16	静岡県	田方農業高等学校	ライフデザイン科	3	鈴木 優心
17	静岡県	田方農業高等学校	ライフデザイン科	3	千頭和 結衣

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
18	埼玉県	川越総合高等学校	総合学科	3	赤間 至利
19	埼玉県	川越総合高等学校	総合学科	3	工藤 悠希
20	埼玉県	川越総合高等学校	総合学科	3	石川 大貴

「園芸福祉」を活用した地域連携の取り組みについて

関東ブロック 静岡県立田方農業高等学校

ライフデザイン科 3年 杉本優姫乃

ライフデザイン科 3年 鈴木 優心

ライフデザイン科 3年 千頭和結衣

1 はじめに

(1) 沿革

本校は、伊豆半島の入り口に位置する田方平野の中央にあります。(図-1) 明治35年、郷土の先覚者仁田大八郎氏が「郷土の発展、産業振興は人材の育成にあり」と私財を投じて創立されました。平成12年4月1日に農業科、園芸科、畜産科、食品科学科、生活科学科を生産科学科、園芸デザイン科、動物科学科、食品科学科、ライフデザイン科に改編し、今年で創立123年目になります。現在は5学科5クラスで生徒数は586名です。

静岡県東部地域における農業教育の拠点校として、校訓「誠実・勤勉・自治」の精神に基づき、動植物を介在とした特色ある学びと、共生・共育の実践を通して、幅広い教養を身に着けるとともに、人間愛に満ちた豊かな心を育て、持続可能な社会づくりと地域産業・文化の発展に貢献する有為な人材育成を目指しています。(写真-1)



図-1本校のある函南町の位置



写真-1 田方農業高校校舎

(2) ライフデザイン科の学習内容

ライフデザイン科は健康で豊かな生活、人生を創るために、食と農、人とのかかわりを中心に学習を進めています。学科はフードコースとセラピーコースの2つの類型からなり、フードコースは健康な食生活を営むために、栄養と食品についての知識や調理技術について学び、セラピーコースでは園芸を総合的に学び、植物を活用した園芸福祉について学んでいます。

(3) ライフデザイン科セラピーコースの特徴

セラピーコースは「生物活用」を基幹科目として草花や野菜などの植物を介在とした農業の福祉的活用について保育園や特別支援学校、生活介護施設(写真-2)との交流活動をおとして学習を推進しています(資料-1) 特に同じ敷地内に軽度知的障害を抱える高等部の生徒が学んでいる静岡県立沼津特別支援学校伊豆写真-2 介護施設での交流活動田方分校があり、互いに尊重し合える関係を作り上げることを目標とした共同授業をおこなうなどインクルーシブ教育に力を入れています。



写真-2 介護施設での交流活動

2 認知症カフェの取り組み

(1) 認知症カフェ（※1）を開催した経緯

2018年より、函南町地域包括支援センターに依頼し、ライフデザイン科セラピーコース2年生を対象に「認知症サポーター養成講座」の受講をはじめました。この講座をきっかけとして、函南町地域包括支援センターと連携して函南町在住の高齢者を対象とした認知症の予防や介護予防事業が実施できないかというお話を頂きました。

函南町の認知症事業は認知症の方、認知症の家族を介護されている方を対象に認知症について気軽に話せる場所の提供として毎月1回函南町保健福祉センターを会場に認知症カフェ「スイカフェ」を実施しています。また、地域包括支援センター以外でも特別養護老人ホーム2か所、総合福祉センター1か所、NPO法人で1か所認知症カフェを実施していますが、本校周辺では認知症カフェが実施されていません。

そこで田方農業高校の施設を借用して実施できないかと函南町地域包括支援センターより依頼を受け、本校で受け入れが可能かどうか協議をしましたが、他の団体が主催する事業を本校敷地内で実施するには学校管理上難しいとの結論になりました。そこで本校が認知症カフェを主催し、函南町地域包括支援センター支援センターが協力する形で開催を進めることとしました。

※1認知症カフェとは

認知症カフェは、厚生労働省が2012年に策定した認知症施策推進計画（オレンジプラン）で打ち出されたプログラムです。認知症の予防対策や、地域・家族による支援体制の強化を目的としています。認知症の方やそのご家族、地域住民、介護や福祉の専門家などが気軽に集い、情報交換や相談ができる場であり、認知症の予防や症状の改善を目指した活動が行われます。自治体、病院、高齢者施設、特定非営利活動法人などが運営しており、主に初期段階の認知症、若年性認知症、軽度認知障害の方などを対象としています。

本人やご家族が認知機能の低下に気づき、早めに対策を講じて症状の進行を遅らせることを重視しているため、囲碁やカラオケといった記憶や思考機能を高める遊びや訓練などの支援が受けられます。また、ご家族を対象とした勉強会や関わり方に関する講習会も行われており、孤立しがちな本人やご家族と地域のつながりの場を提供しています。

(2) 認知症カフェの運営概要

本年度で6年目の開催となる認知症カフェは「認知症カフェ@田農」の名称でセラピーコース3年生の有志3人で本校の草花実習室を会場にしてスタートしました。

参加者については地域包括支援センターで開催告知、募集をして人数を調整する予約制としました。翌年度よりフランス語の花を意味するフルールから「ふる〜るカフェ」と名称を変更し、月の第1土曜日の午前中、年間7回実施することにしました。

運営するのはセラピーコース3年の「課題研究」において認知症カフェの企画と運営をテーマにするグループに加え、当日のカフェ運営については1、2年生からボランティアを募集しました。

(3) 認知症カフェ「ふる～るカフェ」の運営方法

①開催日	程年間7回（5月、6月、7月、9月、10月、12月、2月）
②開催時間	10時受付開始11時30分終了予定（約1時間半の内容で企画） ・運営生徒は9時に集合し打ち合わせを行う。 ・カフェ終了後に30分程度フィードバックを行う。
③開催場所	・田方農業高校ライフデザイン科草花教室 ・田方農業高校耕友会館（同窓会館）研修室
④参加者	・函南町内外の認知症当事者及び付き添い、認知症の家族、認知症予防の方、約15人程度
⑤参加費	・本年度より参加者1人につき、受付時に500円を集金 ※経費の用途：参加者のJAの「イベント共催」加入料 参加者、運営スタッフの飲料代。材料費の一部
⑥運営スタッフ	・3年生「課題研究」グループ本年度は6人、教員1人 ・ボランティア3～5人ライフデザイン科2年、他学科生徒 ※認知症カフェごとに学校全体でボランティア募集の告知 ・専門職作業療法士、高齢介護専門看護師、認知症認定看護師 ・その他近隣の包括支援センターや大学看護学生他

(4) 本年度の認知症カフェの様子

本年度は3名の3年生が認知症カフェの企画と運営を担当しています。「課題研究」において企画や進行の計画、材料の準備や試作品の制作やシュミレーションを行います。

前日に教室内のレイアウトや材料の準備を当日ボランティアとして参加する人達と一緒にを行います。
(写真-6～8)

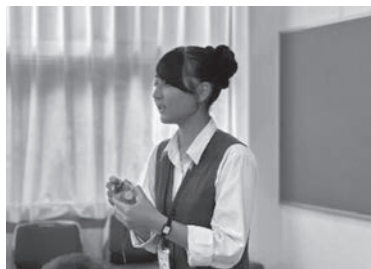


写真-6 ふる～るカフェ



写真-7 押し花を使った団扇の制作



写真-8 参加者さん集合写真

4 認知症マフの取り組み

認知症カフェを継続的に取り組む中で一昨年から「認知症マフ」の製作と普及・広報活動に取り組み始めています。認知症マフとはイギリス発祥の毛糸で編んだ筒状のもので、不安やストレスのある人の落ち着かない手を温かく包み込み、心地よい触覚や視覚による刺激が得られます。また、マフの暖かい色、柔らかい手触りによる心地よい癒しの効果から心と体の緊張を解きほぐし、安心感が得られ、周囲の人とのコミュニケーションのきっかけにもなるようです。

現在、認知症マフ製作・普及活動グループ「チームそわん」として、伊豆の国市認知症カフェ「いくべ〜」のボランティアスタッフの方々と協力してマフを製作しています。普及活動については伊豆の国市地域包括支援センター、順天堂静岡病院、NTT東日本病院認知症認定看護師の方と一緒に進めています。(図-2)

今後の取り組みとして、伊豆地域において継続的に製作し、病院や介護施設、在宅介護などで活用してもらう予定です。(写真-9,10)



写真-9 チーム「そわん」



写真-10 認知症マフ普及活動

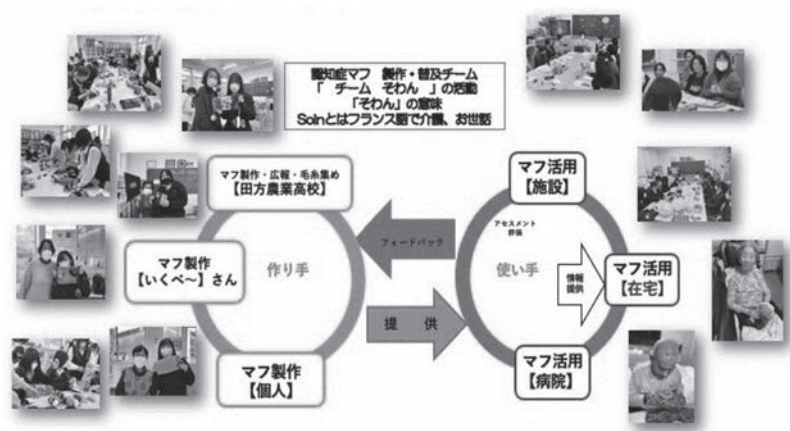


図-2 認知症マフ地域連携の仕組み

5 成果と課題

私たちが認知症カフェの企画や運営、認知症マフの制作や普及などの地域貢献やボランティア活動することは、様々な問題に対して、それらを自分の問題として捉え、多様な人たちと協働しながら解決にあたります。このことにより自尊感情や社会的有用感、コミュニケーション能力が高まっていると考えます。

また、課題解決のために、習得してきた知識や技術、経験などを使って取り組んでいくことで、これまで学習してきた成果を応用・発展させることになり、知の総合化を図っていく活動となっています。

しかしながら、地域との関係性を続け、深めることは地域における高校生への期待も大きくなります。

私たちは3年生であと少しで卒業しますが、地域との連携について継続・維持できる体制作りと、一過性のものにしないように、後輩に繋げて行き、継続的に活動して行くことが課題です。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道岩見沢農業高等学校
農業科学科 3年 浦端 元遥

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブのことを知らない人でも農業高校のことは知っている人は一定数いると考えます。そのため、本校では「農業フォーラム」という農業クラブ行事を企画し、地域の人とつながることのできる機会を設定しています。この機会を利用し、農業クラブの存在を広めていくとともに、SNSを活用して宣伝することで、私たちの農業クラブ活動を知ってくれた方が二次的に拡散してくれることを期待できると考えます。また、それぞれの学校の学びには特色があると思います。その特色を互いに尊重し、交流する活動を行うことも大切だと考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブ活動を活性化させるために、農ク執行部がクラブ員に対して「農業クラブ活動に取り組めば自分自身の力になる」ということを積極的に発信し、クラブ員に理解してもらうことや、地元の人との交流の中で、農ク活動の成果を地域と一緒に確認したりすることが大切だと考えました。そこで、本校の農ク執行部では、統計や文献収集はAIなどで入手できるスキルを生かすための表現方法を知りたいというアンケート結果を受けて、テレビやラジオなどで活躍されている方を講師にお招きし、発表態度のレベルアップを目標にスキルアップ講座を開催しました。その後の個別相談会では、クラブ員の発表に対する悩みなどを解決することができました。

今後は、この講座を受けたクラブ員による意見交換会を開催していくことで、より多くのクラブ員が興味、関心、交流、連携を高めることができると考えます。クラブ員1人1人が専門学習に対する力を付け、クラブ員の交流を増やす活動を継続すれば、農業クラブの活性化が達成できると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続可能な農業を広めるためには、目先の改良や改善をすることにとらわれず、長期的に見て有効なのかを地域の人や他校との交流を通じて確認していくが重要だと考えます。本校では「情報を発見して探求する」という解釈に変換されて、報道や防災などの分野で幅広く用いられている「Dig」という単語に動詞を付け、地域を深堀する姿勢「Digる」をキーワードに活動に全校で取り組んでいます。生産系列の学科では、4HクラブやJA青年部などの若い世代との意見交換会を行い、環境系列の学科においては、農業基盤を支える若手技術者とのグループワークや、ウッドショックなどが深刻化する林業で地元事業体とセミナーを開催するなどの活動を行いました。

そのほかにも、本校の7つ学科の代表者がパネラーとして集い、学びで得たリーダーシップを地域と一緒に共有することを目的に、市民公開型シンポジウム「みんなで語ろう農業フォーラム2025」を開催し、来場者全員で岩農の学びは地域を支えられると確認しました。

地域を知りながら深堀りする活動を継続することで、様々な視点を知るとともに短期的な考えだけではなく、中長期的な考え方が身につく農業の持続可能性を広げることができると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立栃木農業高等学校
食品科学科 2年 村田 和香奈

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

今大会の西関東大会は公式Instagramで大会情報の開示やPR活動をしている。それに倣ってSNSの活用方法として各ブロック、各県連毎に公式Instagramを開設し、リーダーシップの特集など地域と連携したプロジェクトや意見文等の紹介、その中で開催されるイベントのPR活動を行うとよい。地域との繋がりを大切にするためには、地域連携活動を継続し、学校と地域の関係確立することが求められるが、その活動を後輩たちにどう引き継いでいくかという課題もある。また、Instagramの運営のしかたについてもすでに実施している他校の状況を参考に検討していく必要があると考えた。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校での農業クラブの活動は事業の企画、運営など役員が中心となって行うが、役員以外のクラブ員は「自分は役員じゃないから関係ない」という思考になりがちであると思う。一人ひとりがクラブ員であるという自覚を持てるよう、クラブ員を巻き込む体制で運営していくべきだと考えた。活動の具体例として、

- ①意見箱の設置 → クラブ員の意見を反映しやすい形をつくる。
- ②タンポポ調査を例に、学校独自の校内での取り組みを実施
→ 目的や意義を明確にし、やらされているという意識をなくす。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業の大変そうというイメージを変えることが重要だと思う。昨今注目されているスマート農業の活用により、経験と勘が中心であった農業への若者の参入のハードルが下がることが期待される。本校でも農作業の省力化、管理作業の可視化をスマート農業によって実現している。

また、若い世代が農業を身近に感じるためには、農業を暮らしの一部として捉えることも必要となる。実際に農家にならなくても「家庭菜園程度ならできる」や「農的な暮らしをしてみたい」、「半農半X」というように農業への関わり方が多様になると良いと考える。農業高校で農業を学んだ私たちがこれからも農業に様々な形で関わることを求められる。



図1 本校におけるスマート農業の例
(農作業の省力化)



図2 本校におけるスマート農業の例
(ICT機器の導入)

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立熊谷農業高等学校
生物生産工学科 3 年 下田 莉央

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・農業クラブ専用のSNS アカウント（Instagram・X）を開設し、イベントの裏側やクラブ員の日常、地域活動の動画などを本部役員が積極的に投稿する。
- ・地域のイベントに参加して販売や出展をする。
- ・農業クラブ連盟に加盟している他校の文化祭に参加し、活動を調査する。
- ・埼玉県全体の農業クラブのSNS アカウントを開設し、各種大会の様子や運営の様子を投稿する。
- ・熊谷市の農工商の高校で交流を深め、商品開発・販売やプロジェクト活動につなげる。
- ・文化祭で地域の方々と交えて活動する。
- ・「熊農あるある」の動画を作成する。
- ・本部役員とクラブ員、または地域の方々も交えた農業に関する座談会を実施する。
- ・百貨店やスーパー、カフェなどで熊農産農作物・加工品を提供、コラボ商品の開発をし、ポップやポスターで宣伝する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・オンライン交流会を開催する。（他校のクラブ員、農家さん、農業関連企業の方など）
- ・長期休暇を利用して農業クラブ主催の校内または校外に向けたイベントを企画する。
- ・農業クラブで農産物を栽培し、地域の方々に向けた販売のみならず、ネット販売など販路を広げ、収益を上げる。
- ・農家の方々や OB・OG を招いて講演会や交流会を企画する。
- ・本部役員のためのイベントを企画する。（スイカ割、BBQ、菓子パーティなど）
- ・農業クラブ勧誘のポスターを作成する。
- ・農業クラブ活動をまとめた農業クラブ新聞を作成する。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・若い世代（地域の中学生以下）を対象とした農業体験（野菜の収穫体験や収穫物を使った料理教室など）を企画する。
- ・スマート農業、機械化農業、持続可能な農業を実施している企業の方を講師として招き、講演会・講習会を開催する。
- ・六次産業化に向けた支援を行い、収入の向上を図る。
- ・地球温暖化や異常気象による人体への影響を最小限に抑えるために、夜でも可能な農作業の知識や技術を身につける。
- ・農業を始めたい人たちへの支援制度を充実させる。
- ・幼稚園・保育園や小学校、中学校へ農業の PR に直接伺う。
- ・地域の農家さんとの座談会を企画する。
- ・環境にやさしい農業への取り組みを実践・SNS で発信する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立流山高等学校
園芸科 2年 須藤 美結

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

私たち高校生が所属する農業クラブは、農業の知識や技術を学び、地域社会と連携しながら活動する貴重な場です。しかし、その存在や活動内容は、まだ十分に地域や他校に知られていないのが現状です。そこで、私たちはSNSを活用し、地域や学校間のつながりを深めながら、農業クラブの認知度を高める活動に取り組む必要があると感じます。

InstagramやX（旧Twitter）、TikTokなどのSNSを活用し、日々の活動や成果、イベントの様子を写真や動画で発信します。特に、作物の成長過程や収穫の喜び、地域の方との交流の様子などを「ストーリー仕立て」で投稿することで、多くの人に親しみを持ってもらえるよう工夫をすることで認知度が高まっていくと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブの活動をより魅力的にし、クラブ員の興味・関心を高めるためには、仲間との交流や地域・他校との連携を意識した取り組みが重要です。私たち高校生が主体的に取り組める活動として、以下のような企画を実施してはどうかと考えます。

クラブ員が自分の興味に合わせて、栽培・加工・販売・研究などのテーマを選び、少人数でプロジェクトを進める活動を行います。例えば、「地元野菜を使ったスイーツ開発」や「環境にやさしい農法の研究」など、自由度の高い活動を通じて、主体性と創造力を育てることができると思います。

また、クラブ員同士のつながりを強めるために、収穫祭や農業クイズ大会、調理体験などのイベントを企画します。活動の成果を共有する発表会も行い、互いの取り組みを知ることで刺激を受け合い、モチベーションの向上につながるとおもいます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

日本の農業は高齢化により、担い手の減少や技術の継承が課題となっています。こうした中で、若い世代が農業に関心を持ち、持続可能な農業を広めていくことが、未来の食と地域社会を守る鍵と考えます。

私たちができることの一つは、農業の魅力を発信することです。SNSや動画配信を通じて、農作業の様子や収穫の喜び、地域の自然とのふれあいなどを発信することで、農業に対するポジティブなイメージを広げることができます。これにより、同世代の関心を引き、農業への参加を促すことができます。

さらに、地域の高齢農家との協働も効果的です。高齢者が持つ経験や知識を学びながら、若者が新しい技術やアイデアを提供することで、世代を超えた農業の継承と革新が可能になります。このような交流は、地域の絆を強めるとともに、農業の未来を支える力になると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農産高等学校
食品科 2年 中尾 梢

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSでは、頻繁に活動発信することで多くの人に知ってもらうことができる。ただ、繋がりを大切にするためには交流が必要だ。そこで、合同企画が有効だと考える。本校では区民祭りなどで販売を行っている。そこで近隣教育機関にSNSを活用しボランティアを募集したい。販売時には商品理解を深める必要があるの
で認知度向上に繋がる。加えて持続的な繋がりは、若い世代が農業に興味を持つきっかけとなる。SNS上では一方的ではなく地域・学校間で情報共有などを行うと良い繋がりができると思う。それに、この先も交流しやすい雰囲気作りになる。地域の対象は興味のある方、家庭菜園をする方など幅広くしたい。また、区民農園との交流も認知度向上に繋がるはずだ。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

まずは活動を知らせる必要がある。現在はホームページにて発信しているが、十分では無い。多くの人に見てもらうには直接的アピールも行うべきだ。例えば、農ク新聞がある。これは一目で活動を見ることができる。この新聞にSNSでの報告も行っていることを記載すれば持続的に知ってもらえると思う。交流、連携を高めるには合同活動が不可欠だ。活動時には多くの方向からアピールをし、参加を促したい。また、校内では分野別にグループがありその間の交流が活発ではないと感じる。そこで校内でも情報交換を行い、互いの理解を深めることが大切だと考える。そして、農業クラブ活性化には一方からのアピールだけでは足りない。誰でも意見を出せるような場を設け、交流のある企画を立てることが有効だと考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続可能な農業を広めるには、若い世代へ農業の魅力を伝える場が必要だ。そこで本校では近隣の子ども食堂と連携し、実習体験をするプロジェクトを計画している。体験では本校で作ったものを使用し、農業活動の認知度向上に繋げたい。同時に食品ロスなどについて話し、SDGsへの関心を深められれば良い。このプロジェクトでは食育を行うことで、参加した子供たちが農業の魅力に気付いてくれることを目指す。そこから興味を持つ方が増加すれば、持続可能な農業を広められると考える。そして、活動を多くの人に知らせることも大切だ。SNSで発信したり、見学を可能にしたりすることで機会を作ることができる。また教育機関との連携を強化し、高校での実習体験もできれば、若い世代が興味を持つきっかけとなる。加えてスマート農業や支援制度の情報発信が有効だと考える。現在は早くから機器を活用するため、若い世代の得意な分野である。そのため最新情報発信を積極的に行うことが持続可能な農業に繋がるはずだ。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立農林高等学校
食品科学科 2年 雨宮 魁杜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・SNSの学校間の相互フォロー
- ・学校間で販売品の交換（県外可）
- ・各都道府県内で農業高校合同の活動（例：販売会等）を行う

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・農クとしての学校行事を作る（例：田植え）
- ・他の部活動の生徒と活動する（例：写真部に活動している記録写真を撮ってもらう）
- ・校外活動を増やす（例：農家や市場など、人手不足のお手伝い）

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・SNSの活動（例：インスタへの投稿を積極的に行う）
- ・テレビで取り上げてもらう
- ・農業高校で作っているものをふるさと納税の返礼品に採用してもらう（例：ブドウ、ワイン）

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県須坂創成高等学校
環境造園科 3年 渡邊 昶太郎

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域の人との交流が最も農業クラブの認知度を高めることが出来ると考えています。具体的には、地域で問題になっている外来種などの生物の駆除を、地域の人と一緒に実施する、などの取り組みです。問題となっている生物の駆除なので、地域に貢献することができ、そして地域の方々との絆も深めることができます。また、そのことを、SNS などを使い多くの人に広めることで、地域に貢献している素晴らしいクラブ。などの良いイメージで広めることもできます。実際に須坂創成高校では、地域の小学生との農業体験交流を行っていて、その活動により、地域の小学校との絆が深まっています。したがって同じく地域との外来種駆除の交流も、小学生との農業体験交流と同じく、絆を深めることができると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

複数の学科が協力して取り組める活動を大切にするべきだと思います。農業といっても様々な農業系クラブがあります。果樹、野菜、花き、食品、造園クラブなどです。それを利用した活動をもっと大切に行うべきだと考えました。例えば、果樹クラブや野菜クラブで生産した農産物を、食品クラブが加工し、できた加工品を地域の人に販売する活動は、クラブ員の連携や興味を高めることができます。またその活動を、地域の人にも知ってもらうことができるので、農業クラブの活性化にもつながります。

実際に須坂創成高校では、学校で作ったリンゴなどを使い、食品クラブの生徒がジャムやワインに加工し、創成フェアで販売しています。それらの活動により、クラブ間で連携がたかまっていて、農業クラブの活性化にもいつながっています。このような活動は、多くの農業高校で行われていることであると思いますが、興味、関心、連携を高めるためには素晴らしい活動なので、今よりも大切に取り組むべきだと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続可能な農業を達成するにあたり、今最も弊害となっていることは、若者の担い手不足だと考えています。したがって、持続可能な農業を達成するためには、農業高校が地元の小学生と授業で農業体験をするべきだと考えています。

須坂創成高校では、授業の一環として地元の小学校と農業体験を行っています。それにより、小学生が農業に触れる機会が得られるため、将来農業に携わる人が今よりも増えると考えます。実際に、小学生からは、将来農業をしてみたい。農業高校に入りたい。という声が出たのも事実です。このような取り組みがなければ、農業の魅力を伝える場面がなくなり、若者が農業に触れる機会が減ってしまうと思います。小学生がこれらの経験によって将来、農業という選択肢を与えることで、持続可能な農業の達成につながると考えています。そしてそれができるのが農業高校だと考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立若狭東高等学校
地域創造科 3年 吉野 龍司

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

InstagramやX（旧ツイッター）を使い私たちの活動を広める手法としては有効的なものであります。また、同じ考えや活動をしている人を見つける手法としても有効であります。しかし、実際に活動するためには、実際に会って、会話をし、相手の「表情や考えを聴くことが大切ではないか」と思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

○活動目標を立てた活動をする。

①農業クラブカレンダーを作成し、クラブ員へ活動状況をお知らせする。

②校内各所に鉢花やフラワーアレンジメントを装飾する。

○リーダーシップの記事の活用

全国でいろいろな活動にチャレンジしている仲間がいることを知る機会にもなり、課題研究のヒントにもつながる。知ってもらふ機会にしている。そして、農業クラブ活動



3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

本校では、地域の保育園との交流学习に取り組んでいます。一緒に農作物を育てながら、私たちといっしょに食を考える機会の1つにしています。今年度は、ジャガイモと一緒に栽培しました。その中で、紙芝居を利用して、次の次の世代の若い子供たちに農業のお楽しさや面白さを伝えてました。また、農業機械に興味関心を持った子供たちに触れてもらう機会にもなりました。



クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立鶴城丘高等学校
総合学科 3年 長尾 海杏

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

認知度を上げるためInstagramやTikTokなどのSNSでは、ショートムービーや写真などを使い、普段の様子だけではなく、農業鑑定競技会や意見発表会、全国大会の様子も発信することができる。農業クラブでも学校単位だけではなく、県連や東海でのアカウントを作り、活動をみんなで共同で発信することができる。しかし、SNSは若い世代が多く利用しているため、すべての人が気軽に見ることができるテレビがよいと考える。最もよいのは、全国区のゴールデンタイムに取りあげてもらったり、芸能人が農業高校を取りあげたりすると、農業クラブという名前は知ってもらえると思う。また、つながりを大切にするには、学校用のInstagramを作成し、相互フォローするだけでもお互いの状況を知ることができる。さらに、農作物を販売する際に販売情報と共に農業クラブでどんな活動を行っているか発信することでどんなことをやっているのか知ることが出来る。野菜や米などの収穫体験や花の管理、子供向けイベントなど、体験型イベントを学校だけでなく、地域全体を巻き込んで行うことで運営を行っている生徒のことも知って貰えると思った。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

広報活動として、定期的集まって行う農ク新聞やラジオなどを行うことで、農業クラブ員同士の交流も増えると思う。新聞も手洗い場やトイレなど絶対に目につくようなところに張るなどの工夫をする。SNSなども農作物を販売する際に販売情報と共に農業クラブでどんな活動を行っているか発信することでどんなことをやっているのか知ることが出来る。ショートムービーや写真などを使い、普段の様子だけではなく、農業鑑定競技会や意見発表会、家畜審査競技会、全国大会の様子も発信する。交流活動として、販売を行って、地域の方との交流もとることができる。米の収穫体験や餅つき大会なども行っている学校もあり、全員が協力して行うため、交流も連携も高めることができると思った。全校でどんなことに興味関心があるかアンケートを取って、他の科で普段体験できない、野菜や果物の収穫体験、花の管理、動物の管理作業などを体験できる時間を設けることで、知らないことを発見できると考えた。第2分科会のテーマである交流や連携を高めることで、第1分科会のテーマでもある、農業クラブの認知度をあげることができると思った。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業は、手作業で「キツイ」と思っている人も多いと思う。まずは、小学校や幼稚園で農業体験をして、農業自体を身近に感じてもらうことで、将来の選択肢の一つになると考える。若い世代が、農業のやり方を教えるため、訪問し直接教えることが大切であると思う。まずは若い世代に知ってもらうため、行政やSNSでどんなことを行っているのか発信することも大切だと思った。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立長浜農業高等学校
農業科 3年 田中 そら

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を高めるためには、SNSを有効活用し、写真や動画で活動内容や成果をわかりやすく発信することが良いと思います。農業の魅力ややりがいをストーリーにして伝えれば、共感してくれる人も増えると思います。さらに収穫祭や料理教室、体験学習など地域の人々も参加できるイベントを企画することで、交流も深まると思います。また、他校のクラブと共同で活動したり、卒業生の活動紹介も効果的だと思います。地元のメディアへの取材依頼により、活動を広く伝えることができれば、地域社会に貢献するクラブとしての存在感が高まると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを活性化させ、クラブ員の興味や関心、交流や連携を高めるためには、様々な活動を工夫することが大切だと思います。例えば、バーベキュー大会や農産物を使ったゲーム大会など、クラブ員たちが農業を楽しみながら学べる行事を取り入れると活動への意欲が高まると考えています。また、他校クラブとの合同イベントや研究発表会などを行うことで、交流が広がると思います。さらに、地元の祭りやイベントに積極的に参加して地域の方々に関わることで、地域との繋がりも深まります。このように楽しさや学び、交流を組み合わせた活動を行うことで、農業クラブは、より活発になり、地域からも頼られる存在になっていくと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

高齢化が進む農業を持続可能にするためには、若い世代が積極的に関わる大切だと思います。例えば、SNSでユーモアを交えて写真や動画を発信したり、学校や地域で農業体験のイベントを企画することで、楽しみながら農業に関心を持ってもらえます。また、ICTやドローンなどの先端技術を活用したスマート農業の技術を取り入れれば、効率良く作業ができ、若者が農業に持つ「過酷な労働環境」という考えを減らせられると感じました。さらに、卒業生や地域の先輩の方々と連携して、情報や経験を共有することも持続可能な農業を広める助けになると考えました。若い世代が農業に関わることで、地域の農業を未来に繋げられると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立鳥取湖陵高等学校

食品システム科 2年 稲垣 瑠菜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

＜現状＞

- ▶生産物の販売、地域交流
⇒小学校児童と花苗のポット定植。

＜問題点＞

- ▶情報発信のノウハウ不足、反応の乏しさがモチベーション低下につながっている。
- ▶参加している生徒が一部に限られる。

＜対策＞

- ▶SNS等の運用体制づくり。情報発信の強化。
- ▶農業クラブの活動を増やす。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

＜現状＞

- ▶意見発表会、プロジェクト発表会、平板測量競技会、農業鑑定競技会、家畜審査競技会などの活動を通じて、生徒が主体的に学ぶ場を提供している。

＜問題点＞

- ▶実施するイベントの発案が難しい。
- ▶成果や活動の「見える化」が十分でなく、達成感ややりがい伝わりにくい。

＜対策＞

- ▶生徒の関心を高めるために
⇒農業の多様性や最新技術、国際的な視点を生徒に伝える。
- ▶次の活動も有効と考える
⇒外部講師・卒業生との連携。
⇒気軽に参加しやすい農業クラブ活動を実施。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

＜現状＞

- ▶若年層にとって就農のハードルが高い（重労働、収入が不安定、魅力的な仕事にみえない）。

＜問題点＞

- ▶農業の魅力を感じとれない（重労働、低収入）
- ▶農業を始めるにあたり、初期投資がかかりすぎる。どのように農業を始めたらいかがかわからない。

＜対策＞

- ▶地域の方と連携しながら農業を行う。一人ではなく集団で農業を考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立真庭高等学校
食農生産科 2年 前田 ひなみ

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

1 現状

- ・学校の行事授業紹介は載っているが農業クラブの活動内容についての記事は少ない。
- ・野菜の販売告知はできている。閲覧し買いに来るのでSNSは見ている。

2 問題点

- ・SNSで引き付けられるような行事が少なく、別の学校とのつながりはほとんどない。
- ・認知度を上げるためのSNSであるが、もともと興味がある人以外を引き付けられていない。

3 対策

- ・SNSで広められる農業クラブの活動を増やす。収穫祭などで農業クラブとして出店する。
- ・競技会などの活動内容を動画にして発信する。画像だけより理解してもらいやすい。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

1 現状

- ・真庭高校では各競技の参加や役員の立候補は積極的である。代表生徒は県連盟の行事で交流が盛んにあり、幹部講習会では役員を中心に多くの生徒と交流が深められている。
- ・役員や代表の生徒は楽しみながら責任感を持ち校内行事や各種発表・競技に取り組んでいる。

2 問題点

- ・農業科の生徒だが農業について興味がない人が多く競技に参加する人が固定化されている。

3 対策

- ・競技に参加することで得られる知識や技能にどんなものかを役員や参加者が新入生などクラブ員へプレゼンテーションする。また競技の体験会を行い興味付けの機会を作る。
- ・校内で他科へ広げてさらに地域へ広めていくために小さい活動から行っていく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

1 現状

- ・新規就農者の増加や農業への興味付けのために検定や専門授業（企業や大学との連携）に力を入れている。循環型農業など持続可能型農業、スマート農業について授業では学んでいる。
- ・真庭市内でも高齢化が進んでいるが法人化、組合やグループで農業に取り組んでいる。

2 問題点

- ・スマート農業導入には高価な農業機械や施設の導入費、必要な資格取得の費用など金銭面での課題など農業のイメージが悪く、授業内で考えているが実行には移せていない。

3 対策

- ・授業の中で考えた就農者を増やす取り組みを文化祭や学習発表会など学校外へPRできる行事の中で広報する。自分たちと同世代やさらに若い世代へアピールするために農業での取り組みを中学校や小学校、こども園などで交流学習を行う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 福岡県立田川科学技術高等学校
農業食品科 2年 下川原 凱翔

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・現状として、SNS通じた、農業クラブ全体の活動を活動報告などの掲載がないため、公式SNSアカウントを作成する。農業クラブ活動を発信することで、より多くの人々に農業クラブの存在と、活動内容の実態を知ってもらうことができる。
- ・学校ごとにSNSアカウントを作成することで、その学校が普段行っている活動が分かり、地域の人々にもそれが周知されることで、インターンシップや招聘事業なども、さらに有意義になると考える。
- ・SNSを利用していない人には、以前と同様にポスターやソーシャルメディアを用いて、情報発信を行う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・農業高校がそれぞれ公式SNSアカウントを作成し、各学校での活動内容をSNSを通じて発信する。中学生が、その農業高校に対して興味関心をもってもらうことで、農業高校に進学する生徒数が増加すると考える。
- ・クラブ員数が増加することで、農業クラブの活性化につながると考える。
- ・意見発表やプロジェクト発表会だけでなく、農業高校間で交流の場を設けることで、それぞれの農業高校でどのような活動が行われているかや、栽培・飼育されている作目を知ることで、各農業高校で行われている活動内容を、自校に取り入れることができる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・若い世代が農業に対して興味関心がないため、農業の魅力を知ってもらう必要がある。SNSやメディアを利用したPR活動を行う。
- ・農家と非農家の交流会の場を盛んにする。非農家の人が農家の話を聞くことで、就農を考えることができる。
- ・まずは、農業がどのようなものかを知ってもらうため、農家の人が小中学校などに出向き、農業体験や講演会などを行う。普段、農業に関わる人が少ない非農家の子どもたちが、実際に農作業を体験したり、農家の人の話を聞くことで、将来農業に携わりたいと思ってもらえるのではないかと考えられる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立南部農林高等学校
食品加工科 2年 赤嶺 寧夏

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- 【実 態】SNSでの情報発信が少ないため認知度が低い。他の農林高校との交流が少ないため活動が分からない。また生徒自体の農クへの、興味関心がなく意欲がない。
- 【問題点】意欲や継続性がないため、情報発信が少ない。農業についての偏見が多く興味を持ってもらえない、地域の人に紹介する機会がない。問題解決のための具体的な取り組みイベントを通じて、農クを紹介する機会を増やす、SNSなどを活用し情報発信をする。地域に貢献できる、校外で活動する行事を増やす
- 【まとめ】SNSを活用し他学校や地域との交流を増やして、情報を提供していきたい。また、イベントなどを通じて、農クの取り組みや、認知度を上げ農業に対するイメージアップに繋げていきたい。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- 【実 態】クラブ委員の興味関心、交流、連携があまりできていない。また、農業クラブをあまり知らない人が多く、農業クラブに新入生が少ない。
- 【問題点】農業クラブの活動内容を理解していない。他校と交流する機会がすくない。問題を解決するための具体的な取り組み他校との交流、イベントを行う。Teamsを活用した広報、デジタル新聞などの情報交換。また新入生対象に農業クラブのPRを行う。
- 【まとめ】他校との交流は費用などを考え難しいと思った。そのため、取り組みやすいTeamsを活用した広報やデジタル新聞などの情報交換をすることによって興味関心を、連携を高められると考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- 【実 態】日本の農業は深刻な高齢化問題となっている。農業従事者の約7割が65歳以上で平均年齢も67歳を超えている。農業に憧れを持ち、農業を始める人も少なからずいる。
- 【問題点】農業＝「ダサい」というイメージはある。農作業の負担が大きい。初期費用が高い。知識と技術の伝承との難しさがある。収入が不安定である。
- 【問題解決のための具体的取り組み】農業のSNSでのコミュニティーを増やす。農業体験をしてもらう。国から給付してもらう。外国人労働者の受け入れ、団体を作る。IT導入でイメージアップ。
- 【まとめ】農業をゼロから始めるには、多額の費用が必要になるため、国からの支援も必要。
農業＝「ダサい。重労働、収入の不安定」というイメージがあるので、ITなどを使うスマート農業を取り入れて、イメージアップにつなげたり、幼稚園や小学生の頃から農業体験の授業を取り入れたり、SNSで農業の楽しさを広める。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立田方農業高等学校
ライフデザイン科 3年 杉本 優姫乃
ライフデザイン科 3年 鈴木 優心
ライフデザイン科 3年 千頭和 結衣

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるには、一方的な情報提供ではなく、クラブ員が主体的に参加できる活動を企画することが重要であると思います。以下のことを提案します。

1 興味・関心を高める活動

(1) 先進的な農業技術に触れる機会を作る：

ドローンやAI など、最新技術を導入している農家への見学ツアーや、専門家を招いた講演会を開催することで、農業の未来に触れ、新たな可能性を感じてもらいます。

(2) 「こんな農業がしたい！」を見つける

農業の多様な分野（有機農業、六次産業化、農福連携、スマート農業など）について、それぞれの専門家を招いて少人数制のワークショップを開催します。クラブ員が自分の興味のある分野を深く探求できる機会を提供します。

2 交流・連携を深める活動

(1) テーマ別交流会：

共通の関心を持つクラブ員同士が深く交流できる場を設けます。「野菜づくり」「畜産」「加工品開発」「園芸福祉」など、テーマごとにグループを分けて交流会を開くことで、情報交換や技術共有を促します。（カフェ形式で話しやすい感じが大切です。）

(2) 地域貢献型プロジェクト：

地域のお祭りやイベントなどいろいろな場所で、クラブ員が育てた農作物を販売したり、収穫体験イベントを企画したりします。地域の人々と触れ合うことで、自分たちの活動の意義を再確認し、農業に対する誇りを育みます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立川越総合高等学校

総合学科 3年 赤間 至利

総合学科 3年 石川 大貴

総合学科 3年 工藤 悠希

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・地域のお祭りやイベントへの参加をする
- ・SNSを活用する
→農業クラブの役員が一般的に発信する。というよりも投稿する写真や動画は「楽しそう！やってみたい！」と思えるようなものにする。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・宿泊交流
→学校では体験できないことをする。
 - ・農業の知識が増える。
 - ・他校の役員との交流が活発になる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・若者が利用するSNSを活用
→講習会など農家さんとの交流、サポートができる体制を整える
→農業へ不安をもっていて「農業を始めづらい…」という人をサポートすることで、農業へ新規参入の活性化に繋がる。

参加者課題レポート

第2分科会

第5会場

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるためにはどのような活動があるか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第5会場	奈良県立磯城野高等学校	群馬県立富岡実業高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	岩手県	盛岡農業高等学校	植物科学科	2	高橋花恵
2	栃木県	真岡北陵高等学校	生物生産科	2	田崎璃穂
3	埼玉県	杉戸農業高等学校	生物生産技術科	3	中森晴希
4	千葉県	成田西陵高等学校	園芸科	3	宮川結衣
5	東京都	農産高等学校	農産科	2	川杉大夢
6	山梨県	笛吹高等学校	食品化学科	2	藤原利綺
7	長野県	更級農業高等学校	生物科学科	3	櫻井大河
8	福井県	福井農林高等学校	食品流通科	3	神野優心
9	愛知県	半田農業高等学校	施設園芸科	3	倉橋佐和
10	滋賀県	甲南高等学校	総合学科	2	藤橋律希
11	島根県	出雲農林高等学校	動物科学科	2	藤原 庵
12	岡山県	高梁城南高等学校	環境科学科	3	茅野由依
13	佐賀県	唐津南高等学校	生産技術科	3	青木颯飛
14	沖縄県	南部農林高等学校	生物資源科	1	崎浜由衣

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
15	奈良県	磯城野高等学校	農業科学科	3	下山咲梨乃
16	奈良県	磯城野高等学校	農業科学科	3	藤岡 なな子
17	奈良県	磯城野高等学校	農業科学科	3	大田 心愛

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
18	群馬県	富岡実業高等学校	生物生産科	3	佐藤愛莉
19	群馬県	富岡実業高等学校	地域産業科	3	神山 輝
20	群馬県	富岡実業高等学校	地域産業科	2	笠原小春

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

近畿ブロック 奈良県立磯城野高等学校

農業科学科 3年 下山咲梨乃

農業科学科 3年 藤岡なな子

農業科学科 3年 大田 心愛

1 はじめに

(1) 近畿ブロックの紹介

近畿学校農業クラブ連盟は、滋賀県（4クラブ1,176名）・和歌山県（4クラブ361名）・大阪府（3クラブ1,132名）・京都府（10クラブ902名）・兵庫県（11クラブ2,213名）・奈良県（5クラブ662名）の2府4県が加盟しており、総クラブ数37、総クラブ員数6,446名で構成されています。

(2) 奈良県連盟の紹介

奈良県連盟は御所実業高等学校90名・山辺高等学校55名・西吉野農業高等学校66名・山辺高等学校山添分校20名・磯城野高等学校431名のあわせて5校、クラブ員数662名で構成されています。



滋賀県	1, 176名
和歌山県	361名
大阪府	1, 132名
京都府	902名
兵庫県	2, 213名
奈良県	662名

計37校 クラブ員数 6, 446名で構成



御所実業高等学校	90名
山辺高等学校	55名
西吉野農業高等学校	66名
山辺高等学校山添分校	20名
磯城野高等学校	431名

計5校 クラブ員数 662名で構成

(3) 奈良県の農業

奈良県の農業は柿（収穫量24,700t・全国2位）や花壇用苗パンジー（出荷量4,930千本・全国6位）などを中心に生産されている。ですが、総農家数21,950戸（全国38位）、農業産出額は413億円（全国45位）と、農業に後進的な地域となっている。

(4) 磯城野高等学校

奈良盆地の中心に位置し、駅から徒歩5分、学校の東側は住宅地と都市近郊型の学校です。農業科4学科8コース4クラス、家庭科3学科4コース3クラスの併設校です。奈良県内の農業科を有する学校の中では一番、生徒数が多い学校です。果樹、露地野菜、畜産、施設野菜、施設草花、植物バイオ、食品加工、造園等を学ぶ専門クラブに分かれて、課題研究に取り組めます。



2 事例報告

(1) 直売所『しきのいろどり』

農業クラブ活動として、「直売所『しきのいろどり』」の運営に力を入れています。

直売所「しきの彩」は毎週火曜日に営業しており、多くの本校生徒や地域の方々が来店します。去年は約2,000人のお客様が来られました。社員である農業クラブ役員もやりがいを感じながら営業することができました。本校生徒は他学科の農産物を見ることにより、他学科の取り組みを知る場にもなっています。これらの活動をとおして、「新たな地域貢献」と「専門性の深化」をはかっています。



(2) 様々な発表会での受賞による活動の周知

様々な場面で、受賞により日々の取り組みの自信や、より深い学びをするための意欲向上につながり、生徒間で切磋琢磨し、知識や技術の向上につなげています。

農業クラブの大会だけでなく、様々な場面で日々の農業クラブの取り組みを発揮し受賞することで、多くの生徒のやる気につながっています。



(3) 文化祭での課題研究のパネル展示

文化祭で各専門クラブの取り組みをパネルで展示し、お互いの取り組みが見えやすくなるように取り組んでいます。

お互いの取り組みを見ることにより、普段なかなか知ることのできない課題研究の取り組みなどを知ることができ、それぞれの専門クラブに関連してできることはないかなど、現在の取り組みを発展させるきっかけを見つけることができ、とても良い刺激になっています。また、1年生、2年生には、今後の研究したい内容の発見にもなり、とても貴重な時間となっています。



(4) 農業鑑定競技会の県大会の開催

奈良県は農業鑑定競技会の県大会を開催しています。県内5校で全国大会に向けて、競い合い、知識の向上に努めています。各校の農業クラブ員どうしが切磋琢磨することにより、より高いレベルでの農業鑑定競技会の実施に取り組んでいます。



3 まとめ

農業クラブ員として興味や関心を引き出すためにも、まずは自らが所属する学校のことをよく知り、それぞれがどのような取り組みをしているのかを、しっかりと知る必要があると思います。入学して、農業クラブに興味を持つ人はかなり少ないと思いますが、その興味を持った人が活躍し、その周りの人たちが、興味を持ち、一緒に取り組む様になっていくことで、農業クラブの輪が広がり、共に学び合う仲間が増えていくと思います。

本年度は近畿ブロックの事務局校として、近畿連盟大会の運営を行うことができました。多くの農業クラブ員が近畿連盟大会を成功させるために協力しました。令和9年度には植樹祭と農業クラブ全国大会、平板測量競技会の実施担当校が待っています。今後もより一層、農業クラブへの意識を高めていけるように取り組んでいきます。それぞれが農業クラブ員の一員として自覚を持てるように今後も様々な取り組みを考えていきたいです。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 岩手県立盛岡農業高等学校
植物科学科 2年 高橋 花恵

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校では、農業クラブ機関紙である「案山子（かかし）」を発行しております。最新版は71号と長年にわたり継続されてきました。農業クラブ員の活動実績や各種大会の結果、農業クラブに係る多くの方々のご支援を頂きながら発行しています。今後もこの活動を続けていくのはもちろん、SNSを通じて新しい認知を得る事にもチャレンジしています。noteという、文章や写真、音楽や映像の投稿・共有ができるプラットフォームを活用し、昨年開催された農業クラブ全国大会、岩手大会を盛り上げることができたと感じています。



2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブの活動として「農クラジオ」を行っています。お昼休みの時間を使い、行事のお知らせや大会報告、選挙の運営を担っています。今後の取り組みとして、地元の農家の方、卒業生や先生をお呼びして、インタビューを行いたいと考えています。どうして農業に関わる仕事をしているのか、教員になったきっかけ等をお聞きすることで、岩手で働く身近な方々との交流ができ、私たち高校生の職業意識も高まるのではないかと思います。

また、文化祭行事で農業クラブブースを設営し、クラブ員オリジナルの物品販売を行いたいです。学校の特色や地域の特産品について深く知ること、自分たちで手掛けたものを相手に評価してもらうことといったこの活動はとても興味深く、農業クラブの活性化に大いに繋がるのではないかと考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

若い世代の方に進んで農業をしてもらうためには、稼げる、楽しいというイメージがなければならないと思います。そこで私は、農場という広いフィールドを会場とした音楽イベントを定期的で開催し、子どもから大人が楽しめる場を提供したいです。トラクターや耕運機といった機械をライトアップし、SNSを通して認知を拡大する。地元の高校生や若い世代を募りフェスのような明るく楽しく、力のみなざる場を作ることが小さなきっかけになるのではないかと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立真岡北陵高等学校

生物生産科 2年 田崎 璃穂

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

InstagramやTikTokなどのSNSを通じて、流行の音楽や映像とともに農業クラブの活動や農業の魅力を高校生自身が紹介することで、若者の農業への関心を高めるきっかけになると考えます。さらに、学校祭の際には農業クラブのポスターを作成して校舎内に掲示したり、マルシェや地元のお店に協力を依頼して掲示してもらったりすることで、地域の方々に農業クラブを知っていただくことができます。これにより、地域とのつながりが深まり、クラブ活動の幅も広がると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

学校で育てた農作物や畜産物を学校祭で販売するだけでなく、クラブ員が主体となって地元のスーパーでマルシェを開催できれば、地域の方々との交流の場となり、興味や関心を高めることにつながると思います。また、県内の農業高校同士で互いの活動を見学したり、周辺地域の農家を訪問したりすることで、新たな学びや連携が生まれ、農業クラブの活性化につながると考えます。さらに、学校祭に合わせて農業クラブの紹介ポスターを作成し校内に掲示したり、地元のお店やマルシェに掲示してもらったりすることで、地域の方々に農業クラブの存在を広く知ってもらうことができると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

「農業＝古い・大変」というイメージがありますが、InstagramやTikTokなどのSNSを活用し、農家へのインタビュー動画や流行に合わせたコンテンツを通じて農業の魅力や大切さを発信することで、若者の興味を引くことができると思います。また、私自身が小学生のころに体験した芋掘りや、その収穫物を給食で食べた経験は今でも印象に残っています。このように、小さい子どもや若い世代が農業体験を通して農業に触れることは関心を高めるきっかけになると考えます。そのため、学校や地域でマルシェや体験イベントをより多く開催していくことが、持続可能な農業の普及につながると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立杉戸農業高等学校
生物生産技術科 3年 中森 晴希

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

育てた野菜を売ったりするときにどんなことをして育てたのかを書いた紙をいれる
駅や学校などにポスターや張り紙を掲示
電車やバスなどの公共交通機関にポスターなどを展示する
地域新聞やテレビなどで紹介してもらう
回覧板に広報誌として載せる
学校外でイベントを開く。
小中学校や小中学生が参加する地域行事での販売会・体験会の開催
スーパーなどに張り紙をお願いする
即売会などで宣伝する

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

Instagramアカウントの開設（学校単位・県連単位）
他校が育てた作物などの試食会 研修旅行
他校との合同農業体験や交流会
AIやドローンなどの新しい技術を活用する
農業を営む若者同士の情報共有
オーガニック、環境負荷の低い栽培、フェアトレードなどを掲げ、「持続可能性」のブランド化を図る
SNSを活用してネット販売を行う

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

体験してもらう
実際にやっているところを見せて興味をもたせる
農業高校以外の普通高校でも、授業の一部で農業について学ぶ
驚くようなことをして目を引く
農業高の生徒と農業従事者が協力し、小学校や幼稚園に出向いて、一緒に農業体験をする
無印良品の広場などで地域の人と交流会的なのをする
今の農業にはAIを使った技術があることを見たり、体験したりして興味を持ってもらう。
スマート農業や農業経済の知識が若い世代に広まることで、社会にどのような利益をもたらすのかの情報を発信する
SNSの活用ゲームをつくる

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立成田西陵高等学校
園芸科 3年 宮川 結衣

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・全農業高校が共通のSNSアカウントを持つ
→世代幅が広く、一般の方でもよく使うInstagramがよいと考える。
- ・学校や地域で開催されるイベントへ積極的に参加し、学校のSNSアカウントに投稿する
→学校の様子が見やすくなるだけでなく、地域の魅力発信にもなる。
- ・定期的に投稿を上げる
→定期的な投稿により最新の学校の情報が進学希望者・地域・他校にわかりやすくなる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・近隣をはじめする農業高校との合同授業や合同研究を定期的に行う
→共同作業にすることでクラブ員の交流が深まりやすくなる。
- ・各学校の活動展示会を開催する（ネット上もあり）
→他校の生徒の活動にも興味関心が向くきっかけになる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・小中学生と農業体験会を行う
→未来を担う子供たちに、土や植物に触れる機会を増やすことで、興味を持つきっかけを作る。
- ・学生の手作りチラシや学校のSNSで、家庭菜園の魅力発信をする
→自分のペースで農業に触れることで、農業に興味を持つことが期待できる。
学校の苗の販売時など、家庭菜園で役立つ知識の勉強会や交流会を開くことで地域交流にも繋げられる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農産高等学校
農産科 2年 川杉 大夢

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSの活用については、学校のSNSアカウントとは別に農業クラブの活動としてSNSのアカウントを持つ。具体的な発信内容は、農業クラブ活動として参加している各種イベントの告知やその報告。学校農場で栽培している作物や草花の生育状況を写真や動画を使って投稿する。

また、東京都内や全国の単位クラブ同士をリンクさせ、情報を共有することで文化祭の宣伝や告知等、お知らせしたい内容を拡散させることができる。農業クラブの横のつながりを大切にするのが結果的に多くの方の目に留まる機会も増えることになり、農業クラブの知名度を上げるためのSNS有効活用につながると思う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現在、東京都学校農業クラブ連盟で行っている役員会後の研修交流会の回数を増やす。さらに各単位クラブの役員だけでなく、農業クラブ役員以外の一般クラブ員も参加できるように工夫する。遠方や島しょ地域で参加が難しい場合は、オンラインによる研修交流会も検討する。また、第1分科会で記載した、他校の文化祭の宣伝や告知、企画内容を見ることで新しいアイデアが出て各単位クラブの活性化につながると思う。

クラブ員の興味、関心を高めるための活動としては、地域の農業専門家や農家を学校に招き講話をしていただき、その後意見交換し交流を深めることで地域農業に興味、関心を持ってもらう機会とする。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

小、中学校の校外学習等で農業体験学習を実施する。農業には体を使うイメージがあるが、現在はスマート農業が主流になりつつあるため、リモートセンシングやドローン等のテクノロジーを活用した農業もあることをこの農業体験学習を使って宣伝する。これからの農業は肉体労働や長時間労働だけでなく、最先端の技術を用いて経営することを紹介し、若い世代が農業に興味関心を持ってもらえるようにする。

これらの活動が若い世代に浸透することにより、持続可能な農業を広めることにもつながると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立笛吹高等学校
食品化学科 2年 藤原 利綺

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブは多くの農業高校の学生が専門的な知識・技術を学び、これからの農業の目標や課題などについてを話し合える場です。最近、農業クラブの活動をもっと若年層から高齢まで様々な方に知ってもらおうと、各校でSNSなどが活用され始めています。そこで、私は農業クラブ季刊誌であるリーダーシップやF F Jの公式ウェブサイトにもアクセスすることができるQRコードを載せたポスターを作り、地域に貼ってもらい、農業クラブの活動を知ってもらうことで農業クラブ自体の知名度を上げることができるのではないかと考えます。また、地域の人たちや学校同士の繋がりを大切にする為には、地域の方々と連携し、収穫祭等で農業クラブのブースを設けたり、地域の人たちと農業の実践講習のようなものを行ったりすることで地域とのつながりを築いていけると 생각합니다。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

私はクラブ員の興味関心を高めるには、学校間でのクラブ員同士が共同で一緒に農作業などの実習を行うことが大切であると考えています。授業やクラブの交流で学んだことを知識としてあるだけでなく、実際に体験しながら互いにコミュニケーションを取り、協力することで、農業を通して交流や連携を高めることができると 생각합니다。そうすることで、農業クラブ員の積極性も増し、農業クラブの活動にも意欲的に取り組み、農業クラブ全体の活性化にもつながられます。

また、農業経験が浅いクラブ員には、実験・実習を通して興味・関心を引き出せるのではないかと考えます。活動を通して、クラブ員が疑問に思ったことを聞ける機会を設け、学校内、他校と交流を増やしていきたいです。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続可能な農業は将来の世代のニーズも満たせるように、環境保全、経済的収益性、社会的公平性のバランスを取りながら、農業の生産と資源利用を持続的に行うことです。

まず、持続可能な農業について若い世代に知ってもらう必要があります。そこでSNSを活用することで持続可能な農業についての情報を拡散させることが重要であると考えています。例えば、AIやロボットなどを取り入れたスマート農業、減農薬栽培、温室効果ガスの排出を削減した環境保全等を紹介するのも効果的だと考えます。また、若い世代に持続可能な農業について広げてもらうためには、農業のイベントや、年齢関係なく農業体験の場を提供し、見学だけではなく実際に体験してもらうことで農業についての関心を持ってもらい、農業の道に進む人が増えるのではないかと 생각합니다。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県更級農業高等学校
生物科学科 3年 櫻井 大河

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSを活用する場合は、活動の様子や成果を写真や動画でわかりやすく発信することが大切だと思います。本校の学校公式SNSでは、日々の作業風景やイベントの様子を投稿することで、農業クラブの活動内容や楽しさを多くの人に伝えています。また、地域の行事やボランティア活動に参加することにより、活動の取り組みや地域との繋がりが増え、より多くの人に農業クラブの魅力を知ってもらえると思います。こうした取り組みを通して、農業クラブの活動をより活発にしていきたいです。長野県農業クラブでは、地区研修会、県連研修会といった県内の農業高校との研修会があり、研修を通して各高校の取り組みの情報交換や交流を深めることが大事だと思います。本校では、地域の夏祭りに参加し地域住民の方と一緒にお神輿を引いて夏祭りを盛り上げています。また、地域のイベントに参加し加工品や農産物を販売しています。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを活性化させるには、クラブ員同士が楽しく交流できる活動を増やすことが大切だと思います。本校では、農業クラブ員が講師となり、先生たちに栽培方法を教えながら、一緒に野菜を栽培しています。収穫した野菜で収穫祭を行ったりすることで、農業の楽しさを実感でき、メンバーの興味や関心も高まり、活動の様子をSNSで発信することで、クラブの魅力を多くの人に伝えることができます。

文化祭の時に城山動物園と交流をしてふれあい体験を開催しました。昔は本校でも動物を飼っていたのですが今は飼っていないため地域の方が動物と触れ合えるイベントを数年前から企画しています。また、様々なイベントに積極的に参加し、ワークショップや農産物の販売を通じて、地域の人々との交流や新しい学びや刺激を得ることにより、農業クラブ全体の雰囲気も明るくなり、活気あるクラブになると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

これからの農業を支えていくためには、若い世代の力が必要だと思います。たとえば、ドローンやAIなどの新しい技術を活用して作業の効率化を図ったり、SNSで日々の農作業や収穫の様子を発信したりすることで、農業に対する関心を高めることができます。本校では、遊休農地で栽培した「ワタ」を使用して「てるてる坊主」を作り保育園児と交流をしています。また、親子ふれあい農業塾を行い、活動を通じて子供たちに農業の楽しさや魅力を発信することにより、農業を広めていくことができるのではないかと思います。

幼少期からの農作業の実体験を大事にするため本校ではJA農業塾や交流を等して収穫の楽しさを体験してもらっています。幼少期の記憶が大人になった時に農業に携わってみたいという人が1人でも多く実践してもらえる様日々活動しています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立福井農林高等学校
食品流通科 3年 神野 優心

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSを活用するなら「高校生クイズ選手権」のように農業高校生用のクイズを作り、互いに競い合うイベントを行うといいと思います。その時にネット上で表彰を行うことでみんなのやる気を高めるとともに、競い合うことで良きライバルができると思います。他にも自分たちが行っている農業活動をSNSを使って地域に広めるために、農業ボランティアなどのイベントを企画し、SNSで発信するいいと思います。その時イベントに参加してくださった方に、学校で人気の野菜や果物、加工品の試食会をすることで農業の楽しさを共有し、交流を深められると思いました。また、そのイベントの様子を動画にし、YouTubeなどの動画にあげるにより、農業に今まで興味がなかった人も視聴でき、コメントすることで農業に対する関心も高まるのではないかと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

全国大会のときにライブ中継を行い、大会に出場できなかった農業高校生たちも観られるようにすることで上位入賞している学校の取り組みを知り、自分たちの活動の改善点を見つけることができると思います。そしてクラブ員同士で大規模な交流を行うことでより親密に興味、関心を得られると思いました。

また、校内での取り組みとして各学科で行っている課題研究の内容を学科の枠組みを超えて紹介する機会を作ることで日々の授業や実習に対する関心が高まるのではないかと思います。さらに、学科で研究を完結させるのではなく他学科や企業とも協働して研究し力を合わせることで、もっと活気ある農業クラブ活動に繋がるのではないかと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

今の時代、若い世代は「3K」と言われるような力仕事などに抵抗があるので今農業界で取り扱っているスマート農業を活用し、ラジオやテレビだけでなくYouTubeやSNSを利用して農業の魅力や重要性を広めていけたらいいと思います。また、これからAIが発達していき、高齢者率が高い農業界にとってはなかなか新しい技術を取り入れにくい状況もありますが、若い農業従事者と連携することにより新しい技術を取り入れやすくし、効率よく作業の負担が少ない農業を広めていけるのではないかと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立半田農業高等学校
施設園芸科 3年 倉橋 佐和

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

現在、日本や世界を含めてよく利用されているのは「インスタグラム」である。誰しものが手に届きやすいインスタグラムを活用すれば、多くの年代に農業クラブを知ってもらうことができると思う。反響が大きければ、より地域や県、さらには国を越えた学校間の交流も可能ではないかと思う。シニア世代に向けて広報を行う場合、新聞やラジオなどのメディアが有効だと考える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現在、私たちのような若い世代が求めているニーズを知ることが必要だと考える。若い世代の興味関心を引き出すことができれば、進んで連携や交流が可能になる。地域連携や交流が盛んになれば、農業クラブ活性化にもつなげることができる。例えば、若い世代に流行っているSNSを活用し、ショート動画などで農業クラブ活動を発信するのも一つの手段である。また、近年スマートフォンの利用で目疲れや肩こりになる人が増加していることから、デジタルデトックスに目を向けて、私たちが普段実習等でやっている、非日常的な活動を体験してもらうなど、目を引く活動を行い、発信していくことが大切であると思う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

より多くの人に農業の魅力を発信することが必要である。若い世代に向けて、アプローチと工夫を行うことが重要である。

例として、私たちのような農業高校生が、地域の農業関連事業をやっている方、また、現在農業を営む高齢者の方々と連携できる仕組みを作ることが挙げられる。私たちと彼らで農業体験、ワークショップなどの連携事業を行えば、私たちと同じ年齢層の人たちに、より近くで、良い意味で仕事の大変さや楽しさを知ってもらうことができると思う。このような活動を私たち農業クラブが行うことで、若い世代である私たち自身も、より深く知ることも発信することもでき、農業クラブ活性化につながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立甲南高等学校
総合学科 2年 藤橋 律希

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

snsでは動画を使うことが認知度を上げるのに最適だと思う。最近だyoutube、tiktok、instagramのリアル動画が人気で長尺ではなく短い時間で何が伝えたいのか、視聴者が面白いと思えるかがカギになってくると思う。そして見てもらう動画には農業クラブがどういうことをしているのかを大まかに伝えることで興味を引くことができると思った。こと細かく農業について伝える動画では視聴者からしたら最初から見たいと思えるような動画にはならないと思う。インパクトのあるものを使うことによって視聴者は興味をもつし、農業クラブが何をしているものか、自分もやってみたいと思えるか、につながってくるし、動画の中に地域のことについて取り入れることで地域の宣伝にもなる。なので僕はリアル動画を使うことが良いと思った。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員の交流や連携を高めるのには合同でのイベントごとをやってみるとほかの学校とのつながりができ学校間での交流ができるし、その交流の中で「こっちではを育てているよ」などの会話ができることで自分が知らない植物のことなど知識が広がるので気になった物があればそれが興味につながるし自分もやっていたいという意欲につながると思った。農業クラブを活性化するにはほかの学校と同じ植物を育てることで、その学校と交流が生まれたときの話題になるなと思った。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業の高齢化が進んでいる原因の中には若い世代の人が農業に持つイメージや先入観がよくないのではないかなと思う。例えば何かを自分で野菜を育てるなんて無理ではないのか、近頃は野菜などの農作物が高騰しているため自分で野菜を作りたいが作る畑を持っていない、そもそも自分で農業をするのがめんどくさい、虫が苦手だから農業なんていやだといったような考えがあると思う。だからこそ、この考えやイメージなどをなくしていくことが大事だと感じる。なのでこのようなイメージや考えをなくするための1つとして小さな成功を作ることが大事だと感じて、最初から難しいことをすると失敗して「自分にはやっぱり植物を作るなんて無理なんだ」と考えができてしまうとその後チャレンジをしなくなってしまうので育てるのが簡単なミニトマトなどが良いと思った。一回でも成功を経験すると繰り返ししてみたいと感じる人増えると思ったのでこのように1回自分で植物を育てる体験をしてみるのが良いと思った。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 島根県立出雲農林高等学校
動物科学科 2年 藤原 庵

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- 本校では、一昨年度までSNSのアカウントはなかったが、昨年度より2つの課題研究活動にてインスタグラムを開設した。登録者数300人程度ではあるが、職員も積極的に研究写真を撮影し、投稿することで研究活動がより積極的に行われるようになったことや、手軽に学習活動を校外へPRすることができるようになったことで、地域と学校間で新たなつながりができた。また、本校の公式アカウントと他校の公式アカウントが相互フォローの関係をつくるなどすれば同じ県内、もしくは対面では行いにくい県外の農業高校ともつながりができると考えられる。



2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- 本校では、クラブ員の興味・関心・交流・連携を高めるため、新入生への説明や鑑定競技会を始めとする各種競技会、農業祭での活動報告や機関誌の発刊などを行っているが、クラブ員全体の興味関心はあまり高まっていないように感じる。興味関心が低い理由として、多くの農業クラブ活動は学校行事として年間計画に組み込まれており、その計画に沿って顧問などが淡々と企画・運営を行っているのが現状である。しかし、本来農業クラブ活動とは、クラブ員が主体であるため、このような流れはあまり好ましくないように感じる。そこで、学校行事を組む際には、農業クラブ会長（生徒代表）も交えながら、学校（教員）とクラブ員（生徒）の意見が交わされ、その意見から行事を決定していくことで、農業クラブに対する生徒意識も徐々に変化が起こっていくのではないかと考えられる。また、クラブ員が主体となって活動している姿を生徒にもアピールすることで、農業クラブをよく知らない生徒にも興味や関心をもってもらえるのではないと思う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- 農業就業人口の高齢化は今後も継続することが予想される。農業という産業が高齢化によって懸念されることとして、農作業の労働力不足があげられる。その労働力を確保するためにスマート農業の導入が急がれているわけであるが、スマート農業の導入には高い経費や高い操作技術が求められるため、高齢な農業者が手を出しにくい状態である。そのような状態を改善させる方法として、スマート農業の導入に必要な機械をレンタルできるよう各自治体にレンタル拠点を設置することや、スマート農業に関連する機器や機械などの操作をより簡易にすることが望ましいのではと思われる。農作業はすべてを機械化できるわけではない。そのため作業者の労働力負荷が高く作業が単純である作業からスマート化していくことで、高齢な農業者でも農畜産物を生産していけるのではないと思う。また、現状農業といえば「お年寄りがやっていること」「大変そう」「おもしろくなさそう」というイメージを持つ若者を少なくないと考えられるため、InstagramやX（旧ツイッター）などを活用し、農業のおもしろさや体験談などをショート動画などで配信することで若い世代が農業に興味をもつきっかけになるのではと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立高梁城南高等学校
環境科学科 3年 茅野 由依

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

現状

- ・SNSへの発信は多いが限定されたものが多い
- ・他校や地域との交流が限定的である

問題点

- ・校内のみでの発信だけで地域や外部に関わるものが少なかったり届いていなかったりする
- ・特定の生徒が基本となり活動しているためクラブ員の意識に差がある

対策

- ・地域へのイベントに参加し、関わりを深める
- ・広報係を決めて、定期的に情報を発信していく
- ・各種競技会についても積極的に情報を発信し、活動についてもっと知ってもらえるようにする

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現状

- ・クラブ員同士の交流が少ない

問題点

- ・一定メンバーの参加が多く、他学年との関わりが少ない
- ・各種競技や大会運営以外の活動が少ない

対策

- ・今年度は、役員全員でクラブ活動の活性化に向けて意見を出し合う機会を設け、新たな取り組みとして「農業クラブ農園」や「文化祭での出店」を企画することができた。
- ・今年度、新しい取り組みとして、本校で栽培している季節の花を活用したレジン商品の開発に取り組んだ。地域の方々を対象にしたワークショップを開催し、農業クラブの活動についても紹介することができた。今後は、オープンスクールや文化祭などで展示や販売を行えるように計画している。



(写真) 作成したレジンアクセサリ

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

現状

- ・農業に対する興味関心が低い・地域の農業との関わりが少ない

問題点

- ・農業をしたいという若者が少なくなり、後継者が不足している

対策

- ・SNSで動画を配信し、農業の魅力や収入面でも可能性のあるものだということを発信する
- ・地域の農家と協力した田植え実習などの農業体験を開催する

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立唐津南高等学校
生産技術科 3年 青木 颯飛

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校でも農業クラブインスタグラムの発足に向けて、現在動き出しており、本校の特色ある研究活動を広めることで県内外の企業及び学校とも連携できないかと考えている。また、年間8回程度、各学科での生産物の販売会を実施するだけでなく、地域の行事等でも出張販売を実施している。学校HPや保護者メール等では発信しているが、外部への発信は少ないため、認知度向上に向けて、今後も活動を続けていきたい。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校では、20年前から日本3大松原と呼ばれる虹ノ松原の保全活動に取り組み、白砂青松を取り戻すために研究を続けている。この取り組みは多岐にわたっており、松葉を使用した菓子製造やクラフトジン、石鹼の開発など、地域企業との繋がりが多くある。この清掃活動は研究班の生徒が中心となり行ってきたが、今年度より農業クラブ役員だけでなく、希望者を募る形にした。清掃活動を通して、地域への興味関心が高まっているように感じている。

農業クラブの活性化に向けては、ボランティア活動としてプルタブ・ペットボトルキャップ・コンタクトケースなどの収集に取り組み、発展途上国の支援等に繋げる取り組みを行っている。この取り組みは校内だけでなく、地域の店舗にも設置を依頼しており、本校の農業クラブが多くの方の認知されてきている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

佐賀県では農業従事者の推移を見ると、平成12年に約3万7千人だったのが、令和2年には1万9千人と半数近くまで減少している。また、65歳以上の割合は現在64%まで増えており、農家の高齢化と減少が急激に進んでいることがわかる。佐賀県の農業高校では、「未来さが農業塾」を開校しており、農家・非農家問わず就農に興味のあるクラブ員への学びの場を設けている。この活動では、地域農家からの講演や宿泊研修などに取り組み、即戦力育成に取り組んでいる。

本校では、県内の梨農家が花粉の入手に困っている現状を受け、梨花粉の採取・提供研究に取り組んでいる。また、合鴨農法を用いた無農薬米の栽培にも取り組んでおり、地域へ普及できるよう取り組んでいる。現代は簡単に情報を入手できる反面、実際に若い世代と農家が接することが少なくなっていると感じている、だからこそ地域における農業高校の役割を再認識し、地域農家と密接に連携し、学習し合うことで、農業の良さを発信できるよう取り組む必要があると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立南部農林高等学校
生物資源科 1年 崎浜 由衣

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- 【実 態】 SNSでの情報発信が少ないため認知度が低い。他の農林高校との交流が少ないため活動が分からない。また生徒自体の農クへの、興味関心がなく意欲がない。
- 【問題点】 意欲や継続性がないため、情報発信が少ない。農業についての偏見が多く興味を持ってもらえない、地域の人に紹介する機会がない。問題解決のための具体的な取り組みイベントを通じて、農クを紹介する機会を増やす、SNSなどを活用し情報発信をする地域に貢献できる、校外で活動する行事を増やす。
- 【まとめ】 SNSを活用し他学校や地域との交流を増やして、情報を提供していきたい。また、イベントなどを通じて、農クの取り組みや、認知度を上げ農業に対するイメージアップに繋げていきたい。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- 【実 態】 クラブ委員の興味関心、交流、連携があまりできていない。また、農業クラブをあまり知らない人が多く、農業クラブに新入生が少ない。
- 【問題点】 農業クラブの活動内容を理解していない。また、他校と交流する機会がすくない。問題を解決するための具体的な取り組み。他校との交流、イベントを行う。Teamsを活用した広報、デジタル新聞などの情報交換。また新入生対象に農業クラブのPRを行う。
- 【まとめ】 他校との交流は費用などを考え難しいと思った。そのため、取り組みやすいTeamsを活用した。広報やデジタル新聞などの情報交換をすることによって興味関心を、連携を高められると考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- 【実 態】 日本の農業は深刻な高齢化問題となっている。農業従事者の約7割が65歳以上で平均年齢も68歳を超えている。農業に憧れを持ち、農業を始める人も少なからずいる。
- 【問題点】 農業＝「ダサい」というイメージ・農作業の負担が大きい・初期費用が高い・知識と技術の伝承との難しさ・収入が不安定
- 【問題解決のための具体的取り組み】
農業のSNSでのコミュニティーを増やす。農業体験をしてもらう。国から給付してもらう。外国人労働者の受け入れ、団体を作る。IT導入でイメージアップ。
- 【まとめ】 農業をゼロから始めるには、多額の費用が必要になるため、国からの支援も必要。農業＝「ダサい。重労働、収入の不安定」というイメージがあるので、ITなどを使うスマート農業を取り入れて、イメージアップにつなげたり、幼稚園や小学生の頃から農業体験の授業を取り入れたり、SNSで農業の楽しさを広める。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 奈良県立磯城野高等学校

農業科学科 3年 下山 咲梨乃

農業科学科 3年 藤岡 なな子

農業科学科 3年 大田 心愛

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域の人と交流を深めるために、地域の人によく親しまれている道の駅等で、学校の認知度をあげるために、本校の生徒たちで育てた野菜や肉、卵等を販売をすると良いと考える。また、自分たちが作った生産物を使用したコラボ商品を販売することも認知度の向上につながると思う。

地域の方への訪問販売や地域の掲示板に学校のポスターを掲示してもらうことや、地域行事への積極的な参加により地域との繋がりを増やすことができると考えられる。本校は、直売所をおこなっており、インターネットでの発信や地域へのビラ配りなどにも取り組んでいる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

中学生や新入生に農業クラブのことを知ってもらうため、オープンスクールやオリエンテーションなどを実施して、知ってもらうきっかけをつくることができる。また、本校の生徒でも、他学科での活動や農業クラブの活動を知らない生徒もいるため、他学科の活動を知るために、まずは専門クラブ部長どうしの交流を図り、他学科の実習を体験するなど交流を深める場を作ると良いと考える。校内だけでなく、県内での交流も強化するために、県内の農業科の課題研究活動を発表する場を作るなど、他校との意見交換の場を設けることにより農業クラブ活動の活性化につながると考えられる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業の3K（きつい・汚い・稼げない）のネガティブイメージを変える必要がある。SNSを使用し、良いイメージを持てるように発信することや、農業を実際に体験する場を設けるなど農業をより知る機会を作ることが大切である。また、若い世代の利用が多い単発バイトで農業の求人を出し、より簡単に農業にふれる機会を作り、人材の面から見た持続可能な農業の実現ができると考える。

また、生産物の面では、SDGsなど環境に配慮した持続可能な農業が求められており、世代交代の中で農業の質を変えていくタイミングになると考える。消費者の安いものを求める考えから、アニマルウェルフェアやSDGsなどに配慮されたものを求める人も増えてきている。だが、実際は価格の安い生産物を購入している人は多く、安価重視の傾向はまだまだ変わらない。そのためにも、各農家のブランド発信が不可欠となり、SNSの有効活用により、インターネットでの直販などに取り組み、リピーターを増やすことが必要である。そして、消費者の考えが、安価よりもアニマルウェルフェアや環境に配慮されたものを求める考えの人が増えていくことが重要である。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立富岡実業高等学校

地域産業科 2年 笠原 小春

生物生産科 3年 佐藤 愛莉

地域産業科 3年 神山 輝

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- 農業高校で勉強していることやそれを生かした活動を積極的にHP等で紹介をしていく。
- 授業で勉強をしたことを地域の幼稚園や小学校、中学校の子供たちに発表したり、一緒に活動をしたりする
- 地域の行事に参加して、自分たちが勉強していることやその成果物を発表していく。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- 授業内で勉強したことを生徒が中心となって幼稚園や小学校などのこどもたちに教える場を単位クラブが企画をする
- クラブ員たちの横、縦の人間関係をつくるための校内行事（農業クラブが主体）を企画、運営をしていく
- クラブ員の活動する場所を学校の中だけではなく、地域の施設（例幼稚園、小学校、中学校、高校、高齢者施設、市役所など）に積極的に出向き、協力してできる行事を提案、実施していく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- クラブ員が日本の農業の持っている課題を知る。
- 農業の持つ魅力にはどんなことがあるのかを授業を通して学び、実際に地域の農業を体験することが大切である
- 若い世代が農業について興味・関心をもち、農業を始めようとする人が増えるような取り組みが行えるようにする

参加者課題レポート

第2分科会

第6会場

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるためにはどのような活動があるか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第6会場	大分県立大分東高等学校	群馬県立藤岡北高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	宮 城 県	小牛田農林高等学校	農 業 技 術 科	2	大 友 心 咲
2	栃 木 県	那須拓陽高等学校	農 業 経 営 科	2	和 田 陽 花 美
3	埼 玉 県	川越総合高等学校	総 合 学 科	2	小 林 み ち る
4	千 葉 県	旭 農 業 高 等 学 校	園 芸 科	3	江 田 咲 里 花
5	東 京 都	農 業 高 等 学 校	緑 地 計 画 科	3	武 智 和 馬
6	静 岡 県	田方農業高等学校	生 産 科 学 科	3	仁 科 千 鶴
7	長 野 県	丸子修学館高等学校	総 合 学 科	3	麻 生 啓 斗
8	福 井 県	坂 井 高 等 学 校	食 農 科 学 科	1	森 野 芽 依
9	岐 阜 県	大垣養老高等学校	動 物 科 学 科	2	大 角 魁 誠
10	滋 賀 県	八日市南高等学校	農 業 科	1	中 澤 壺 智
11	島 根 県	益田翔陽高等学校	生 物 環 境 工 学 科	2	中 島 克 規
12	広 島 県	吉 田 高 等 学 校	アグリビジネス科	3	竹 本 咲 弥
13	佐 賀 県	佐賀農業高等学校	環 境 工 学 科	3	市 丸 真 二
14	沖 縄 県	八重山農林高等学校	アグリフード科	2	眞 喜 志 翼

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
15	大 分 県	大分東高等学校	園芸ビジネス科	3	村 上 勇 斗
16	大 分 県	大分東高等学校	園芸デザイン科	3	久 保 田 凜
17	大 分 県	大分東高等学校	園芸ビジネス科	3	田 口 巖 智

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
18	群 馬 県	藤岡北高等学校	生 物 生 産 科	3	坂 木 莉 彩
19	群 馬 県	藤岡北高等学校	生 物 生 産 科	2	岡 部 留 々 香
20	群 馬 県	藤岡北高等学校	生 物 生 産 科	2	新 井 琉 貴

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるためにはどのような活動があるか。」

九州ブロック 大分県立大分東高等学校
園芸ビジネス科 3年 村上 勇斗
園芸デザイン科 3年 久保田 凛
園芸ビジネス科 3年 田口 厳智

1 はじめに

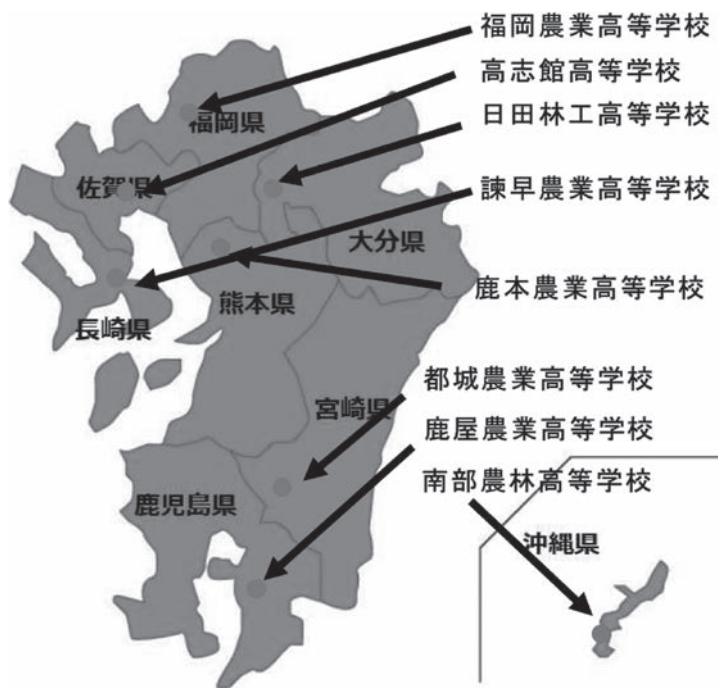
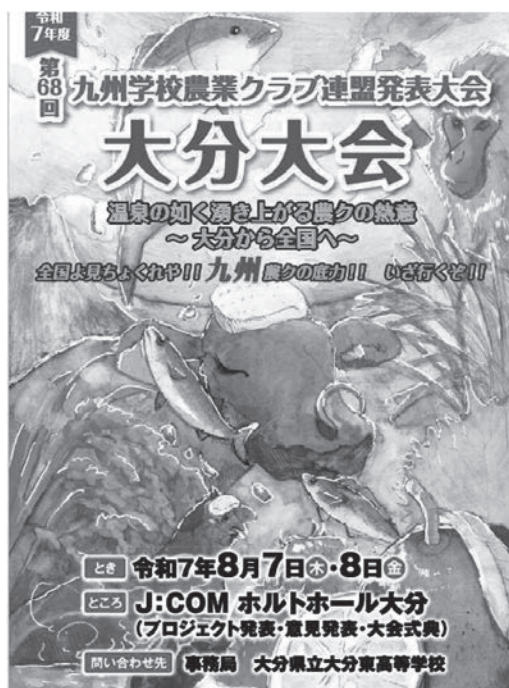
(1) 九州学校農業クラブ連盟の紹介

九州学校農業クラブ連盟は昭和33年10月に熊本県と沖縄県を除く九州6県で「九州ブロック予選会」を開催したのが始まりです。その後、昭和34年に熊本県、昭和47年には本土復帰した沖縄県が連盟に加入し、現在に至ります。

今年度の各県連事務局校は大分県立日田林工高等学校、宮崎県立都城農業高等学校、沖縄県立南部農林高等学校、福岡県立福岡農業高等学校、長崎県立諫早農業高等学校、佐賀県立高志館高等学校、熊本県立鹿本農業高等学校、鹿児島県立鹿屋農業高等学校です。

クラブ会員数は、大分県743名、宮崎県1,603名、沖縄県2,083名、福岡県2,259名、長崎県1,432名、佐賀県1,165名、熊本県2,488名、鹿児島県1,102名、総勢12,875名と全国でも比較的大きいブロックです。

「九州はひとつ」の合い言葉をもとに、お互いに切磋琢磨しながら農業クラブ活動に取り組んでいます。九州のクラブ員が団結し、日本の未来を担う大きな希望として日々成長する、それが九州連盟です。



(2) 本年度九州学校農業クラブ連盟事務局校「大分県立大分東高等学校」の紹介

本校は、大分市の東部に位置しており、本年度で創立105年を迎える伝統ある学校で、園芸ビジネス科、園芸デザイン科、普通科の3学科からなる総合選択制の高校です。本校の農業科が新設されてから、13年と県下の農業高校と比べても歴史が短い学校ですが、農業科として様々な活動に取り組んでいます。令和3～5年度には文部科学省の次世代地域産業人材育成刷新事業「マイスター・ハイスクール事業」に取り組んできました。令和5年度末でマイスター・ハイスクール事業が終了しましたが、その後も関連した活動が継続しており、アグリテック甲子園での最優秀や、第7回日本オープンイノベーション大賞では、本校の農業部が関わる共同研究が「選考委員会特別賞」を受賞し、内閣府で表彰されました。また、令和6年度には、この様々な活動が評価され、フランスで開かれたOECD Education 2030 Project「プロジェクト∞無限大」へ招待され、ウクライナの高校生との交流や世界情勢についての様々な意見交換を行うことができました。

このように、大分東高校の農業科は、歴史は浅い農業高校ですが、日本だけではなく世界にも活躍の場を広げています。

2 九州学校農業クラブ連盟リーダー研修会の報告

九州学校農業クラブ連盟では、7月23日(水)～25日(金)に2泊3日の日程で「第59回九州学校農業クラブ連盟リーダー研修会」を宿泊研修センター「希感舎」で実施しました。

1日目は、受付の後、「AIの農業への活用について」と題してIVY大分高度コンピューター専門学校の馬場清先生を招き、講演を行っていただきました。現在、AIはニュースなどで話題となっており、利用についての考え方や農業分野での活用方法などを知る好機となりました。その後、希感舎に移動し、交流会（県連紹介）を行いました。県連紹介では九州各県の様子や取り組み事例などの発表を行いました。

2日目は会場を大分東高校に移し、分科会ごとに研究協議をおこないました。



【本校即売会】



【オープンイノベーション大賞】



【プロジェクト∞無限大】



【AIについての講演】

分科会終了後、大分県別府市にある「農業研究部花卉グループ」で視察研修を行い、湧出量日本一を誇る、別府市の温泉を利用した栽培施設の見学を行い、知見を広めることができました。その後、宿舎に戻り、夕食のバーベキューを堪能しました。研修も2日目を迎え、他県の仲間とも話ができるようになり、多くのことを語り合いさらに親睦を深めました。

3日目は分科会のまとめの発表があり、それぞれの協議内容を班ごとに発表し、課題やその解決に向けたアクションの考え方などを共有することができました。短い時間でも活発な協議ができ、九州ブロックの結束力がより強くなり、農業クラブが有意義な活動であるとあらためて実感しました。



【県連紹介】



【集合写真】

3 九州学校農業クラブ連盟での協議内容

テーマ「[「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるためにはどのような活動があるか。]」

(1) 実態

- ア 他校との交流が少ない。
- イ クラブ員の農業への興味・関心と理解度が低い。興味がある生徒とない生徒の二極化が進んでいる。
- ウ 農業高校の生徒数の減少

(2) 問題点

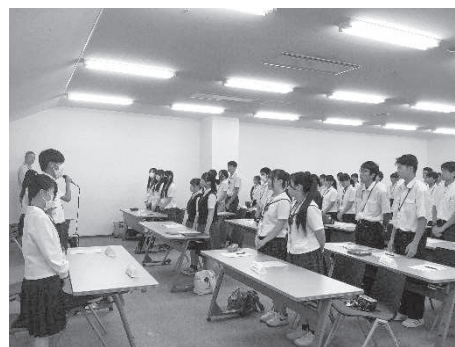
- ア 活動に意欲的な人とそうでない人の二極化が進んでいる。
- イ 自分の高校以外の農業クラブ活動を知る機会が少ない。
- ウ 農業クラブ活動の時間が少なく、その活動が他校の生徒や地域の人に知られていない。特に離島や遠方の高校との交流がとれず、お互いの理解ができていない。
- エ SNSやZOOMなどのソフトの有効活用ができていない。



【研究協議1】

(3) 問題点の解決のための取り組み

- ア SNSやZOOMなどのソフトを活用し、離島や遠方の高校などリモート会議やチャットなどによりお互いの理解を深める。
- イ ポスターやチラシを配布する際にQRコードを付け、幅広い世代の人に農業クラブ活動を認知してもらうことで、農業クラブの活性化を図る。
- ウ 地域の人に向けた、学校の取り組み（体験講座など）を実施して、学校への理解を高め、農業クラブの認知度を高める。



【閉会式】

(4) まとめ

- ア クラブ員が主体となった取り組みを実施することで興味・関心を高めることができるのではないか。（出前授業や体験活動・販売会での農業体験ブースでPR）
例：樹木の伐採，食育，もの作り，田植え，収穫など
- イ クラブ員どうしの交流や連携を高める方法として，SNSやリモートを活用し，距離的に離れているクラブ員との情報交換を活性化する
- ウ 農業クラブを活性化させるために地域の人と交流する体験イベントを企画する。
- エ ポスターやチラシなどにQRコードなどを貼付し，学校などの情報を発信することで，地域の方などに農業高校の活動やクラブ員の活動の様子などの情報を発信する。

協議ではクラブ員の意識の二極化が問題点として挙げられ、農業クラブ役員と他の生徒の意識の差をどのようにして解消していくのか考えさせられました。その差を縮めるために、農業クラブ活動がどのようなものなのか情報を発信することが重要であると考えました。情報発信をしたり、遠方のクラブ員や地域の方々と交流したりするためのツールとして、SNSなどの活用が有効ではないかと考えました。また、ICTの利用以外にも、実際に体験講座などを実施することで学校の情報発信と関係生徒の意識の向上という相乗効果が得られるとの意見がだされました。今回の研修を通して、新たな技術の利用と今まで農業高校で行ってきた活動の融合が、今後の農業クラブの活性化につながるのではないかと結論に達しました。

4 おわりに

クラブ員の興味・関心を高め、交流、連携を深めるため、また、農業クラブを活性化させるための協議を行う中で、私たちが農業クラブ活動を通して多くのことを学んでいることに気付きました。同時に、私達は、その魅力を十分に伝えることができていないことにも気づかされました。現在、AIなどの発達により、社会は大きな変革の時期を迎えています。農業クラブ活動も大きく変わる必要があるのではないかと思います。私たちは長年、先輩方が培ってきた伝統や知識、そして技術を継承しながら、新たな技術を取り入れ、農業の発展と農業クラブの活性化を目指す必要性を強く感じました。今回の経験が今後の農業クラブ活動に活かせるように頑張っていきたいと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 宮城県小牛田農林高等学校
農業技術科農業科学コース 2年 大友 心咲

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

今年度から本校もInstagramを開設した。ただ、フォロワー数も268名（8月29日現在）とまだまだ伸びていない。もっと投稿数を増やすことはもちろんのこと、もっとPRすることが大切である。そのためには、名刺にQRコードを貼るなどして開設したことを知ってもらい、学校に興味を持ってもらいたい。そうすれば、地域だけでなく学校間でも知ってもらうことができる。

さらには、学校での繋がりでなく、個人的な繋がりも大切にし、情報を分かち合うことも重要である。



小牛田農林Instagram

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校は総合学科との併設校なので、学校行事での委員会メンバーに農業クラブ役員が所属し、農業っぽい行事を入れてもらう活動をした。具体的には、体育祭の競技の一つに今までは一般的な種目で行っていたものに、一輪車の運搬に荷物を乗せ、バランスを取りながら走るという種目を作った。総合学科の生徒も喜んで競技に参加してくれた。

また、通学路の途中に畑があるので、そこに農業クラブ独自で栽培するエリアを農場の先生方からお借りしてトウモロコシやトマトなどを栽培した。一般の生徒にも見えるように栽培したことで農業に少しでも興味を持ってもらえた。



3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・地域での農業体験やインターンシップを実施する。
- ・農家の方を講師に招き、農家のリアルな声を聞いて、魅力や課題を議論する。
- ・農業体験などを通して「地域の農産物の美味しさ」など、同世代にも伝わりやすい形で広める。
- ・家庭や学校で食材を調達する際「地域の食材を選ぶ」ことを意識する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立那須拓陽高等学校
農業経営科 2年 和田 陽花美

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・ インスタグラムなどのSNSで学校の公式アカウントを作成し、実習の様子や取り組みを定期的に投稿する。
- ・ 他校と共同で農業クラブに関する動画を制作し、SNSで発信する。
- ・ 県内の農業高校同士で交流会を開催し、活動内容を各校のホームページに掲載する。
- ・ SNSで「農業クラブ役員メンバー紹介」や「農業豆知識」「地域の先進農家へのインタビュー」などのシリーズ企画し、定期的に更新する。
- ・ 地元の農家や企業とコラボし、インタビューや現場紹介をSNSで発信する。
- ・ 実習や収穫祭などの様子をライブ配信し、視聴者とのリアルタイム交流を図る。
- ・ 農業クラブの活動を紹介するデジタルパンフレットを作成しQRコードで配布・SNSで共有する。地域のイベントでミニ農業鑑定競技会を行い、農業クラブの活動を体験してもらう。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・ 定期的にレクリエーションを行い、学校のクラブ員全員で活動する機会をつくる。
- ・ 他校のクラブ員や地域の方々との交流会を実施し、農業に関する様々な活動を行う。
- ・ 県内の農業高校同士で栽培した野菜や加工品の交換を行い、食べる機会を通じて関心を高める。
- ・ クラブ員一人ひとりの興味・関心を高めるために、クラブ員から意見を集めて活動に反映する。校内に目安箱を設置し、農業クラブに新たに取り入れていきたい活動の意見をもらう。
- ・ クラブ員同士や地域の方々との連携を深めるために、ボランティア活動を行う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・ SNSを積極的に活用し、地域間の繋がりや情報発信を広げる。
- ・ スマート農業の導入を推進し、最新技術を体験できる場を設けて関心を高める。
- ・ 野菜の栽培や食品加工の楽しさなど、農業の魅力を若者目線で発信する。
- ・ 農業高校の卒業生とクラブ員が連携し、若い世代を中心に農業の価値や可能性を広める。
- ・ 卒業生で現在農業に従事している人や地域の先進農家を読んで、特別講義を実施する。
- ・ 地域の課題解決型プロジェクトに若者が主体的に参加し、農業を通じた社会貢献の意識を育てる。例：耕作放棄地の再生、地元食材を使った商品開発、フードロス削減活動など

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立川越総合高等学校
総合学科 2年 小林 みちる

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・地域のお祭りやイベントへの参加をする
- ・SNSを活用する
→農業クラブの役員が一般的に発信する。というよりも投稿する写真や動画は「楽しそう！やってみたい！」と思えるようなものにする。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・宿泊交流
→学校では体験できないことをする。
 - ・農業の知識が増える。
 - ・他校の役員との交流が活発になる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・若者が利用するSNSを活用
→講習会など農家さんとの交流、サポートができる体制を整える
→農業へ不安をもっていて「農業を始めづらい…」という人をサポートすることで、農業へ新規参入の活性化に繋がる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立旭農業高等学校
園芸科 3年 江田 咲里花

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・小中高の学生たちを農業クラブの県大会に招待する。
- ・農高生が近隣の学校や企業に出向き、花壇作りや野菜作りなどの作業を一緒に行い、農業クラブについて説明する機会を作る。
- ・テレビ東京番組〔種から植えるTV〕を通じて農業クラブの認知度を上げる。
- ・オンラインの活用SNSでのライブ配信を定期的に行い栽培の様子をライブ配信する。
- ・デジタル作品の公開！農業クラブの活動をまとめたショートムービーやデジタル絵本を作成する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・農業クラブ員がとして、一人一つ興味のある課題を設定し、その研究結果をパワーポイントにまとめ、近隣の学校に紹介する。
- ・地域の企業とコラボレーションし何かを作る。
- ・スキルアップのために年に数回各県の農高生同士で勉強会を開く。
- ・他地域の農高生とオンラインで交流会を開き、それぞれの活動内容や課題について話し合う
- ・ニュースレターの発行！活動の様子やメンバーのインタビュー、育てている作物に関する豆知識などをまとめたニュースレターを毎月発行し近隣の学校や地域に配布する。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・「スマート農業」の普及。」
- ・SNSで若い世代が農業の魅力やこだわりを発信し、消費者と直接つながる。
- ・学校教育に「農業体験」や「食育」を取り入れ、子どもの頃から農業を身近にする。
- ・若い農家同士のコミュニティや、企業・大学との連携で新しい知識を学び合う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農業高等学校
緑地計画科 3年 武智 和馬

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

他校との協働活動を発信する。例えば同じ都道府県内で、共通のハッシュタグを決めて、SNSで発信すると閲覧者の検索に引っ掛かりやすくなり、何件かにヒットすることでより活発に活動していることが伝わるのではないかな。

また、情報発信力の高い事業者と連携することで、先方も情報発信をしてくれるため、学校のSNSをよく閲覧してる人とは別の層の人にも学校での活動を知ってもらうことができる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

共通の課題を見つけることが大切であると思う。年に1つの課題でもいいと思うので、その課題の解決に向かって、定期的にミーティングを開き、お互い調べてきたことや、成果などを出し合って方向性がずれていないか確認し合う。また、学校の先生だけでなく、課題の内容によっては外部の専門家の意見を聞きに行くことも必要であると思う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

まず、なぜ農業が他の職業と同じように選択されていないのか、高校生や大学生の意見を聴くことから始めた方がいいと思う。学生の生の声から、逆に農業を職業として選択されるようになるか、手段や方法を考えてみる必要があるのではないかな。

例えば、自分の懸念として、気候変動によって収量や収入が減ったとき、どのような保障制度があるのか、また保障は都道府県によって違いがあるのかななどを知りたい。知ることによって農業に対する不安が解消されるように思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立田方農業高等学校
生産科学科 3年 仁科 千鶴

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・農業クラブの認知度を上げるためには、農業科のある他校との繋がりをもつことが効果的だと考える。他校が実践している農業クラブ活動の情報を交換することで、農業クラブ活動への興味関心を高めることができると思う。
- ・本校で月に1度、実践している生産した農産物や製造した商品を地域の人へ販売する田農マーケットを活用して、地域との繋がりを作ることが効果的だと考える。農業クラブ員である生徒が学校で実践している活動を消費者である地域の人々に知ってもらい良いきっかけだと思える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・農業クラブ員の本部役員が日々行っている活動をまとめて農業クラブ員に共有できる機会を設ける。例えば、動画や新聞、ポスターなどにまとめて共有をする。共有が出来たら、農業クラブ員が農業クラブ活動に興味関心をもつことができると考える。それにより、農業クラブ員としての自覚が持てるだけでなく、これからの農業クラブ活動が活性化してより良いものになる。
- ・大会への興味を高めることが農業クラブ活動を活性化させるために効果的だと考える。大会の中継やSNSを利用した広報活動をおこなうことで、農業クラブの活動に興味を持つ人が増えると思う。また外部への宣伝にもなり、企業や他農業高校との交流や連携も増えると思う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・若い世代が農業に関心を持ち農業を仕事にするためには、幼稚園や小学校での農業体験を増やすことが効果的だと考える。農業に対して、3K（きつい・汚い・危険）のようなイメージを持っている若い世代は多い。若いころから農業の楽しさややりがいを感じることで、農業を仕事にすることの壁を低くすることができると思う。
- ・持続可能な農業を広めるためには、スマート農業を実施することが効果的だと考える。スマート農業で作業効率が上がり、作業リスクが減少すること、自営業では自分の予定で仕事を進められることなどがある。これらをインフルエンサーや企業とコラボしながら、SNSで発信することで若い世代の興味を引き、持続可能な農業を広めることができると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県丸子修学館高等学校
総合学科 3年 麻生 啓斗

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

InstagramなどのSNSを利用して日頃の農業クラブ活動の様子を頻繁に写真や動画で発信し、地域の方たちに活動を知ってもらうことが必要だと思います。また、地域のお祭りや地域の文化祭で同地区内の農業クラブ員と共同して企画を考えて活動を行います。そして、互いの地域のお祭りや文化祭に参加することで繋がりをもち、話題性にもつながり、農業クラブの認知度を上げることができると考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

まずは、農業クラブ員がそれぞれ何をやりたいのかを考えることが大切だと思います。

先生から言われたことを言われた通りにやるのではなく、自分たちは、何ができるのか、或いは、どうせやるなら、周りを巻き込むくらいのことを考えていくことが大切だと思います。

また、仲間同士の繋がりが重要です。例えば文化祭などで販売や地域の方と交流を行うときにも、すでに決められた内容を行うよりも自分たちでやりたいことを考え、計画した内容なら一人一人がより主体的に活動に取り組むことができると考えます。その中で、でクラブ員の協力や、準備、運営を通じて、学年を越えた自然な交流が生まれ、連携を高めることができると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

取り組みとして、近くの小学校と交流をしながら一緒に米や野菜を栽培し、収穫したものを一緒に調理して食べたり販売をしたりすることができると考えます。実際に私たちの学校では、近くの小学校と交流しながら米や野菜の栽培を行っています。このような地道な交流活動を小学生と行うことで農業の魅力に興味を持ってもらえる人を一人でも多く増やすことが大切だと考えます。

そして、農業の3Kといわれる「きつい」、「汚い」、「危険」といったイメージを無くしていくことをしなければいけないと思います。そのためには、若い世代に向けて体験型のワークショップを定期的に行い、実際に操作をして、農作物を作り理解してもらい農業の良さを知り、ビジネスとして、農業を捉えてもらうことが大切だと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立坂井高等学校
食農科学科食品コース 1年 森野 芽依

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・SNSで発信
SNSの中で特に、Instagramは、写真や動画で魅力を伝えるのに最適。
SNSで共有することで、文章よりわかりやすく伝えることができる。
- ・活動の記録を写真、動画で共有し、活発な意見交換をしていく。
- ・それぞれの学校で連携する。
学期ごとに一回集まり中間発表をし、話し合いをする。
会いに行かなくてもリモートで会議をする。
自分の高校のことを共有することで他の高校の関心を高めてもらうことができる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・PR活動をする
校内にポスターを掲示する。
- ・自分たちの地域の方たちと協力し合う。
研究活動では、地域の問題に着目し、地域発展に貢献しようという考えのもと、外部とも協力し、新しいアイデアが生まれる。それが深まれば、活性化につながっていく。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・SDGsに取り組む
食品ロスを減らす、環境を整える。
買いすぎない、作りすぎないことを、生徒に伝えるために学校の運営しているマルシェでチラシやポスターを作る。二酸化炭素を減らすために木を育てる。
- ・農業体験(収穫)イベントなどの取り組みをする
農業のことを若い人たちが知ってもらうために、幼稚園・保育園の子供たちでも体験ができるイベントを開催する。
- ・スマート農業の導入
少子高齢化が進んでいるので高齢の方が楽になるような自走式のコンバインを作る。
雑草を刈ってくれるAIの機械を作る。
自分の高校では、機械科、自動車科、電気科、情報システム科、があるので、協力して作ってもらう。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 岐阜県立大垣養老高等学校
動物科学科 2年 大角 魁誠

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブでは、毎年、全国大会が開催されていますが、全国大会の様子は選手として出場する一部のクラブ員しか知らないのが現状です。全国大会をテレビ等でもっと大々的に取り上げてもらうことで、農業クラブ員はもちろん、一般の方にも農業クラブについて知ってもらえるようになると思います。

本校には、全国でも珍しい「犬部」があります。テレビに取り上げていただく機会も多く、テレビを見た多くの方から声をかけていただいています。幅広い世代に私達の活動を知っていただき、テレビの影響力の強さを感じています。



2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員の興味、関心を高め、連携を広げるためには、幹部講習会のようにクラブ員が集まって交流する機会を設けることが大切だと思います。校内でも、自分以外が所属する学科や選択授業でどのような事を学習、研究しているのかを生徒同士で交流する機会があれば、学科間での材料の提供や共同研究が進むのではないかと思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

若い世代が職業として農業を選択するためには、園児や小学生など、より幼いうちから農業に関わる機会があることも大切だと思います。農業高校で園児や小学生を対象とした体験講座を行ったり、小中学校に出前授業を行う機会をもっと増やしたりすることで、農業科への進学を考える子どもが増えるのではないかと思います。

本校では、地域の小学生と一緒に田植え・稲刈り・生育調査を行う活動をしています。自分たちで植えた苗が大きく育つところを観察することで、農業の楽しさを知ってもらえました。

また、地域の中学校に出向き、普段自分たちが学習している内容を中学生に教える「出前授業」などを行っています。出前授業では、各科の特色を生かし、寄せ植え作りや犬のしつけ講座などを行っています。



クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立八日市南高等学校
農業科 1年 中澤 竜智

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- 農業高校でしかできない日々の学習状況を記録し、InstagramやTikTokなどで多くの人に発信していく。特に日頃の学習活動や農業クラブの活動を投稿し、地域の方々に現状を伝えることが効果的だと考える。また地域のイベントやボランティア活動に参加することで、農業クラブ組織をまず知ってもらうキッカケにする。
- 誰もが参加しやすい地域イベントを農業クラブ主体で行う。(現在は、秋の農産物販売会のみ)
- Instagramの運営を農業クラブ員(生徒)が担当し、生徒目線の情報発信を行う。
 - ⇒農作業や収穫、調理や販売などを動画で紹介する。
 - 1日のルーティンや学習風景など身近に感じられるものを紹介する。
 - クイズ登校やアンケートなどを実施し、SNSを通して交流できる企画運営を行う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- クラブ員同士の交流の場を設け、意見交流や活動範囲を広げる活動・地域との交流をとり入れた活動を行う。
 - ⇒・農業学習をベースとしてクイズ大会の開催、他学科の実習体験を行う他学科交流会など
 - ・販売会などのイベントで各専攻班と連携して、より専門的な内容を知れるクイズラリーを実施する。
- 農業クラブの大会への積極的参加を促す。
- 校内イベントを定期的で開催する。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- 若い世代がよく活用しているSNSを活用して、農業の魅力を発信し、現在の農業の危機や農業の必要性を発信していく必要がある。
- 農業への就農が進まない要因の一つとして、生産者の収入不安が大きい、また休日の状況や初期費用の負担感など知り得ない情報が多いことがある。
 - ⇒農業機械の貸し出しや給与・休日の確保などができた農業法人組織を立ち上げ、人手不足で困っている農家さんのところに派遣されるような仕組みがあると考ええる。
- 新規農業を希望する人が新しい持続可能な栽培方法を導入できるように支援をする。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 島根県立益田翔陽高等学校
生物環境工学科 2年 中島 克規

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校農業クラブは、現状としてSNSや学校HPの活用が投稿頻度の低さから情報発信が十分ではありません。また、他校の活動状況の把握や難しいことや、地域との連携が単年度で終わってしまうという課題があります。その結果、農業クラブ主催のイベントが少なく、他学科（工業科や総合学科）からの理解も得られていない状況です。これらの課題を解決するため、今後はInstagramアカウントを開設し、学校HPでも積極的に情報発信を行います。さらに、定期的な会報の発行を通じて、より多くの人に活動内容を伝え、理解を深めてもらうことを目指します。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校農業クラブは、農業鑑定競技、意見発表、プロジェクト発表、地域交流事業を通して活動していますが、年間活動のマンネリ化、クラブ目標の設定・共有できていないことや役員のボランティア活動不足が課題です。これらの課題を克服するため、今後は田植え、稲刈り、収穫体験などに加え新たな企画を取り入れ、活動内容を充実させます。各活動後の振り返りを通して改善を図り、年間活動計画を明確化して目的や成果を共有することで、クラブ員全体の意識改革を目指します。さらに、レクリエーションや合宿を実施し、学年を超えた交流を促進することで、クラブの結束力を高めます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

日本の農業は、従事者の高齢化と若手不足という深刻な問題を抱えています。この現状は、新規就農者の減少に繋がり、農業に対する「汚い・きつい・給料が低い」という3Kイメージが払拭されないことも大きな原因です。一方、「やりがいがある・役に立つ・夢がある」という3Yのイメージは十分に浸透しておらず、持続可能な農業の重要性も広く認識されていません。これらの課題に対し、今後は農業の楽しさや魅力を伝えるイベントを実施し、農業を身近に感じられるような家庭菜園の普及を推進します。さらに、作業効率を向上させるための農業機械の導入を促進することで、魅力的な農業の姿を発信し、持続可能な農業の担い手を増やしていくことを目指します。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 広島県立吉田高等学校
アグリビジネス科 3年 竹本 咲弥

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校では、インスタグラムを活用し、農業クラブ活動や学科の活動を発信している。また、市役所や道の駅等と日頃から連携を深めており、SNSや広報誌等を通して、本校の活動を発信していただいている。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

広島県では、農業関連学科が設置されている高校で集まり、農業クラブ員の資質向上を目的とした研修会や講習会が開催されている。そのなかで、各校の取組内容や課題について意見交換を行うとともに、県単位の課題や活性化策についても議論を行っている。また、「ひろしまフードフェスティバル」等、県内外から多くの人々が訪れる大規模なイベントに参加し、生産物や加工品の販売を通して、学校や農業クラブのPR活動を行っている。さらには、農業クラブに加え、工業クラブ、商業クラブ等、広島県内の全ての専門学科が連携して開催する「高校生スペシャリストの祭典」において、合同イベントや商品開発を行い、農業クラブの魅力をアピールしている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

広島県は、北は中国山地、南は瀬戸内海に面しており、多様な気候や地形を生かした様々な農業が展開されている。私が在籍している広島県立吉田高等学校は、広島県北部の中国山地の自然豊かな中山間地域に位置しており、少子高齢化や過疎化が大きな問題となっている。そのなかで若い世代が持続可能な農業を広めていくためには、農業の魅力とやりがいを発信し続けることが大切であると考えている。

私は将来、高等学校農業科の教員となり、農業の担い手育成や地域の特産品開発に取り組み、農業の魅力とやりがいを生徒に伝え、持続可能な農業を実現できればと考えている。また、急激な地球温暖化等の新たな環境問題についても対応が必要である。これらの課題を踏まえたうえで、若い世代が魅力とやりがい、そして将来性を感じることでできる取組を進めることができればと思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立佐賀農業高等学校
環境工学科 3年 市丸 真二

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校は、地元道の駅で行っている高校生ケーキカフェ「サノ・ボヌール」や、地元商店街で行っている生産物販売「サノマルシェ」など、地域の方との交流を大切にしています。また、より繋がりを深め、学校のことを知っていただくために今年度8月に学校公式のインスタグラムアカウントを開設しました。2学期は文化祭や全校ボランティア活動など、農業クラブ主催の学校行事が多数あるので、その企画・準備・当日の様子を発信することで地域の方や中学生などにも農業クラブの活動を知っていただきたいと思っています。また、佐賀県は県連大会や県連代議員会、県連リーダー研修会等の農ク関連行事のほか、県内農業高校の生産物を用いた地元レストランとのコラボメニュー、夏休み期間中に実施される子ども向けイベントでの農業体験ブース出展（木工体験、アルギン酸ビーズづくり、サンドアートづくり）など、農業高校同士の交流の機会が多くあります。これからも農業高校どうしの繋がりを大切にし、その様子をSNSで発信していきたいと思っています。



2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

4月に全校生徒を対象に実施する「農クオリエンテーション」は、新入生の農クに対する印象を形づくり、2・3年生クラブ員の興味・関心を高める大切な機会です。今年は、オープニングで「エッホ、エッホ・・・農クは楽しいって伝えなきゃ」とステージ上で踊りました（少し笑ってくれました!）。これからも役員が楽しく活動しているということが伝わるような内容を盛り込みながら、学校行事の企画を行っていききたいと思います。

また、本校の文化祭は生徒会と連携して運営しています。まずは生徒会との連携を深めていききたいと思います。その他、農クでは校内大会、文化祭、地域清掃ボランティアや、農業科学科で栽培した草花を地元の駅や施設に届ける活動を行っています。クラブ員にも単位クラブの活動をより深く知ってもらうため、インスタグラムで準備の様子も情報発信します。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

本校では無人トラクターやドローンを活用したスマート農業や持続可能な農業について学んでいます。また、就農を目指す農業高校生が集う「未来さが農業塾」でも、海外農業事情視察研修や先進農家の視察を通して、持続可能な農業について学びを深めています。これらの情報の発信について、ポスターにまとめてはどうかと考えています。多数の来場がある文化祭を情報発信の重要な機会であると考え、ご高齢の方の目に留まるよう工夫して情報を発信したいと思っています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立八重山農林高等学校

アグリフード科 2年 眞喜志 翼

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

現在、本校は、草刈り大会など農業クラブ役員が活躍する場があるが、SNSを活用したPR等を行っていないので農業クラブとしての活動の認知度が低い。そこで、農クのSNSを開設し草刈り大会の準備の様子などを投稿し、農業クラブとしての活動内容を広く知らせることによって、農業クラブの認知度を高め、地域、学校間の繋がりが深まると思う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現在八重農で行っている取り組みとして、草刈り大会(生徒同士や職員との団結力を高める)や八重農市、年末の生産物即売会(地域の人との交流)などがある。これらの取り組みを引き続き行い、新たな取り組みも増やす。また、他校と連携し、生産物即売会などに向けて新しい製品を開発することによって、クラブ員の興味関心を高め、農業クラブとしての活動をより活性化させることが出来ると思う。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業の高齢化は日本だけではなく世界的な課題になっている。そこで、現代の技術を活用して時代に合った農業に変えることが必要だと感じた。そのために、ドローンやAI、センサーなど新しい技術を使って、作業を効率化させることによって、デジタル技術に強い若い世代と農業を結びつけることができ、多くの若い農家が生まれると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 大分県立大分東高等学校
園芸ビジネス科 3年 村上 勇斗
園芸デザイン科 3年 久保田 凛
園芸ビジネス科 3年 田口 厳智

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

(1)実態

本校ではSNSなどを利用した情報発信は行っていないが、ホームページを通じて、学校行事や農業クラブ活動などの情報を発信している。

(2)問題点

農業クラブ活動について、興味・関心がない生徒や知らない生徒がいる。

(3)問題点解決のための具体的取り組み

本校では、農業新聞を通して、情報発信を行っている。

(4)まとめ

農業クラブ活動に対して「やらされている感」をなくし、SNSなどの活用を活発にし、幅広い年代に情報を発信していく必要がある。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

(1)実態

様々な農業クラブ活動において、役員以外の生徒の参加が限られている。

(2)問題点

各種委員会や生徒会との連携体制がなく、農業クラブ活動の幅を広げる機会がない。

(3)問題点解決のための具体的取り組み

リモート等のICTの有効活用を進めていく。

(4)まとめ

農業クラブ活動の活性化に向けて、これまでのやり方にこだわらずに、他校の良いことやICT機器などを取り入れ、より効果的な活動を行う必要がある。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

(1)実態

若者の農業離れや高齢化による後継者などの担い手の不足が問題点として挙げられている。また、土地が有効利用されていない耕作放棄地の増加が問題となっている。

(2)問題点

若者に農業の魅力が伝わらず興味・関心が薄れている。

(3)問題解決のための取り組み

農業技術を高め、農業のすばらしさを伝える栽培体験などの実施。

(4)まとめ

農業高校が農業の魅力、素晴らしさを若者に伝えていく必要がある。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立藤岡北高等学校

生物生産科 3年 坂木 莉彩

生物生産科 2年 岡部 留々香

生物生産科 2年 新井 琉貴

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を高めるためには、SNSを効果的に活用することが大切だと思います。例えば、投稿に協力してくれた地域団体や他校の情報を添えることで、相互のつながりを広げることができると思います。また、写真だけでなく動画を用いて活動や学校の魅力を紹介することで、より臨場感を伝えられるのではないかと考えます。さらに、同じハッシュタグを使用したり、合同イベントで一緒に写真を撮って発信したりすることで、一体感を示すことができると思います。これらをとおして、地域や学校間の絆を強め、農業クラブの魅力を広く発信していくことはプラスになると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを活性化させるには、クラブ員が主体的に関わる活動が重要だと考えました。例えば、やりたいことを自由に提案できる会議を設け、企画段階から参加意識を高め、他校との合同プロジェクトや地域イベントに積極的に参加することで、新しい学びや交流を広げられるのではないのでしょうか。また、校内で学年を越えて協力し作物を栽培する活動や、地域の畑を利用して品評会を行う取り組みも有効だと考えました。これらの活動をつ通して、仲間意識や地域とのつながりが強まり、農業クラブの魅力と活力がさらに高まるのではないかと考えました。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業の高齢化が進む中、若い世代が持続可能な農業を広めるためには、多方面からの工夫が必要だと考えます。まずSNSを活用し、農業の楽しさや現場のリアルな姿を発信することが効果的だと思います。また、スマート農業を推進し、効率的で魅力ある農業を示すことも今後重要だと思います。さらに、小中学校との連携や年齢を問わず参加できる農業体験イベントを通して、幅広い世代に農業を知ってもらおう。こうした活動を通して利点をアピールし、次世代に継承しやすい農業を発信していくことが大切だと思います。

参加者課題レポート

第3分科会

第7会場

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第7会場	北海道旭川農業高等学校	静岡県立磐田農業高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	山形県	庄内農業高等学校	食品科学科	2	五十嵐 陽穂
2	群馬県	勢多農林高等学校	動物科学科	3	宮崎 悠姫乃
3	埼玉県	秩父農工科学高等学校	農業科	2	赤岩 倫太郎
4	千葉県	大網高等学校	農業科	3	宮部 泰地
5	神奈川県	平塚農商高等学校	農業総合科	3	菊川 紗希
6	静岡県	静岡農業高等学校	食品科学科	3	松本 さくら
7	長野県	佐久平総合技術高等学校	食農クリエイト科	2	濱 香蓮
8	愛知県	渥美農業高等学校	食品科学科	2	伊藤 絢香
9	三重県	四日市農芸高等学校	農業科学科	3	森島 康太
10	滋賀県	湖南農業高等学校	食品科	3	早川 葵
11	岡山県	高松農業高等学校	園芸科学科	3	茂木 日々来
12	山口県	田布施農工高等学校	生物生産科	2	榎田 ひなた
13	佐賀県	高志館高等学校	食品流通科	3	渡邊 愛美
14	沖縄県	八重山農林高等学校	フードプロデュース科	1	新里 清良々

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
14	北海道	旭川農業高等学校	農業科学科	2	松田 光稀
15	北海道	旭川農業高等学校	食品科学科	2	村椿 ここみ
16	北海道	旭川農業高等学校	生活科学科	2	大沼 尚央

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
17	静岡県	磐田農業高等学校	生産科学科	3	土屋 沙気
18	静岡県	磐田農業高等学校	環境科学科	3	金原 湊
19	静岡県	磐田農業高等学校	環境科学科	2	永田 大悟

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか」

北海道ブロック 北海道旭川農業高等学校
生活科学科 2年 大沼 尚央
農業科学科 2年 松田 光稀
食品科学科 2年 村椿ここみ

1 はじめに

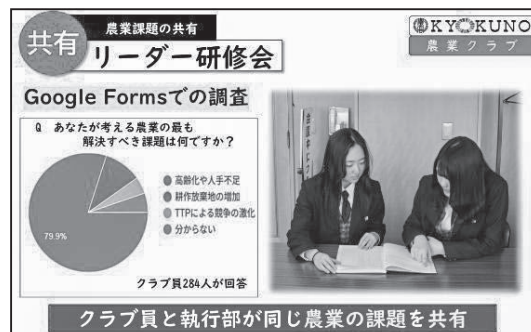
大正12年3月17日、道北の農業指導者養成の命を受け産声を上げた私達の旭農。大正から令和まで、伝統的手法からAI、ロボティクス技術の導入などの変化に即しながら、「誠実勤労剛健」の校訓の基、一貫した農業教育活動で卒業生は1万6千名を超えています。

多くの同窓生が地域農業の担い手として活躍。私たちは多くの支援をいただきながら農業学習に励んでいます。

2 課題設定

そんな歴史ある学び舎に通う旭農農ク執行部は、リーダー研修会で私たちが学ぶべき農業の根幹と課題を共有。今年度はクラブ員の考える農業の課題を調査し、執行部とクラブ員が同じ課題を共有したいと考えました。その結果、79.9%のクラブ員が「高齢化による農業人口の縮小」を一位に挙げていることを確認。令和2年農林業センサスデータベースから上川総合振興局地域の農業従事者の高齢化は例外ではないことを学習しました。

昨年度SDGsを学習した旭農農クは、この大きな農業課題に向き合い、持続可能な農業学習、プロジェクト学習を全クラブ員で展開することでクラブ員の成長と地域農業の発展に繋げ、持続可能な農業を継承したいと考え課題を設定しました。



3 目標

- (1) 地域課題と「持続可能な農業」の学習・学びの発信技術の体得【主体的な学び社会性】
- (2) プロジェクト学習への「持続可能な農業」意識の導入、研究の高度化【深い学び科学性】
- (3) 専門学習と「持続可能な農業」に対する取り組みの継承と広報活動【対話的な学び指導性】

4 計画

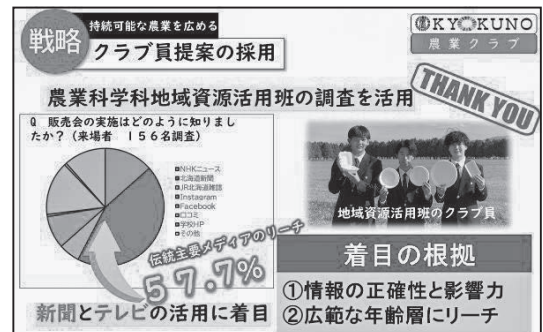
短期スパンで活動を見直せるPrep、Do、ReviewのPDRサイクルで計画しました。

5 実践

(1) 地域課題と「持続可能な農業」の学習・学びの発信技術の体得

執行部はK J法研修から、高齢化による農業人口の減少を阻止し「持続可能な農業」を広めるにはプロジェクト学習に「持続可能」な農業を取り入れ、発信する必要があると考えました。そこで、執行部は農業科学科地域資源活用班の調査をもとに広範な年齢層にリーチする「新聞」「テレビ」という伝統主要メディアに着目。株式会社日本農業新聞北海道支所長阪上様、次長の原岡様から農業の最新技術をわかりやすく伝える方法や情報発信の重要性を学習しました。

また、クラブ員は科目「農業と環境」で日本農業新聞の出前授業におけるスクラップレポートや発表活動を通じて学びの発信技術を体得しました。



(2) プロジェクト学習への「持続可能な農業」意識の導入、研究の高度化

学びの発信技術と効果的な伝統主要メディアの活用法を学習した執行部は班長会議と年度始総会で、プロジェクト学習を様々なコンテンツで発信することが持続可能な農業を広めるために重要であることをクラブ員と確認。4学科23のプロジェクト班全てに、「持続可能な農業」における重要な3観点をインコーポレートし、伝統主要メディアを中心とした情報発信活動を強化しました。

その結果、農業科学科地域資源活用班、森林科学科森林循環班は持続可能な農業への取り組みが評価され、旭川市で開催された「ユネスコデザイン創造都市サブネットワーク会議」に招待され、21カ国のデザインシティに研究を広く伝えました。

食品科学科、森林科学科のクラブ員は持続可能なイノベーションの創出を目的にノーステック財団主催チャレンジフィールド北海道「Project A」を継続。旭川商業高校や地域企業と農業課題を共有し、商品開発・合同販売などを実現しさらなる研究の高度化に繋がりました。



(3) 専門学習と「持続可能な農業」に対する取り組みの継承と広報活動

「持続可能な農業」の高度なプロジェクト学習を次世代に継承する活動を実践しました。

執行部は札幌テレビ放送様と生活科学科ライフデザイン班と協力し子ども食堂「永山ホビーキッチン」の運営に挑戦。クラブ員と執行部で協力して乳牛とのふれあいや収穫体験、子どもたちと共にカレーを作る食育体験などを通じ、持続可能な農業を継承・報道していただきました。

現在も月一回、執行部やクラブ員が子どもたちと様々な企画を運営し、学習を伝える活動を強化しています。

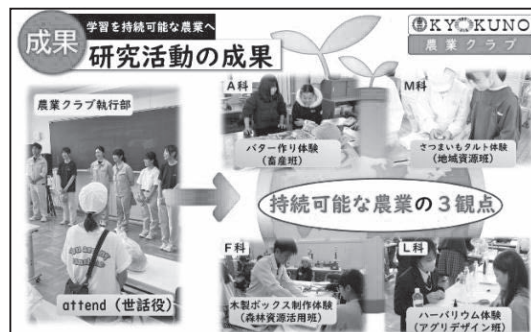
また、執行部は永山まちづくり推進協議会主催「永山魅力発見隊」のプログラムを企画。地域の小学生に学びを還元すると共に持続可能な未来を考えるモノづくり体験を実施しました。クラブ員が主体的に持続可能な農業を伝え、子どもたちが地域の農業課題を考える体験が提供できました。

6 成果と分析

(1) 「持続可能な農業」への意識が向上。学びの発信技術を体得できた

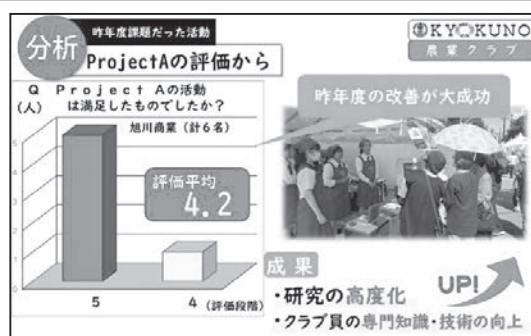
クラブ員の94.7%が農ク活動を通じ「持続可能な農業」への意識が高まったと回答。また、令和6年度クラブ員が取材を受け、出演したテレビの放送回数は14回、新聞および雑誌掲載数は45回と私たちの活動が多く報道され、地域からも大きな反響をいただきました。

農業新聞との連携事業から情報発信技術を学べたと感じたクラブ員は94.1%とクラブ員・執行部ともに持続可能な農業への意識が向上し、学びの発信技術が体得できたと分析しました。



(2) 「持続可能な農業」意識の導入で研究が高度化。入賞功績をクラブ員に還元できた

持続可能な農業の観点を導入した専攻班は89.7%を達成。Project Aでは、商業高校生からの活動評価4.8、旭農クラブ員は4.5と昨年度から大きく評価を向上できました。職業高校同士の高度な研究を旭川市長今津寛介様からも高く評価いただいたことから、「持続可能な農業」意識の導入で研究の高度化に繋がったと分析しました。



研究の高度化により、第75回日本学校農業クラブ全国大会、プロジェクト発表、分野Ⅱ類に農業科学科地域資源活用班が出場、分野Ⅲ類では農業科学科水稻班が優秀賞という輝かしい功績に繋がりました。また、意見発表会分野Ⅱ類で全国大会出場など、多くの入賞功績をクラブ員に還元できたと分析します。



(3)「持続可能な農業」の取り組みを地域に還元し、伝えることができた。

子ども食堂の取り組みが持続可能な農業の発信に貢献できたと感じたクラブ員は86%と高い評価を実現。子ども食堂の取り組みが報道された後から、参加者の増加が顕著だったことなど、永山ホビーキッチン代表 浅利 和慶 様からも高い評価をいただき、日々の学習を地域に還元できたと分析しました。

また、永山魅力発見隊事業の参加者全員から「とても満足」と高い評価をいただいたことから、日々の学習を還元し、学習成果を未来の農業を担う子どもたちに伝えることができた と判断しました。



7 課題

- (1) 農業クラブ活動の主体的な参加と発信活動の継続（主体的な学び）社会性
- (2) 三大事業の入賞レベルの向上。全国大会最優秀賞入賞者の輩出（深い学び）科学性
- (3) 横断型、縦断型農業クラブ活動。地域コミュニティでの指導環境整備（対話的な学び）指導性

8 評価

外部4機関（永山ホビーキッチン様、旭川市産業創造プラザ様、旭川市立大学様、(株)北永農場様）からの評価です。クラブ員の地域の課題解決に対する取り組みは5.0。「持続可能な農業」への取り組みも4.5と高い評価をいただきました。

執行部の自己評価は4.7、クラブ員は4.2と昨年度とほぼ同等でしたが、「地域課題の解決に貢献していると実感する」などのクラブ員の声から学びの定着を確認。3年連続アグリマイスター学校表彰を受賞するなど学校全体の高い評価に繋がりました。



9 おわりに

地域農業にひたむきに向き合ってきた旭農生。私たちはこれからも地域の課題に真摯に向き合い、次の100年を、そして持続可能な未来を残していきます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 山形県立庄内農業高等学校
食品科学科 2年 五十嵐 陽穂

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSの活用では日々の授業やプロジェクト学習など日常的にどのような学習をしているのか、投稿すると効果的だと思います。老若男女問わずたくさんの方が利用するアプリやツールを使い発信することで、認知度を高め、興味を持ってくれる人が増えるのではないかと考えます。地域での繋がりとして私達の学校では授業の一環で加工したうどんを地元商店街で実際に提供する「庄農うどん大作戦」という活動をしています。商工会や町、市と連携を図り地域活性化を担う地元根ざした活動に取り組んでおり、農業クラブ活動を校内だけでなくとどめず様々な垣根を越えて交流、発信することが大切だと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

学校紹介や取り組み事例の発表だけでなく、困っていることの共有を図りその課題を解決するために各学校での強みを持ち寄ることで交流、連携はできないかと考えました。例えば原材料はあるけど加工できない、加工はできるけど原材料がない、など。学校の特色を踏まえてコラボレーションすることで活性化に繋がると思います。頻繁に直接あって会議を持つことが難しい場合は、事前にリモート会議を定期的に行うなどして交流や話し合いを進めることで、スムーズに実行する事も可能だと思います。課題に対して協力して取り組む事で学習への理解を深め、楽しさを共有することで、活性化にもつながると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

実際に持続可能な農業やスマート農業など、今の新しい農業を学んでいる私達が積極的に発信することが効果的だと思います。また、それらを使うことによって収入、収量の増加や品質改善、労働力軽減など利点を科学的に検証し数値化することによって、わかりやすく説明をする事ができると思います。また、発信方法として実際に普段の授業を公開し、共に実習や受講できるようにしたり、SNSツールの利用やオンデマンド配信なども有効だと考えました。意見発表やプロジェクト発表などの校内の農業クラブ活動を一般開放することも解放し成果を発表することで広めることも可能だと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立勢多農林高等学校

動物科学科 3年 宮崎 悠姫乃

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を高めるためには、SNSを効果的に活用し、地域や学校間のつながりを大切にするのが重要である。まず、多くの人に魅力を伝えるために、トレンドを取り入れた発信を行い、若者世代にも親しみやすい内容とする。さらに、学校間の交流を活発化させ、活動報告や情報交換の様子をSNSに投稿することで、取り組みの広がりを具体化することができる。また、市立図書館や学習センターなどの地域で行われるイベントに引き続き参加し、農業体験や販売会を実施し、その成果をSNSや地域の情報誌から発信することで、地域住民との関わりも深まる。さらに、農業高校生が中学校や小学校で授業を行い、その活動をSNSや新聞で取り上げてもらうことは、私たちや後輩たちの勉強になるだけでなく、多くの人の認知度向上につながる。このように、実際の活動と情報発信を組み合わせることで、農業クラブの存在意義と魅力がより多くの人々に伝わり、地域や学校をつなぐ大きな力となる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員の興味や関心を高め、交流や連携を深めることで農業クラブを活性化させることができる。まず、他校の活動を知る機会を設けることで、自分たちの活動に新しい発想やきっかけを得られる。次に、新役員研修会や理事会、代議委員会など県連農業クラブで行われる活動を全クラブ員に共有することで、組織の動きを理解し、自らの活動意欲の向上につなげることができる。また、農業クラブ各種大会をYouTubeなどのオンライン配信で広く農業クラブ員に視聴してもらうことで、参加できなかったクラブ員も大会の雰囲気や取り組みを知ることができ、学びのきっかけを得られる。これらの取り組みを通して、クラブ員一人ひとりの関心を引き出し、交流を活性化することで、農業クラブ全体がより魅力的で活発な組織となることが期待できる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

高齢化が進む農業を持続可能に広めるためには、若い世代ならではの新しい発想と技術の活用が不可欠である。まず、スマート農業を積極的に導入し、ICTやドローン、ロボットなどを用いることで、作業の効率化と省力化を図ることができる。これにより、従来「汚い」「きつい」と捉えられていた農業のマイナスイメージを払拭し、若者が主体となる新しい農業スタイルを築くことができる。さらに、現在の農業が環境に与える影響を正しく理解し、自然のことを考えた農法を推進することも重要である。活動を若い世代が中心となって発信し、地域社会や教育現場と連携すれば、農業に対する関心が高まり、未来に向けて持続可能な農業の普及につながると考えられる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立秩父農工科学高等学校

農業科 2年 赤岩 倫太郎

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

私の通っている学校ではInstagramを開設して各学科での取り組みを発信するようにしています。7月から開設しているため、登録者や再生回数は徐々に増やしている段階です。

農業クラブの活動は、学校単位の活動をこまめに発信することで地域の方に情報が届き、私たちが作った農作物や加工品を販売する際、SNSの販売情報を知って学校やスーパーマーケット、百貨店などに購入に来ていただいています。

SNSは、ホームページとは違い様々な方に情報を発信できます。農業クラブの活動をこまめに動画や写真を撮影・記録しながら発信できるようにしていくことが重要だと考えます。情報をより多くSNSに出すことで、地域や学校間でもお互いの活動を知る機会が増え繋がりを大切になると思います。

具体的に以下のような企画があるとクラブ員の交流が深まると考え記載します。

- ・SNSを活用してクラブ員参加の形でレクリエーションを行い、役員だけでなくクラブ員の層での交流を図る。
- ・文化祭、地域行事への出店やワークショップなどを催して、SNSなどを利用して農業クラブを知る機会、地域との関わりを持つ機会を発信する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員は人数が多いため、目標を決めて行動し、それをやり遂げることによって、興味や関心、交流や連携を高められると考えます。具体的には、座学や実習で取り組んでいることについて、クラブ員同士が意見交換できる場を作ることが必要だと考えます。その一つのツールとして、SNSは交流しやすい手段だと考えます。

また、各高校の農場見学や他校の視察も効果的だと感じます。実際に訪問することが難しい場合でも、お互いに情報発信を行うことで、知る機会を作ることができます。機関紙やSNSを通じて、クラブ員が興味を持つようなミニクイズや豆知識などを発信する活動も、農業クラブを活性化させる取り組みにつながると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業の担い手不足の解決策の一つとしてスマート農業の導入が重要と考えます。各学校でスマート農業がどれほど取り入れられているかは分かりません。しかし、現在ではSNSやインターネットなどを通じて、情報を簡単に得ることができます。まずは、スマート農業がどのようなものかを理解し、スマート農業を導入している農家や施設などを見学する際、撮影などを行い情報発信して、持続可能な農業を広められると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立大網高等学校
農業科 3年 宮部 泰地

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

「X」や「Instagram」のアカウントを作成し、各学校で取り組んだ活動を投稿することで情報提供や親近感を得ることができると思います。取り組んだ活動とは研究発表や地域貢献などです。また投稿時はハッシュタグを活用し、多くの人に情報が届くようにします。ハッシュタグに使用するキーワードは地域名やイベント名、農業関連のキーワードとし、地域の産業まつりやイベントに、農業クラブとして積極的に参加することで地域の人々との接点を作ることができます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

意見発表会や農業鑑定競技会、プロジェクト発表があると思います。意見発表会をする目的は研究したことや農業に対する自分が思っていることをまとめた物を発表することによって、いろいろな意見を知ることができるからだと思います。競技会をする目的は鑑定技術や栽培技術など、農業の専門的な技術を競い合うことによって、作物の知識が身に付き、実習での作業の速さや正確性を身に着けることができるので、農作業の実践力を高めることができるからだと思います。プロジェクト発表をする目的は、自分たちの学校で農業系の課題を見つけて、実践的な解決策を提案し、発表することだと思います。発表することによって課題解決に向けた考え方、実践力を身に着けることができると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

スマート農業を活用することだと思います。AIやドローンなどの最先端技術を活用して作物の生産効率を高めることと、労働負担を減らせることができます。自動運転のトラクターや環境制御システムを取り入れたビニールハウスを利用することによって少人数でも作業効率が良くなり、多くの農作業をすることができます。スマート農業を活用することで、体力的な負担を軽減することができるため、若い世代が農業に対して思っている農業は「疲れる」「汚い」「稼げない」といったマイナスなイメージを減らすことができるので、農業の魅力を高め、若い世代の関心を惹くことができると思います。規格外の野菜を加工して、販売することによって「もったいない」を減らして、持続可能な農業をしていけるとと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立平塚農商高等学校

農業総合科 3年 菊川 紗希

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域・学校間のつながりのため新たな取組みとして出張販売を行う。

→新幹線が通る駅など人通りが多い場所の小田原、新横浜、海老名SAなどに行き、各校の生産物を販売し、外国人や他県の方など農業高校を知ってもらえるきっかけとなる。

次に農業体験です。各校が行っている近隣の小学生と田植え体験やポニーなどの動物とのふれあいをこれからも続けていくこと。

このような活動をさまざまな人に知ってもらうため、魅力をより効果的に伝えられ、写真や動画を共有できるSNSが良いと考えました。具体的にはInstagramを使い、各校1つのアカウントをつくり農業クラブ本部が運営をする。内容は販売会や文化祭などの農業高校ならではのイベントの告知を随時行う、県連役員会や定例会などの簡単な活動報告を発信する。クッキーなどのレシピを載せたり、料理教室のような体験を開きコミュニケーションを取る。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを主体としたイベントを各校開催。

任意の活動ではなく授業をもらい農業科全体で活動を行い、興味関心をもってもらおう。

対象者に学校を解放し大会の様子や授業の様子を見てもらう

→一般者も農業クラブに入ってもらい活動と一緒にする。

「農業クラブがあるから」入学したいといってもらえる学校になる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業を知ってもらう（学生・地域）

→調理体験、農業体験、花壇植えをイベントとして授業を使い実施。

魅力を伝え農業の悪いイメージを良いイメージへ、若者にも知ってもらえ持続的な農業を行うことができる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立静岡農業高等学校
食品科学科 3年 松本 さくら

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

まず、農業クラブを認知度してもらうためにSNS等のツールを活用して農業の魅力を発信したり、共感を得られるような投稿を活用して知ってもらうことが大切だと考える。

地域・学校間の繋がりを広める工夫は、他校の農業クラブ員と合同のイベントを実施するなど、地域の人を巻き込む投稿など（インタビューなど）を行なうとよいと思った。SNSは「ただ報告する」だけではなくて、地域の人や他校の人が参加したくなる・関わりたくなる発信を意識する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

会議や大会、緑の学園などの他校が集まる機会でレクリエーションの一環として自分たちの学校の日常を話し合ったり、お互い協力し合い何か課題を解決したり、1つの意見に対しての思いを語り合う活動。農業に関連する活動と一緒にやろう。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

若い世代向けに農業の楽しさを広めるきっかけを作る。ワークショップなどの体験できる場を作る。意見発表やプロジェクト発表の大会の見学をすることで興味・関心を得られる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県佐久平総合技術高等学校
食農クリエイト科 2年 濱 香蓮

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校の農業クラブでは、地域貢献のために日ごろ利用させていただいている岩村田駅の花壇とその周辺を花でいっぱいにする「花いっぱい運動」をしていて今年で38回目となりました。その他にも地元の酒蔵祭りなどの地域行事への参加をしています。また各コースでは授業などで地域の保育園、小学校との交流や、専門部での動物の貸し出しを通して交流をするなど、地域交流を活発に行っています。地域の方々と直接会話をする事ができるとても貴重な交流活動となっています。これらの活動は学校HPや公式InstagramなどのSNSを活用し地域内外へ発信することで本校の活動を多くの方に知ってもらう機会となっています。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校は農業科と工業科のある浅間キャンパスと創造実践科がある臼田キャンパスの2キャンパスで構成された総合技術高校です。昨年、創立10周年を迎えました。農業クラブ活動としてはもともと別の単位クラブとして活動していた北佐久農業高校と臼田高校がそれぞれの伝統を活かした活動を行ってきました。キャンパス間での交流やクラブ活動は中々できていませんが、それぞれの活動では学年の垣根を越えクラブ員同士が楽しんで活動することができています。クラブ員が自ら地域の課題に目を向け考えてともに協力し活動していくことでクラブ員同士の絆が深まりより活発的なクラブ活動になると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

私たちの住む長野県佐久地域は13蔵もの酒蔵がある酒の街です。本校では地域連携の一環で地元の酒蔵さんと連携して日本酒の醸造をしていただいています。その際、製造過程で残渣としてでる酒粕の活用方法についてクラブ員で考え、地元のパン屋さんやお菓子屋さんで連携しパンやクッキーなどの加工品を製造、販売を行ってきました。食品としての活用だけでなく畜産動物の飼料として与えるなどしてきました。これらの活動が地域から注目されコーヒー粕やビール粕、竹の活用方法など様々なカスの活用依頼が来るようになりました。これらのカスは堆肥化させたり家畜の床敷にしたりするなどし、本来であれば捨ててしまう物を私たちの高校生の若いアイディアで農業に取り入れることで持続可能な循環型農業を広めていけるよう活動しています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立渥美農業高等学校
食品科学科 2年 伊藤 絢香

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- (1) 親しみやすい情報発信で農業クラブの活動を広める
ア ストーリーやショート動画の活用
（ア）InstagramやYouTubeで、執行部の日常や活動をストーリーやショート動画で発信する。
（イ）先生が登場する「変わり種」も企画し、親しみやすさや興味を引き立てる動画の作成をする。
（ウ）統一ハッシュタグを利用し、発信力を高める。(例:#農クの輪、#若農の挑戦、#渥農)
イ 地域施設でのポスター掲示
駅やスーパーなど、多くの人が利用する場所に農高祭や渥農マーケットなどの案内を掲示し、調べてもらえる工夫や足を運んでもらえるきっかけを作る。
- (2) 定期的な各校の交流会（リモート・対面）の実施
各学校の農業クラブ執行部が集まり、現在の取り組みや今後の計画について意見交換を行う。リモートも活用することで、手軽に意見交換が可能になる。さらに、農ク連盟共同で商品開発やイベント企画を行うことで、農業高校全体の活性化につなげていきたい。
- (3) 地域に向けた農業クラブ活動のPR
ア 農高祭で農業クラブの活動を紹介するブースを設ける。
イ 地域施設でのポスター掲示
駅やスーパーなど、多くの人が利用する場所に農高祭や渥農マーケットなどの案内を掲示し、調べてもらえる工夫や足を運んでもらえるきっかけを作る。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- (1) 執行部による動画発信
各部門やメンバーを紹介するリレー形式の動画を作成し、農業クラブの多様な活動と執行部の個性をアピールする。行事運営の裏側当も撮影し、農業クラブ行事を知ってもらうことで、クラブ員の関心を深めていく。
- (2) 学校を超えたコラボレーション
各校代表生徒を募り、クラブ連盟共同で商品開発やイベント企画を計画。愛知県の農業高校全体の活性化につなげていきたい。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- (1) 小中学生向け体験教室や出前授業の実施
ア 「農に触れるきっかけ」を増やす
小中学生を対象に、体験教室や出前授業、栽培体験を企画し、農業に触れる機会を増やす。その中で、農業の楽しさを知ってもらい、興味を持ってもらいたい。
イ 紙芝居や絵本による「持続可能な農業」の啓発
「持続可能」という概念を子供たちに分かりやすく伝えるため、農業を持続可能にするためのサイクルを紙芝居や絵本にして、出前授業などで活用する。また、これらの準備に高校生が取り組むことで、農業の魅力を再確認することができ、高校生が農業に関わっていくことにもつながると考える。
ウ 料理教室の開催
持続可能な農業によって、学校で育てた農産物での料理教室を企画し、持続可能性についてもわかりやすく説明し、楽しみながら農業の良さについて知ってもらう機会をつくる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立四日市農芸高等学校
農業科学科 3年 森島 康太

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を上げるためには、Instagramを開発して、定期的に活動・イベントの様子や、販売イベントの告知を行いたいと思います。販売イベントでは、QRコードの設置やポストカード・チラシの配布を行い、Instagramの認知度を高めたいです。本校の農業クラブが行っている季節のイベント（七夕やイルミネーション）を一般公開にしたり、農業体験会を行い、来てくれた方との交流の場を設けるのもひとつです。学校間での交流では、地域で行われる販売イベントなどを一緒に行ったり、幹部講習会など意見交換会の場を大切にしたいと思います。年次大会では、オリエンテーションなども企画し、学校間での交流の場を設けたらと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブの活性化に向けて、出来ることと必要なことを、「興味関心」・「交流」・「連携」の3つに分けて意見を出し合いました。

「興味関心」では、新入生に農業クラブのことを知ってもらうことが重要です。そのため、私たちは新入生のために農業クラブの説明動画を作りました。動画を見てもらった感想には、活動と一緒にやってみたいや面白そうなどの意見があり、興味・関心をもってもらったように感じます。また、SNSで競技に取り組んでいる姿を見てもらうことも、やってみたいに繋がるのではないのでしょうか。「交流」では、他校との関わりを増やし、それぞれの学校が農業クラブとしてどのようなことを取り組んでいるかを知ること、良いところを取り入れることができるのではないのでしょうか。県全体がよりレベルの高い農業クラブへと進化していくと思います。「連携」では、農業クラブの活動は他校と関わるのが多くあるので、大会や行事だけではなく、普段の総合実習などの授業で交流する機会をもてると面白いと感じます。「農ク」という繋がりも感じることができると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

私たちは課題に対して2つの意見を出しました。1つ目は「スマート農業」です。AIやドローン、IoTなどの新しい最新技術を使えば作業の負担を減らし、効率的に農業を進めることが出来ます。若い人たちは、こうした技術に親しみがあるため、うまく取り入れることが可能だと考えました。また、SNSでの情報発信も重要です。YoutubeやInstagramなどSNSを利用した農作業の様子や農作物の魅力を伝えることで多くの人に関心をもって頂けると考えます。

2つ目は農業体験の機会を作ることです。小中学校で出前授業を行い、子供たちに野菜作りを体験してもらうことで農業の大切さや楽しさを知ってもらい、農業の担い手を増やせるのではと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立湖南農業高等学校

食品科 3年 早川 葵

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を上げるためには、LINE、Instagram、TikTok、Xなど広く普及されているアプリで公式学校アカウントを作成し、学校、販売イベント、農業クラブについて発信し活動を知ってもらおう。それにより、地域の方からの質問や意見をダイレクトメッセージで受け取ることができ、地域の課題に向き合ったり、地域主催のイベントなど協力したり、意見に対して対応しやすい環境をつくることで繋がりを大切にできる。

また、農業クラブでイベントを企画し、SNSで発信すれば、地域の方にも参加していただきやすくなり、二次元コードからアンケート回答できるようなものも作成すれば、地域と関わりやすくなる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、各学年に合わせて、授業を1時間使い、農業クラブに関する授業や、簡単な農業クラブのクイズなどを行い、農業クラブを知ってもらおう。それにより、学校内の掲示板や農業クラブの広報誌など見た際に目に留まるようになる。

例えば、芋ほりなどの全校で行う農業クラブの行事を企画する。それにより、他学年との交流や連携を高めることができる考える。

また、農業クラブを活性化させるには、農業高校以外の地域の高校と合同のイベントや地域の美化活動を実施することや、中学校に訪問し、農業高校や農業クラブについて知ってもらえるよう説明しに行く。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業は3K（きつい、危険、汚い）などの大変なイメージとして捉えられている点があるので、簡単にできる農業体験などを行ってもらうこととドローンを活用した栽培、GPSを活用したトラクターなどスマート農業を組み合わせたイベントを開催し、最新の農業を知ってもらい、少しでもよいイメージで思ってもらう機会を増やすことが必要だと思います。

また、若い世代に農業を知ってもらうためには、幼い時の農業体験が大事だと思います。農産物の栽培を行うことで、農業の大切さを学ぶことができ、農業に興味を持つことにつながると考える。そのために小学校の授業の中で農業高校と連携し、農作業を通じて農業の魅力を伝えることが必要だと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立高松農業高等学校
園芸科学科 3年 茂木 日々来

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

本校では植栽実習や販売実習、牛の出産動画などをSNSで発信し、学科の紹介を行っているが、地域や他校に広げることができておらず、農業クラブ組織の情報発信もできていないのが現状である。また、学校間の交流は競技しかなく、地域と農業クラブ員と一緒に活動する機会もない。

対策として、まず農業クラブ活動とは授業や実習など日常の取り組みも含めて活動であるので、高農の活動を広めるために校外活動で関わる人にSNSのフォローを求めたり、QRコードを商品に添えるなどして繋がりを作る。広げた繋がりを利用して地域農家の活動を紹介し、交流の機会をつくることで、地域との繋がりを深めていくことができる。また、県内の農業クラブ役員が集まる幹部講習会などで農業クラブ全体のSNSアカウント作成し、そのアカウントを用いて連絡を取り、各校での活動の紹介動画の企画や共同制作を生徒主体で行う。他にも加工品を学校間で交換・販売をしたり、岡山県全体での発信と連携を図り、継続的な繋がりを築いていく。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

学級分会や意見発表会、課題研究発表会などの意欲の向上や興味を見つける機会はあるが、それをクラブ員全体の意欲向上に繋げることができていない。また、畜産科学科の堆肥を園芸科学科などで作物や植物を育てる際に利用するなど科を超えての連携はあるが、知られていない。

対策として、2・3年生を対象とし各学科で何をしているのか、他の学科の課題研究やプロジェクト学習を動画や実物で紹介するオリエンテーションを実施する。例えば「畜産科学科の堆肥の活用」や「園芸科学科のコンパニオンプランツの活用」などに繋がってくる。これらは興味・関心を持つきっかけになるとともに、課題研究やプロジェクトなどで利用できるものを知り、活用することで学科を超えた交流・連携につながる。また、様々な知識に触れることで、多角的な視点をもつこともできる。プロジェクトや課題研究の活性化が農業クラブ全体の活性化に繋がる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

高松農業高校では、幼い時期から農業に親しみを感じてもらうために、幼稚園児との寄せ植え体験や収穫体験を授業の一環として実施しているが、対象世代が主に幼児や児童に偏っており、多世代との交流の機会が無い。

対策として、「持続可能な農業を実現するためには、次世代の後継者を育成することが大切」と考えた。具体的には、親子や地域ぐるみの農作業体験（例:さつまいも収穫体験やスマート農業体験）を開催し、収穫体験やドローン操作体験を通して、農業を楽しめる企画にする。それにより、幼児や児童だけでなく、保護者や教職員、地域住民を巻き込み、多くの人に農業を身近に感じてもらう。自分たちが教える側（先生役）になり、地域の公民館で、農業に関するクイズを出すなど、楽しみながら農業について知ってもらう活動を行うことで、地域連携と信頼構築を高める。農業への関心を幅広い世代に広げ、将来的には地域の担い手としての意識を育むことが期待でき、持続可能な農業に繋がる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口県立田布施農工高等学校
生物生産科 2年 榎田 ひなた

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSを活用するために大切なことは、活動やイベントの情報をこまめに発信することです。写真や動画を使って、見た人が「楽しそう!」と思えるような投稿にすることで、フォロワーの興味を引きやすくなります。

また、県内外の農業クラブと一緒にイベントを開くことで、新しいつながりができたり、いろいろな刺激を受けたりすることができます。他にもクイズなどの参加型コンテンツを投稿すれば、フォロワーとの距離も近くなり、投稿をシェアしてもらいやすくなります。

さらに、地域のストーリーや地元の農家さんへのインタビューなどを紹介することで、地域とのつながりや農業の魅力も伝えることができます。

こうした取り組みを続けることで、農業クラブのことをもっと多くの人に知ってもらい、地域や学校との絆も深めていけると思います。



2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブのメンバーの興味や関心を高めて、みんなで楽しく活動するためには、「参加しやすさ」「面白さ」「やりがい」が大切です。

例えば、農業高校の体験ツアーや、実際に手を動かして学べるワークショップ、農業の知識をクイズ形式で楽しめる大会、「農業あるある」をテーマにした動画づくりなど、生徒目線でワクワクするような活動を考えていきます。さらに、クラブのチームワークや誇りを育てるために、オリジナルグッズを作ることも魅力的です。

農業クラブをもっと盛り上げるためのポイントは、「自分ゴト化」と考えます。「やってみたい!」という気持ちを引き出して、「自分の成長につながる」「社会の役に立っている」と感じられるような環境を整えていきたいです。



3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

高齢化が進む農業の世界で、若い世代に農業の魅力を伝えるためには、「農業は誰でも始められるし、挑戦できる!」というイメージを広めることが大切です。

今の日本では、農業に関わる人が減り、「農業が遠い存在」と感じている人が多いのが現状です。だからこそ、農業を身近に感じてもらえるように、積極的に情報を発信していくことが必要です。

例えば、農業や農業高校の楽しさや可能性を伝えることで、「ちょっと面白そう」「やってみたいかも」と感じてもらえるきっかけになります。そうすることで、将来の仕事の選択肢として農業を考える人が増えていくことが期待できます。



クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立高志館高等学校
食品流通科 3年 渡邊 愛美

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

1つ目は農業体験イベントである。地域の人や他校生に農業の魅力、農業クラブの活動に親しんでもらうために農業体験フェスタを行う。例えば、種まきや収穫体験・収穫したものの使って調理し、試食をする。SNSでは事前にどんな野菜を収穫したいか投票企画をする。

また、当日のライブ配信や写真を投稿し、参加者に#農業体験フェスタ2025などのハッシュタグを呼びかける。

2つ目が地元企業や団体とのコラボである。道の駅や地元のスーパーとの販売協力をしてもらい、学校で作った野菜や果物、菓子を販売することで、地域との信頼関係が築け、活動の幅が広がると考える。

3つ目がSNSコラボ企画である。農クラリー投稿で毎週別の学校が活動報告をして、投稿してバトン繋ぐ。例「今週は〇〇高校さんからのバトン!#農クラリー #農業高校生」

農業のことを学びつつ、SNS上でも高校同士の繋がりを感ずることができる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

1つが他校との交流だ。合同で行う農業体験や、オンラインでの意見交流会を行ったり、それぞれの学校で、行われている農業の取り組みや工夫を学ぶ。また、交流の促進イベントとして、クラブ内レクリエーションや農業に関するクイズ大会・班対抗の農業コンテストや発表会を行う。このことで、互いにコミュニケーションを取れ、楽しみながら技術も学ぶことができる。

2つ目が地域・企業との交流である。地元の農家やJAと連携をし、農業体験や作物や食品の販売を行う。また、地域のイベントへの参加や道の駅・直売所での販売実習を通して、農業の魅力を地域に広める役割を果たすことができる。

3つ目が情報発信農業クラブ公式アカウントを作り、イベントの様子を動画や写真で発信することである。活動の報告を保護者や地域の方に届け、クラブの存在感を高める効果が見込める。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

1つ目がテクノロジーの活用である。ドローンやAIを用いたスマート農業をすることで、作業の負担が軽減する。農業は体力的に厳しいというものから知識と工夫で、作業の効率化・省力化が実現し、今の若い人にとって魅力的な農業になるであろう。

2つ目が6次産業・ブランドイメージの確立・構築である。若い農業がSNSやECサイトを活用することで、消費者とのつながりが構築され、農業のやりがいや収入も向上することができる。更に、地元の資源を生かした体験事業と組み合わせれば、地域活性化にもつながる。

3つ目が環境に配慮した農業・連携である。有機農業や再生型農業など、自然との共生を目指す農法は、地球環境を守るだけでなく、安心・安全な食の提供にも繋がる。また、高齢農家の農地の継承・シェア、技術や経験の継承で、若い世代が新しいアイデアや技術を持ち込むことで、世代を超えた協力体制で日本の農業を支える大きな力になると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立八重山農林高等学校
フードプロデュース科 1年 新里 清良々

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

まず前提として農業系高校に所属する農業クラブ員が農業クラブを自覚させることに、課題があると感じている。学校での認知度向上後は、SNSの学校アカウント開設が必要である。SNSについても、学校に所属する生徒や一般の方々に馴染みのあるアカウントアプリを精選すること。そして、情報を受け取れるように、生徒へ個人アカウントを開設させることと、利用マナーの周知をさせる。一方、高齢者の方へのアプローチが課題となり、SNSの有効活用的一方で、利用に馴染みのない方へはメディアの活用が今後も大切となる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校では、学校の行事として草刈り大会、即売会等、農業クラブ活動は活発に行われている。ただ、私自身、今年の新入生として思うことは、1年生が「農業クラブ員」としての自覚をもって活動することに時間がかかったこと。そして、どうしてもその他の行事も2年生、3年生が主役になりがちであることが課題だと感じる。早くから、農業クラブ員としての認知と活動を広めることが大事だと思い、体験入学や小学校、中学校へのアプローチを行えればと思う。また、農業高校以外、例えば商業高校との交流により「農業クラブ活動」をさらに幅広く取り組むことができると考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

今後も持続的に農業が広まるには、農業の魅力を若い世代に繋ぐことが必要だ。私が考える、農業高校ができることは、農業高校の地産地消を活かしたイベント（料理大会等）から、農業の良さを幅広く多くの方に知ってもらう。農業高校だけでなく、農家の方々に協力を仰ぐ。インターンシップ以外の出前授業等が必要。

私は、幸いにも小さい頃から畜産に触れあう機会が多かったため、ずっと農業に関わることができた。一般の若い人に広められる前に、まず、農業クラブ員自体に農業の魅力を第三者に伝えられるようになる必要があると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道旭川農業高等学校

生活科学科 2年 大沼 尚央

農業科学科 2年 松田 光稀

食品科学科 2年 村椿ここみ

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度の向上と地域との連携には、SNSなどでの積極的な情報発信が重要だと考えます。また、地域や学校間で具体的な情報を共有し、お互いに理解し合うことも重要だと考えます。「農業に関する体験・交流活動」、「地域課題の解決に貢献する活動」など地域や学校を巻き込んだ活動を展開することで、有効的に活動を発信できると思います。各学校が集まる機会を作り、活動を共有し、意見し合い、高校生らしい活動を企画する。これを各学校持ち帰り、地域で実践する。そうすると自分の学校が実践していること、他の地域の学校の取組みを地域の皆さんに知ってもらえると同時に、学校間での情報共有・情報発信ができます。

以上のことから、学校同士が協力することで、農業クラブの認知度向上と共に地域や学校の繋がりの強化になるのではないかと考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるためには、ビデオ通話などで他の学校と交流することで、活動内容を共有し、お互いに刺激を与え合うことが必要だと思います。刺激を与え合うことで、農業に対する興味や関心を高め合い、より高度な活動を実践することができます。また、お互いの学校の特色や活動を理解し合うことで連携事業にも繋がり、スムーズに活動を行うことができます。農業クラブを活性化させるには、地域のイベントや地域企業との連携活動を増やし、農業クラブの活動を広めるとともに、クラブ員が主軸となって活動を行うことで、クラブ員の主体性を育てることができると思います。農業クラブの活性化を促すために、他校との交流の場を作り、様々な連携活動を行いたいと私は考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業の高齢化に対する、私たち若い世代の「役割」を考える必要があると思います。例えば、学校での農業体験や地域の食材を使った活動を通して、農業をより身近に感じることや、私たちが得意とする SNS を活用して、農業の魅力や新しい技術を発信すれば、同世代の関心を高めることができます。さらに農業は地域社会と切り離せない関係であるため、地域の農家さんと協力し、知識や経験を学ぶことで次の世代につなげることができると思います。北海道旭川農業高校は、持続可能な農業を広めるため、「子ども食堂」や「永山魅力発見隊」など、地域イベントでの活動を通じて、農業の大切さを次世代に伝える取り組みを実践しました。

農業は私たちの未来に直結しており、無関心でいることは、未来を失うことにもつながってしまいます。だからこそ、私たちが関心を持ち、小さな行動から始めることが、持続可能な農業を広めるための力になると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立磐田農業高等学校

生産科学科 3年 土屋 沙気

環境科学科 3年 金原 湊

環境科学科 2年 永田 大悟

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

(1) SNSで活動を発信

→活動や販売の様子を発信することでたくさんの人に活動を知ってもらうことができる
また、発信する際にハッシュタグを統一することで拡散力を高める
編集権限を農ク役員が持ち、リアルな農業クラブ員の伝える

(2) 他校とのコラボ

→交流も増えるし、その様子を発信することで他校の人にも農業クラブの活動を知ってもらう機会を増やす

(3) 親しみやすい内容を企画する

→「農業高校生あるある」や「農業高校の豆知識」みたいなフレンドリーな内容を取り入れることで多くの人に面白いと思ってもらえる企画を立案していく

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

(1) 地域の商工会イベントへの参加

軽トラ市では、知久屋の品物を販売して地域の方との交流を図る活動をした。この活動を通して、学校と地域の関わりがより強固になり、地域の力になるという自覚が芽生えた。また、販売を通して得たコミュニケーション力や、準備・運営に伴う責任感は、普通の授業では得がたい実践的な学びであり、今後の社会でも活かせると感じた。

(2) 校内農クリーダー研修会

学年問わず交流し、仲を深めつつ農ク役員としての自覚を高める活動をした。このことによって生徒同士の交流を活性化させコミュニケーション能力の向上とリフレッシュされたことによるモチベーションの向上がみられた。自己表現の場にもなり学校生活への満足度が上がった。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

(1) SNSの活用

実習の様子や農作物のPRをする。そうすることで、農業とはどんなことをする職業なのかに興味を持ってもらえると考える。

(2) 地域の商工会イベントへの参加

軽トラ市などの地域交流の場で、地域作物の販売やプロジェクト発表を地域の人に向けて発信し、色々な世代の人との交流を深めるのが大切だと考える。地域との交流深めることで、農業を知ってもらうと同時に、次世代につなぐ持続可能な農業を広められると考える。

参加者課題レポート

第3分科会

第8会場

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第8会場	長野県佐久平総合技術高等学校	静岡県立遠江総合高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	福島県	相馬農業高等学校	生産環境科	2	平井 美桜
2	群馬県	伊勢崎興陽高等学校	総合学科	3	平石 由衣
3	埼玉県	いずみ高等学校	生物生産科	2	小澤 勇人
4	千葉県	茂原樟陽高等学校	農業科	3	十枝 翔太
5	神奈川県	中央農業高等学校	畜産科学科	3	鈴木 友菜
6	新潟県	高田農業高等学校	食品科学科	3	池田 陽介
7	長野県	富士見高等学校	園芸科	2	御園 絢音
8	愛知県	安城農林高等学校	動物科学科	2	小野 晴登
9	三重県	久居農林高等学校	生物資源科	3	桑原 夏光
10	大阪府	園芸高等学校	バイオサイエンス科	2	河原 蒼空
11	岡山県	勝間田高等学校	総合学科	3	片田 千瑛
12	山口県	山口農業高等学校	食品工学科	2	徳万 天音
13	佐賀県	伊万里実業高等学校	生物科学科	3	井上 侑奈

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
14	長野県	佐久平総合技術高等学校	食料マネジメント科	3	茂木 こはな
15	長野県	佐久平総合技術高等学校	食料マネジメント科	3	永 峯 ゆら
16	長野県	佐久平総合技術高等学校	生物サービス科	3	高橋 妃菜

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
17	静岡県	遠江総合高等学校	総合学科	2	松本 菜佑
18	静岡県	遠江総合高等学校	総合学科	2	瀧澤 茉南
19	静岡県	遠江総合高等学校	総合学科	2	鈴木 琉夏

それいけ！佐総魂！

北信越ブロック 長野県佐久平総合技術高等学校

食料マネジメント科 3年 茂木こはな

食料マネジメント科 3年 永峯 ゆら

生物サービス科 3年 高橋 妃菜

1 はじめに

北信越ブロック連盟は新潟県9校、長野県11校、富山県5校、石川県4校、福井県3校の5県32校で構成されています。長野県連盟は11校で構成されており、非常に多くのクラブ員が所属しています。

長野県は南北に長く、北信、東信、中信、南信と4つに分かれており、同じ県内でもそれぞれで気候風土や食文化、方言までもが違う多様性に富んだ県です。その環境を生み出している大きな要因は山です。長野県には日本百名山が29座あり全国で最も多くの数を有しています。その中でも日本アルプスと呼ばれる飛騨山脈の北アルプス、木曽山脈の中央アルプス、赤石山脈の南アルプスの全てが県内に広がり、日本の屋根と呼ばれる3,000メートル級の山々が連なる山岳地域です。この特徴的な地形が広い県内の交流を断ち、その地域で独自の農作物の特産や食文化を育ててきました。それらの山々から流れる豊富な水と豊かな土壌、高冷地ならではの寒暖差と長い日照時間によって多様な農作物が栽培されています。レタスやハクサイ、セロリなどの高原野菜、リンゴやブドウ、ブルーベリーなどの果樹、カーネーションやシクラメンなどの花卉、木曽ヒノキやキノコ類などの林産物、さらには信州みそやジャムなどの加工品、あらゆる農産物が全国でも有名な産地となっています。県内の農業高校も積雪2メートルにまでなる豪雪地帯の下高井農林高校、標高が東京タワーとスカイツリーを合わせた967メートルに位置する日本一標高の高い公立高校の富士見高校、森林率93パーセントの木曽ヒノキの産地にある木曽青峰高校、南信地域の下伊那農業高校では柑橘やお茶の栽培もしています。

私たちが通う佐久平総合技術高校は、長野県の東信地域に位置し、八ヶ岳や軽井沢といったリゾート地や避暑地を有し日照時間が長く昼夜の寒暖差が大きいため、高原野菜や果樹、稲作が盛んな土地です。また、伝統的な農法として水田で小鮒を飼育し、秋にはお米と一緒に小鮒の収穫も行います。その小鮒を使った甘露煮などの伝統料理もあります。

本校は農業科と工業科がある浅間キャンパスと創造実践科がある白田キャンパスの2キャンパスで構成された総合技術高校です。昨年、創立10周年を迎え、

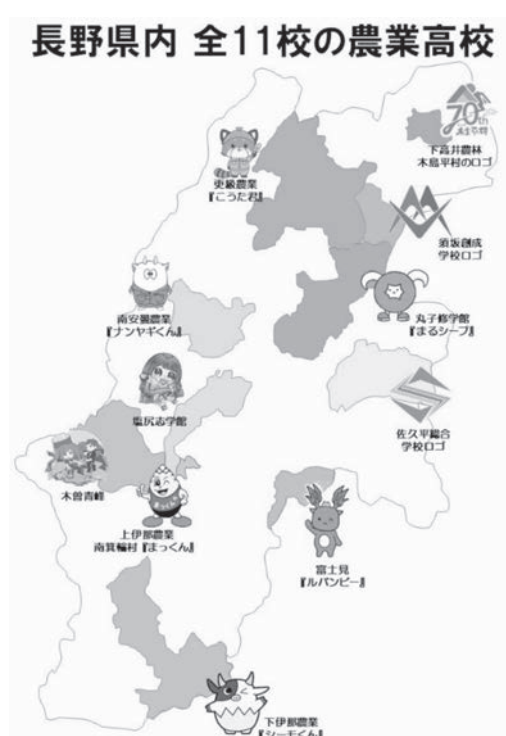


図1 長野県の農業高校の位置



図2 開校10周年

今では「佐総」の愛称で親しまれています。浅間キャンパス農業科では、「農業を学び、農業で学び、農業に学ぶ」のスローガンのもと、1年次は全員が栽培・飼育・加工など農業の基礎を学び、2年次からは専門的な6コースに分かれ、土に触れ命を育てる実習を中心に、食と命を支える農業を身につけます。

農業クラブ活動としては、もともと別の単位クラブとして活動していた北佐久農業高校と臼田高校がそれぞれの伝統を活かした、花いっぱい運動や椎茸の駒打ち体験教室など、地域に根差した活動を継続してきました。その中にはクラブ員だけでなく工業科の生徒も積極的に参加する活動も増え、総合技術高校らしい活動に発展してきました。

今回は、区分テーマである「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか」に対して本校のクラブ員が挑戦している活動を3つのテーマに分けて紹介します。

2 活動紹介

取り組み1 カスにも生きる喜びを

本校では地域連携の一環で戸塚酒造さんとの連携を8年前から行っています。本校で酒米を栽培し、その酒米を使って日本酒を醸造してもらい、出来上がった日本酒のラベルはクラブ員がそれぞれデザインし、オリジナル日本酒が完成します。この連携を始めて3年目のこと、戸塚酒造さんから「酒粕の使い道に困っている」と相談がありました。酒粕は日本酒を作る際に生まれる副産物で、酵母由来の栄養豊富な食材です。粕漬や粕汁などの郷土食として地域の食文化を担ってきました。しかし、食生活の変化に伴い酒粕の需要は低迷。今では産業廃棄物として破棄されています。

そんなのはいやだ！

最後まで作る責任を果たしたいと考え、酒粕の利用方法の模索を始めました。酒粕の消費調査や自分たちで作った酒粕クッキーなどの配布など地道な活動の末、地元ラーメン屋さんやケーキ屋さんなどと連携が決まり、酒粕を使ったオリジナル商品が佐久市内にいくつも誕生しました。また、家庭でも消費できるように食育にも活用しようと考え、唐揚げと酒粕を組み合わせた料理を考案。小学校の学校給食と共同で私たちが考えた料理を給食のメニューとして提供してもらうと同時に、小学生にメニューの説明にも伺いました。地元の食材に興味を持ってもらうきっかけとなりました。

また、酒粕の利用は食材としてだけでなく、飼料としても使えるのではないかと考え、本校で飼育している乳牛や豚の飼料として与える研究も始めました。一般的な飼料よりも安価に手に入る酒粕は栄養価も嗜好性も高く、単に飼料費の削減につながるだけでなく、乳量の増加や夏バテの予防にもなる効果が見えてきました。これらの動物の糞尿が堆肥となり、酒米の水田に戻すことで、地域連携で生まれる循環型の持続可能な農業が実現できています。



図3 酒粕の利用



図4 酒粕の飼料試験

酒粕の活動が地域から注目されると私たちのところには別のカスの活用の依頼が来るようになりました。まずは世界中に店舗があるスターバックスからコーヒカス、地元のクラフトビール工場からはビールカス、農家からは増殖して困っている竹の活用方法など、さまざまなカスが集まってきました。

素材や状態が異なるためそれぞれのカ스에合った利用方法を模索。これらは食材として利用することは難しく、飼料としても嗜好性が悪いいため違った利用を考えなくてはなりません。そこで各部活動や課題研究、授業の中で堆肥化させたり、家畜の敷き藁の代わりに撒いたり新たな利用方法が見えてきました。

捨てるために生まれるものはありません。カスにも価値を見出し、取り入れることで持続可能な循環型農業のモデルとなっています。

取り組み2 なにをつくってどこに売るのか

本校には設置から10年を迎える植物工場があります。主に野菜の授業で使われており、葉物野菜や薬用ニンジンの栽培研究を行っています。私たちはこれまでの植物工場の知識を生かして、一昨年から着目したのがエディブルフラワーです。エディブルフラワーはサラダやスイーツなどによく使われ、主にはフレンチや洋菓子店などに需要があります。しかし、生産者が少なく手に入りにくい食材でもあります。そんなエディブルフラワーに着目した私たちは、植物工場ならば安定的に季節を問わず生産することができるのではないかと思い、研究を始めました。



図5 植物工場での栽培の様子

研究を始めてみると普段露地で栽培しているようなビオラやマリーゴールドなども植物工場の中では発芽率や花芽の数などに変化が見られたり、草丈が高いものやつる性の物は栽培しづらかったりと、適した作目などが分かってきました。昨年から軽井沢のホテルに定期的に提供したり、ホテルの方に来ていただきエディブルフラワーを使った料理の講習会なども行っていたりしました。ホテルの方からは冬場でも安定的に手に入ることは非常に助かるとの声もいただき、エディブルフラワーの栽培に自信ができました。しかし、このままでは限られた人しか食べることができません。

そんなのはいやだ！

そこでこのエディブルフラワーを地域の直売所に出荷してみたところお菓子作りや家庭料理に使ったり、飲食店からも直接仕入れたいと声掛けいただいたり、多くの需要があることが分かりました。

また、これをきっかけに直売所との連携がはじまりました。これまで部活動などで試験栽培し収穫された農産物は、少量だったり、形が良くなかったりするため消費に困っていました。それらを直売所に出荷することで地域の方に学校産の農産物を味わってもらうだけでなく、クラブ員が行っている活動を知ってもらうきっかけにもなりました。



図6 直売所との連携

小規模でも出荷でき、需要がある新しい農作物を見つけ、直売所の利用により小規模でも販路をすぐに確保できることがわかりました。これらは若者の新規就農の助けになると感じています。

取り組み3 魅力は飛ぶんだどこまでも

廃棄物の有効活用やエディブルフラワーの植物工場での栽培は、多くのメディアに取り上げられ、常に注目を集めています。また、今年から本校公式のインスタグラムが始まり、クラブ員自ら積極的に発信を進めています。さらに直売所との連携で直売所を訪れた方に生産物と一緒に本校の活動を直接知ってもらう機会も増えました。

このように新聞やテレビ、SNSなど様々な媒体のメディアに出ることで、若者からお年寄りまで幅広い世代の目に留まります。そうすることで本校のクラブ活動を知ってもらうだけでなく、新しい農業の可能性や農業の魅力などを知ってもらう機会になっています。



図7 テレビ取材の様子

3 まとめ

高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるかという問いに対して、私たちは3つの挑戦から廃棄物の有効活用で持続可能な農業の実践ができ、新しい作目や直売所の利用により小規模農業の可能性を見つけ、自ら進んでメディアに出ることで農業の魅力を発信することができました。これらは高校生のアイディアと行動力で高齢化が進む農業に若者や消費者が興味関心を持つきっかけになり、持続可能な農業を広める手助けになったと考えています。

農業高校生として生きる喜び。それはいつまでも地域の農業が元気に続くことです。そのためにこれからもどんな課題が相手でも挑戦し続けます。それいけ！佐総魂！



クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 福島県立相馬農業高等学校
生産環境科 2年 平井 美桜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

SNSのなかでも、InstagramやTikTokの活用が効果的な発信方法であると考えます。利点としては、手軽に見ることができ、写真や動画を用いるため内容が分かりやすい。さらに、運用するハードルが低い。また、動画のため、内容も分かりやすく情報の拡散力も強い。これらを活用することで農業高校への興味関心を持ってもらい、魅力発信に繋がるのではないかと考えられる。しかし、クラブ員の個人名などの個人情報漏洩等にも注意し、投稿内容の確認を慎重に行う必要がある。発信する内容としては、普段の実習の様子や製造風景を動画として発信する。販売会の告知や販売会中の売れ行きなども発信することができる。現在、本校のInstagramでは、実習風景のタイムラプス動画を作成し、実習や学習内容について地元の小中学生が理解しやすい内容で、魅力発信に取り組んでいる。さらに、Instagramのストーリー機能を活用し、農業クラブの大会へ参加した生徒の現状や地域での販売会情報をこまめに発信し、「今」の相農を発信している。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

クラブ活動に意欲的に参加するために「楽しかった」「また、やりたい!」という成功体験をつくるのが一番大切だと考える。地域交流の「生徒が先生」や「学校開放講座」「校外課題研究発表会」では生徒の学習活動の成果を地域の方々に見ていただく場となっている。その際に、地域の方々からお褒めの言葉をいただくことが多い。その経験を得ることにより、クラブ員にも自信が身に付き、意欲的に活動するのではないかと考える。また、活動の見える化も重要と考え、農業クラブ県大会の様子や地域交流活動の様子をInstagramで発信している。農業クラブ活動が分からないクラブ員も少なくないため、手軽に見ることができるInstagramで発信することにより興味を持ち、意欲的な参加者が増えるのではないかと考えられる。将来的には、クラブ員によるSNS投稿を実施し、活動の幅を広げられるようにしたい。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農業に関する身近な課題と結び付け、実際に体験することでより興味関心をもつことができると考える。本校の野菜部門では、使わなくなった衣類を再利用したポリエステル媒地を利用し、野菜を栽培している。土壌を使わない栽培として大阪万博の屋上花壇や2027年に横浜で開催される国際園芸博覧会でも使われる予定である。衣類廃棄物を処分する時に燃やされる二酸化炭素を削減することにより、SDGsに貢献している。本校野菜部門ではポリエステル媒地を広める活動を行っており、卒業生の作業服や地元幼稚園の不要衣類を回収し、ポリエステル媒地を製造している株式会社アースコンシャスへ送る活動を行っている。さらに、昨年度の公開文化祭では、ポリエステル媒地を活用したバジルやベビーリーフの植え付け体験を実施し、多くの方々に興味関心を持っていただくことができた。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立伊勢崎興陽高等学校
総合学科 3年 平石 由衣

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を高めるためには、活動を積極的に発信することが重要です。現在、SNSには農業クラブに関する投稿が少なく、外部の人には内容が伝わりにくい状況です。そのため専用アカウントを開設し、日々の活動や成果をInstagram、X、TikTok、Youtubeなど複数の媒体で分かりやすく発信する必要があります。特に手の込んだ動画や写真を工夫して投稿することで、より多くの人の関心を引くことができます。また、本校の農産物販売会である興陽フェスタのような地域とつながるイベントを継続し、校外学習や地域飲食店とのコラボを発信すれば、学校と地域との結びつきも強まり、農業クラブの活動を広く理解してもらえるようになると思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを活性化させるには、クラブ員一人ひとりの興味を引き出す工夫が必要です。学科や系列を超えた交流イベントや他校との交流会を通じて仲間意識を深め、新しい知識や技術を学ぶことで活動の幅が広がります。また、SNSや校内での広報を充実させることで多くの人に活動を知ってもらえ、クラブ員の意欲向上にもつながります。さらに農業全体への関心を高めるには、根強いマイナスイメージを払拭することが大切です。収穫体験や農産物の試食、ドローンや機械の操縦体験などを通じて農業の楽しさや魅力を体感してもらうことで、新たな関心や将来の選択肢につながると考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続可能な農業を広めるには、若い世代が安心して農業を職業として選べる環境づくりが欠かせません。安定した収入や休暇といったワークライフバランスを整え、補助金制度などで新規就農を支援することが重要です。また「一人で始めなければならない」という誤解をなくし、集落営農や農業法人で働く選択肢を示すことも有効です。一方で農業を将来の選択肢とするためには、子どもの頃から農業に触れる体験の機会を増やし、身近な存在にしていく必要があります。収穫体験やイベントを通じて農業の楽しさを知ってもらい、過酷・高コストといったマイナスのイメージを払拭することが求められます。制度的支援と体験的普及を組み合わせることで、農業の魅力を広められると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立いずみ高等学校
生物生産科 2年 小澤 勇人

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・部活動の様子を定期的に投稿する。
- ・作物が育つ過程やミツバチなどの様子を写真や動画で発信する。
- ・学校間交流や地域交流などの様子を投稿する。
- ・文化祭などの地域と交流ができる機会に農産品を売る。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・やりたい目標を全員で立てる
- ・コミュニケーションを取る回数を増やす
- ・レクなどをもっと頻度を上げて行う
- ・メンバー全員で目標を共有する
- ・共同作業を増やす
- ・他校の農クの作業を体験させてもらう
- ・自然との触れ合いなどの魅力を伝える
- ・地域との交流を深める

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・SNSで農業の楽しさや面白さを発信し、少しでも若い人に興味を持ってもらう。
- ・スマート農業を導入する。
- ・具体性と将来図を示す。
- ・農業を大事にする政党に投票する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立茂原樟陽高等学校
農業科 3年 十枝 翔太

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・公式アカウントの運用
Instagram、X（旧Twitter）、TikTokなど、若者に人気のあるSNSを選定。
活動報告、イベント告知、成果物（野菜、花、加工品など）の紹介を定期的に投稿。
投稿には写真や動画を活用し、視覚的に魅力を伝える。
- ・地域イベントへの参加・共催
地元のマルシェ、祭り、収穫祭などに出店・協力。
地域住民との交流を通じて、農業クラブの存在を知ってもらう。
- ・「農業クラブの日常」シリーズとして、毎週1回のルーティン投稿。
- ・地域の農家さんとのコラボ商品を開発し、SNSで販売告知。
- ・他校との「農業クラブSNSリレー」企画で、1週間ずつ投稿をバトンタッチ。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・コンテストや品評会などで、日々の授業の発展として、競技を行う。
地元の特産品を使った加工品開発などに関するコンテスト・チャレンジ企画
作物の品評会、レシピコンテスト、農業アイデアコンテスト。
- ・千葉県全体で交流イベントやフェスなどを開催する
収穫祭、農業フェス、オンライン交流会。共同で育てた作物を使った料理大会など。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・校内で農業クラブの知名度を上げるために文化祭などで農業クラブのPR活動を行う。また、全国の農業クラブ員の活動を紹介し、農業クラブの活動を知ってもらう。
農業クラブ員が全員参加するイベントを行う
農業クラブ員が学科を跨いで活動を行い、学校の製品を開発し、ブランド化する
千葉県の農業クラブのキャラクターを作る

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立中央農業高等学校
畜産科学科 3年 鈴木 友菜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

①出張販売.神奈川県の人通りの多く、新幹線が通る小田原駅、新横浜駅、利用者が多い海老名SAの三箇所の各地に農業クラブ本部役委員が出張し、花や野菜、ジャム、クッキーなどの加工食品を募り、学校の農産物として販売する。

→神奈川県の人にはもちろん他県の人からも農業高校を知ってもらえる。

②農業体験…各農業校の特色を生かした農業体験を考え、活動することで地域や学校間の繋がりが得られる

③Instagram…①、②をInstagramで配信していくことで多くの人に農業高校の活動内容を知ってもらえるので、神奈川県の農業高校5校それぞれで農業クラブ本部のアカウントを開設する。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

文化祭では出し物をしていますが、農業クラブが主体ではないため、農業クラブへの興味関心が持ってもらいにくいので、農業クラブが主体のイベントを開催して興味関心を持ってもらう。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

幼稚園生、小・中学校を対象に農業体験と一緒にやってもらい、興味関心を持ってもらう。

→例 学校の野菜収穫、調理実習、出張授業、食育活動等

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立高田農業高等学校
食品科学科 3年 池田 陽介

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

活動内容

①SNSを活用し農業クラブの活動を写真や動画などで発信する。②農業クラブ、農業クラブの活用について知ってもらう。③地元の直売所や道の駅などで「農業クラブの出張販売」を行う。④小学校や中学校で「出張農業体験教室」を開催する。⑤他校や企業、地域などの共同活動を行う。

結果とまとめ

- ・SNSの普及が進んでいる今、農業クラブの認知度をもっと上げていくには、SNSを活用し、活動や成果などを楽しく発信することが重要だと考えます。また、積極的に地域に出ていき、農業高校の活動をアピールすることも大切です。
- ・地元のイベントへの参加、農業体験教室などの交流をしていく中、写真やポスターで校内にも掲示すると活動に対する理解が深まります。
- ・地元新聞や活動レポートを作り、SNSや文化祭等で展示することで広めていけると考えます。地元テレビ局や広報誌にも取材いただけるように活動をしていければと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

活動内容

①体験型イベントに参加する。②他校との交流会、発表会に参加する。③地域と連携した活動を行う。④新しい作物や技術に挑戦する。⑤テーマ別の課題研究に挑戦する。

結果とまとめ

- ・連携の活動は、クラブ員同士のつながりを強めるだけでなく、一人一人が「農業クラブの担い手」としての意識を高めることに繋がると思う。
- ・農業クラブの活性化に向けて、知恵を絞り、積極的に活動する、外に出向く、連携することが大切であると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

高齢化の理由とその背景

①農業は天候に左右されやすく、収入が不安定になりやすい。②最近では農業機械の費用の高騰、肥料や薬品、燃料などの経費の影響を受けやすく、新規就農者が増えにくい。③初期投資が大きい。(土地、機械、肥料等) ④農業は重労働のイメージが強い。⑤農業をやりたくても始め方がわからない、誰に何をどう聞いてよいかわからないことも考えられる。⑥興味があっても専門知識が乏しいため、農業機械の取扱いや経営方法がわからない。

まとめ

- ・持続可能な農業を実現させるためには人と人とのかかわりが必要不可欠である。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県富士見高等学校
園芸科 2年 御園 絢音

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

富士見高校では課題研究やフィールドワーク、日々の授業での実習などを通して、農業についての知識や理解を深めています。また、保育園児や地域の方々との交流に加え、シクラメンなどの販売実習も行っており、多くの方に富士見高校の園芸科について知ってもらえるような活動を実施しています。さらに、課外授業の一環として富士見パノラマリゾートと連携し、落ち葉を用いた堆肥づくりなどの環境配慮型プロジェクトや地域資源を活かしたサステナブル教育に参加し、ルバーブを用いた商品開発を行ってきました。

地域の方々に関わり合うことでクラブ員の農業についての関心を更に深める事ができていると思います。これらの活動を、SNSを通じて情報を発信することで人との繋がりを強化することができると考えています。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブを活性化させるための活動として本校では、地域課題に取り組む活動や地域を担う人材の育成などを行っており、保育園児や地域の方々との交流を重視しています。また、クラブ員の興味関心を高めるためには、「自分からやりたい」と思えるような体験や工夫をしていくことが大切だと考えています。例えば、保育園や地域の方々との交流だけではなく小学生と関わる機会を設け、野菜の収穫体験や収穫した野菜を使って調理するなど楽しく農業に触れる事ができるイベントを実施できればより地域との繋がりが強固なものになり、農業クラブを活性化させることができるのではないかと考えています。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続可能な農業を若い世代に広めるためにはIT技術の導入やSNSを活用していくことが必要不可欠だと思います。IT技術のメリットとして生産性や品質の向上、重労働の削減などがあげられます。ドローンやデータ分析などのIT技術は若い世代にとって魅力的な要素の1つとなり、「体力的な負担が大きい」となどといった従来の農業に対してのイメージを改新させることができます。また、SNSを活用し農業について発信することでより多くの人に農業の魅力を知ってもらうことができるのではないのでしょうか。このように高度な技術とSNS発信を組み合わせることで、若い世代に持続可能な農業を広めることができると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立安城農林高等学校
動物科学科 2年 小野 晴登

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

多くの農業高校には学校で生産したものを一般の方に販売する機会があり、地域における認知度は高いと考えられる。しかし理解の程度としては、生徒が農業の勉強をしている、農産物を安く買えるなどの認識にとどまっているように感じる。実習を通して生産・加工・販売をするのはもちろんのこと、日々の農業学習の成果を発揮する場として様々な農業クラブ活動がある。学習の中で気になったことや地域の農業の課題を解決するプロジェクト活動や、自分の意見・考えを発表する意見発表、習得した知識や技術を競う農業鑑定競技など、活躍の場は普通科高校と比べて多い。また地域や他校との交流が盛んなのも農業クラブ活動ならではの。農業クラブ活動の中心として取り組んでいる執行部の活動を若年層が利用の中心であるSNSを活用しPRすることで、高校入学前から農業クラブについてある程度知っている・興味のある人が増えたり、他の農業高校の良い取り組みを自校に取り入れたり、農業高校を応援・協力したいと思う学校や企業、地域の方が増えるのではないかと考えた。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブ活動は選手に選ばれた一部の生徒、執行部員だけの活動だと認識しているクラブ員も多い。校内大会をきちんと全校生徒参加で運営することや他の生徒をまきこむような行事を企画することで、全員の活動であるという認識をもってもらうことが活性化の第一歩であると考えます。また、SNSで「#全国農業高校サステナ部」など他の農業高校も参加しやすいハッシュタグを作って投稿することでSNS上にさまざまな交流が生まれ、投稿や交流を目にする機会も増えることで関心が高まるのではないかと考えた。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

農家は生活がかかっており、いきなり大きく生産方式を変えることが難しい。農業高校が「持続可能な農業」を実践し、無理なく継続できたり、安定した収入を得られるモデルを作る必要がある。そして、各校で得られた知識や技術を地域の農家と共有したり、地域の子どもたちに教えるイベントを開催することで地域全体に広めていくことができると考える。若い世代にとってSNSは日常の一部である。InstagramやTikTokなどのSNSで「#エコ農業チャレンジ」などのハッシュタグを使って日々の実習や環境にやさしい農業の取り組みを発信することで、同世代に対して「高校生でも地球にやさしいことができる」「環境に配慮して作られたものを食べたい」と思ってもらえるのではないかと考えた。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立久居農林高等学校
生物資源科 3年 桑原 夏光

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

三重県ではSNSツールとしてGoogleのclassroomが活用されています。本校では年度初めの農業クラブ総会の資料を各学年に作成したclassroom配信することでペーパーレス化を行っています。また、「リーダーシップ」夏号以降についても閲覧できるよう配信を行いました。

学校間については今年度三重県産業教育フェアの実行委員を務める事になり、他の学科の生徒たちとclassroomでつながり、オンライン会議にも参加しました。実行委員会としての集まりもあるので、機会があれば農業クラブ活動の紹介もできれば良いと思っています。

地域にへのつながりとしては、学校ホームページからの情報発信、活動としては「花いっぱい運動」「地域イベントへの参加、生産物販売」などの活動を行っています。

その他プロジェクト活動などで食品コースが津市榊原地区との連携を進めています。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

本校では入学してきた生徒向けに「新入生オリエンテーション」を毎年3年生が中心になって行っています。また「朝の読書」の時間を使って、年1回「リーダーシップの日」をもうけて、読んでもらう機会を作っています。また、役員会は毎週月曜日に定例として行い、行事運営、役割分担、情報共有など役員としての意識を高めるための活動を行っています。

生徒会と協力して朝、生徒昇降口に執行部が立ち「あいさつ運動」を行っています。

交流としては、家庭クラブとの合同企画として「花いっぱい運動」を年2回春と秋に行います。（昨年までは夏と冬でした）家庭クラブの生徒とペットボトルでハンギングフラワー作り、地域へ配布するための花のプランター作りを行っています。今年はプランターでサツマイモ栽培も行いました。協力して植え付けをして栽培管理を行い、収穫した芋で家庭科と協力してスイーツ作りをしようと計画しています。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

本校では10年以上「わくわく農林塾」という活動を行って地域住民、児童、生徒との交流を続け、農業の魅力を伝える活動を行ってきました。また、植物コースでは、イチゴでのGAP取得を行っています。このような取り組みを広げ、また活動の意味を知ってもらい、古い時代の農業経営から新しい時代の現代農業を理解してもらい、企業で働くのと変わらない魅力的な仕事であるということを伝えられるのはそれを学んでいる私たちだと思います。また、生産物販売、イベント参加など様々な外部の人たちと接する機会があります。その際に新しい農業について紹介するなど農業の魅力を伝えるチャンスもあると思います。私たち農業高校生も学校にある最新機器を積極的に活用して行くことはもちろんですが、先進的な農業に取り組んでいるところもたくさんあると思うので、先進農家見学、インターンシップなどに積極的に参加して身をもって先進技術を体験することで、より具体的に説明でき新しい農業を伝える事ができると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 大阪府立園芸高等学校
バイオサイエンス科 2年 河原 蒼空

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・積極的に情報をSNSに挙げるだけでなく、写真などを使いどのような内容で何をしているのかを分かりやすく説明する。
- ・近くの農業クラブ加盟校と連携して、それぞれの単位クラブではどのような活動を展開しているのを紹介する。
- ・幅広く販売活動や普及活動を計画・実施し、その内容をSNSを活用し効果を高める。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・他校のクラブ員との交流会などを増やし、知識と技術の共有を図る。
- ・単位クラブ内で役員が中心となり、クラブ員に農業クラブについての魅力を広める。
- ・農業クラブをテーマにした漫画や動画を作成し公開する。
- ・授業で農作物を作るだけでなく、クラスなどの小単位でも取り組む。
- ・ポスター作製を通して、常に校内へ情報を発信する。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・若い世代に以下の内容を伝えていく。
 - a 農業の魅力
 - b 農作業の体験、具体的な方法、販売活動
 - c 農業の現状危機感の共有
 - d 次世代への伝承

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立勝間田高等学校
総合学科 3年 片田 千瑛

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- * 現 状：インスタでの投稿を行っているが、農業クラブに関する投稿が少ない。
SNS投稿の内容となる農業クラブ全体の活動が少ない。
活動を投稿し、次の活動につなげるSNSの活動ができていない。
- * 問題点：学校間の交流が役員や競技者に限られており、距離が離れており難しい。
- * 対 策：新入生へのスライドや動画を作って農業クラブについて説明する。
農業クラブのキャラを各校やコースで創る。SNSだけでなくチラシを公民館等に
掲載してもらうなど地域に農業クラブの認知度を高める機会を増やす。
地域の祭りに出店する。農クの認知度を調査するアンケートを実施する

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- * 現 状：現在勝間田高校農業クラブでドリームファームという勝央町役場前の耕作放棄地を
利用した交流活動を行っており、外部の認知度UPや地域とのつながりは強い。
- * 問題点：イベントの日時などもっと早く情報が欲しい。
農業クラブの役員に集中しがちで、他のクラブ員は受け身になりやすい。
- * 対 策：日頃の活動やイベントを農業クラブ全体で行う為に活動内容をしっかり見える化。
先生だけでなく校内での呼びかけも役員が積極的にする。
先生に任せるのではなく、広告、インスタ（SNS）を生徒がやってみる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- * 現 状：若い新規就農者が少ない。農業のスマート化が進み若者の関心は増している。
- * 問題点：耕作放棄地は増えているが若い人で農業をしようと熱意がある人が少ない。
立ち上げ時の資本金や土地・機械など若者が農業をスタートするハードルは高い
3Kのイメージや農業は苦しいのに、農業は儲からないというイメージが強い。
- * 対 策 * インスタの活用などの若い農家間の交流を増やす。若い農家同士や地域の人と、
小学校、中学校、高校などで交流行事をつくり、増やす。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口県立山口農業高等学校
食品工学科 2年 徳万 天音

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

まず、各学校で生徒が広報を担当する「広報係チーム」を結成し、SNS投稿や、写真・動画撮影、取材などを分担して、農業クラブの活動を楽しく発信していく。特にSNSでは、写真だけでなく、短時間で気軽に見ることができるショート動画を活用することで、多くの人に興味を持ってもらうことができると考える。

また、各校でニュースレター（新聞）を作成し、学校のホームページや廊下など、生徒の目に触れやすい場所に掲示する。さらに、これを他校と情報交換することで交流を深めたり、地域の公共施設に掲示してもらい、地域の方々にも活動の様子や生徒の頑張りを知ってもらえる機会になる。こうした取り組みは、農業クラブの認知度向上だけでなく、学校と地域のつながりを強めるきっかけになると考える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

他の農業高校や先進農家、農業法人を訪問して現地見学・体験することは、交流の機会になるだけでなく、最新の農業技術や経営方法を学ぶ貴重な体験になると考える。

また、地域イベントに出店・展示することで、地域の人との触れ合いを通じて農業の魅力を直接伝えることができる。そして、販売や接客をすることで、楽しみながら社会性や協調性、責任感を育てる場にもなると考える。これらの活動で、農業クラブ員が主体的に学び、外部とのつながりを実感することで、農業への関心やクラブ員としての誇りを強めていけると考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

若い世代の私たちができることは、「農業の魅力を伝える」「高齢者の技術を受け継ぐ」「新しい技術を取り入れる」ことだと考える。そこで、私たちが楽しみながら地域の人と関わる活動を行う必要がある。例えば、SNSや動画で農作業の様子や収穫の喜びを発信し、農業の楽しさを広めることができる。また、高齢農家の方から伝統的な技術や知識を学び、地域の人に伝えるイベントを開催することで地域活性化につながる。

さらに、最新技術を体験することで、農業の魅力を伝え農業の未来を考えることができる。こうした活動を通じて、私たちが楽しみながら地域の人々と協力し、持続可能な農業を広めていくことが大切だと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立伊万里実業高等学校
生物科学科 3年 井上 侑奈

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

1. 実態

農業クラブについて知らない人が多い。

2. 問題点

SNSで高校の情報発信はあっても、農業クラブの情報はほとんどない。

3. 解決策

高校のホームページに農業クラブについても記載したり、インフルエンサーや企業とコラボを行い、認知度を向上させる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

1. 実態

本校生徒310人中、農業クラブ員だと思ってる人は半数近くいるが、活動内容を知らない人が過半数いる。

2. 問題点

生徒の多くが農業クラブに興味関心がなく、農業クラブの活動が少ない。

3. 解決策

週に一回農業クラブについての学習会を農業クラブ役員が生徒に行ったり、月ごとの目標を学校ごとに決め活動するなど、農業クラブ主体の活動を増やす。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

1. 実態

担い手が減少しており、農業の高齢化や農就する人が少ない。そして、農業の良さや魅力を知っている人が少ない。

2. 問題点

若い世代に農業の魅力や可能性が十分に伝わっていない。また、興味関心があまりない。

3. 解決策

若い人たちに興味を持ってもらうために、作物の栽培体験や農業機械の操作方法など農業に携わる体験をしてもらう。また、農業の素晴らしさを伝える講話を行うなどする。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県佐久平総合技術高等学校

食料マネジメント科 3年 茂木 こはな

食料マネジメント科 3年 永峯 ゆら

生物サービス科 3年 高橋 妃菜

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

まずは、正しい情報を発信できるように誰かの発信を頼るのではなく、自分たちから発信できる環境を作る。そのうえで、地域や他校と連携できそうなことやしてもらいたいことなどを随時発信していく。

本校の取り組み

- ・公式インスタグラムを運用中
- ・SNSでの地域や学校とのやり取りは今のところない。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

授業以外の時間で農業クラブとしての活動を行うことが重要と考える。放課後や休日に活動を行うことで学年や学科を超えて活動ができ交流が生まれる。そうした交流の中で連携が生まれ学科や学年を超えたプロジェクト活動に繋がることを期待する。

本校の取り組み

- ・伝統的な農業クラブ活動として最寄り駅でおこなう「花いっぱい運動」があり、農業科は全学年が参加し、同じ校舎にある工業科の毎年有志で参加してもらっている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

新規でも始めやすい作目の選定や出荷しやすい場所を見つけるなど小規模でも収入につながる仕組みが必要。また、地域で出る産業廃棄物などを活用して持続可能で有効活用できる素材を見つけ活用できる方法を模索する。

本校の取り組み

- ・飲食店や洋菓子店に需要があるエディブルフラワーの栽培を植物工場で始めた。
- ・地域の直売所で課題研究や部活動で生産した少量の作物を販売開始。
- ・コーヒーカスや酒粕など地域で捨てられてきた素材を堆肥や飼料などにアップサイクルする取り組みを始めた。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立遠江総合高等学校
総合学科 2年 松本 菜佑
総合学科 2年 瀧澤 茉南
総合学科 2年 鈴木 琉夏

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ①地域のイベントの企画運営から農業クラブが入ることで、事前のPR動画の作成や、高校生や義務教育の児童の参加も促すことができる。

～事例紹介～

令和5年8月に開催された地元の花火大会と地域の地域資源を紹介したPR動画を農業クラブで作成し、花火大会当日にYouTube配信を行った。

- ②地域（コミュニティ）の特徴を把握しどのようなことへ地域の方々が関心が高いか知ったうえで、繋がりをもつ。

～事例紹介～

本校は毎年11月に開催される「森町並みと蔵展」へ農産物の販売や、授業の展示等で出展している。学校ができることと、できないことを地域の方に最初からお伝えし、高校生らしいおもてなしができるように努めている。こちらも企画運営に携わることで指導性が身につく。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ①地域のイベントの立案企画運営に入る。
②高齢者が企画運営しているイベントに協力する。
③地域の保育園や小学校への出前授業に農業クラブ活動を取り入れる。

～事例紹介～

本校は森町唯一の高校であるため、地域のイベントでは多くのオファーをいただく。農業クラブだけでは対応できないときもあるため、総合学科の特性を活かし他教科も一緒にイベント運営を行っている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ①小中学校での農業体験
②農業関連のアルバイトを経験する
③若者が農業を仕事の一つとして選択できるような法の整備
④農業高校在学中の大規模農業研修を他県で実施
⑤後継者問題に対して仲介を行政が行い、若者が技術と農地を譲り受けることができる制度
⑥耕作放棄地のインフラ整備に対して国の強いバックアップが必要

参加者課題レポート

第3分科会

第9会場

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第9会場	鳥取県立智頭農林高等学校	静岡県立小笠高等学校

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
1	茨城県	水戸農業高等学校	園芸科	3	大谷悠斗
2	群馬県	藤岡北高等学校	ヒューマン・サービス科	3	佐藤奏多
3	埼玉県	児玉高等学校	生物資源科	3	高橋涼風
4	東京都	園芸高等学校	園芸科	2	米山咲太朗
5	神奈川県	吉田島高等学校	環境緑地科	3	佐藤美優
6	新潟県	長岡農業高等学校	生産技術科	3	杵渕綾音
7	長野県	上伊那農業高等学校	生命探求科	3	白鳥響太
8	愛知県	稲沢緑風館高等学校	園芸科	2	中村優茉
9	三重県	明野高等学校	食品科学科	2	中西奏人
10	兵庫県	上郡高等学校	農業生産科	2	菅歩夢
11	岡山県	瀬戸南高等学校	生物生産科	3	谷口芽衣
12	香川県	笠田高等学校	植物科学科	2	平尾健真
13	長崎県	西彼農業高等学校	食料サイエンス科	2	宮崎伶於

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
14	鳥取県	智頭農林高等学校	森林科学科	3	山根充希
15	鳥取県	智頭農林高等学校	森林科学科	2	伊藤瑛斗
16	鳥取県	智頭農林高等学校	森林科学科	2	児玉真智瑠

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学校名	学科	学年	参加者
17	静岡県	小笠高等学校	総合学科	3	松本拓也
18	静岡県	小笠高等学校	総合学科	3	鈴田七海
19	静岡県	小笠高等学校	総合学科	3	原田權瑠

「地域連携からはじめる若者と持続可能な農林業」

中国ブロック 鳥取県立智頭農林高等学校

森林科学科 3年 山根 充希

森林科学科 2年 伊藤 瑛斗

森林科学科 2年 児玉真智瑠

1 はじめに

【中国ブロック連盟について】

中国地方は、本州の西部に位置する地域で、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県の5県から構成されている。日本学校農業クラブ中国ブロック連盟は、5県の農業関連高校が加盟しており、約5,200人の生徒数を有する。（各県の加盟校は、鳥取県：5校、島根県：5校、岡山県：8校、広島県：6校、山口県6校、計30校である。）

特に、鳥取県は農業学科単一校が2校であり、農業関連校と合わせても農業クラブ員数が457名（令和7年4月）と全国で最も少ない。人口減少や少子化と合わせ、農業学科を含む専門高校への入学者の減少も近年の課題となっている。

【中国地方における農業について】

中国地方の農業について調べ、次の表にまとめた。

表 中国地方の農業について

県	耕地面積 (ha)	荒廃地面積 (ha)	農業経営体数 (経営体)	総農家数 (戸)	農業従事者で65歳 以上が占める割合 (%)	農業従事者の 平均年齢 (歳)
鳥取	350,713	3,304	14,481	23,106	71.7	68
島根	670,786	6,789	15,285	27,186	84.5	70
岡山	711,444	11,246	28,699	50,735	82.1	71.7
広島	847,894	7,489	22,290	45,335	70.0	72.1
山口	611,250	8,554	15,839	27,388	84.9	72.3

【鳥取県の農林業について】

<農業>

・三大河川に開かれた水田地帯での水稻、中山間地域での梨を中心とした果実、黒ぼく地帯での野菜、大山山麓の酪農、山間地域の肉用牛の生産が行われている。

・地理的表示（GI）保護制度では、5つの産品（鳥取砂丘らっきょう（ラッキョウ）、大山ブロッコリー（ブロッコリー）、こおげ花御所柿（カキ）、大栄西瓜（スイカ）、伯州美人（白ネギ））が登録されている。

<林業>

・鳥取県東部に位置する八頭郡では古くから杉の造林が行われ、県内各地で良質な杉材の生産が行われている。

2 鳥取県の農業を学ぶ高校生たちにアンケート

鳥取県内の農業を学ぶ高校生たちにアンケートを行い、農業に対するイメージ等を調査した。アンケートはGoogle フォームを使用し、回答を回収した。

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか」というテーマから、私たち高校生の農業に対するイメージを調査し、若い世代が農業に関わる（関わりたい）理由や農業離れとなってしまう理由を考察することを目的とした。

質問項目は以下のとおり。（一部掲載）

Q.農業のイメージを教えてください。（複数回答可）

- ☐ 自然とふれあえる仕事
- ☐ やりがいのある仕事
- ☐ 農業機械を扱うのが楽しい
- ☐ 時間が自由にできる（自分のペースで仕事ができる）
- ☐ 作物が多く、何を栽培すればよいか分からない
- ☐ 重労働できつい仕事
- ☐ 休みが少ない
- ☐ 地域に貢献している
- ☐ 収入が不安定である
- ☐ あまり儲からない
- ☐ 夢がある
- ☐ 健康的である

図 1 実施したアンケートの一部
(Google フォーム)

Q. 高校で学んだ農林業に関することを将来どのように生かしたいと思いますか？

- ☐ 農林業に関する仕事に就きたい
- ☐ 特に農林業に関する仕事に就きたくない
- ☐ できれば何らかの形で生かしていきたい

3 令和7年度鳥取県学校農業クラブ連盟リーダー研修会における分科会報告

本研修会には鳥取県内の3校（智頭農林高等学校、倉吉農業高等学校、鳥取湖陵高等学校）の農業クラブ役員が参加し、各分科会の内容を話し合った。

以下、第3分科会のまとめである。

- ・まずは若い世代に農業に興味を持ってもらうことが大切。
- ・農家や農業高校の生徒たちが主体となって農業の良さを伝えていくとよい。
- ・ICT技術を熟知している世代がSNSを利用して若者へ農業の楽しさを広めたり、クラウドファンディングで資金調達をする等の役割を担いつつ、専門的な知識や技術を熟練者から学ぶような流れを作ることで持続可能な農業を目指す。
- ・子ども向けの農業体験だけではなく、大人向けの農業体験イベント等を実施することで、就農や農業関連産業への就職率向上につながるのではないかと考えられる。

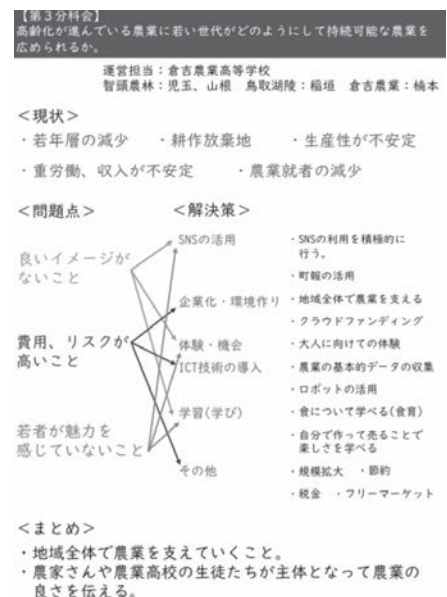


図 2 リーダー研修会第3分科会まとめ

4 本校での取組

ふるさと創造科では販売実習「ちのりんショップ」を、平成26年より地元智頭町の商店街にある空き店舗を利用し行っている。この取組は智頭町との連携で商店街活性化プロジェクトとしても運営されている。現在、年6回の空き店舗での実施に加え、年2回校外向けに学校内の施設を開放し販売実習を行っている。高校生が栽培した野菜や花、製造した食品加工品等を販売しており、地元住民のみならず多くの来客でにぎわっている。

令和7年度は「出張！ちのりんショップ！」と題して、町内の複数の公共施設で販売実習を行った。従来の実施場所以外での実施は初めてだったが、多くの地域住民に利用いただくよい機会となった。また、地域の皆さんと一緒にちまきづくりを行い、できあがったちまきを実習で販売した。笹の巻き方を地域のお年寄りから直接教えていただく中で、色々な話を聞くことができ、異世代交流の場となった。今後も、従来のものに加え、新たな企画を取り入れていくことで地域活性化や地域貢献につなげていきたい。



智頭町商店街空き店舗を利用した「ちのりんショップ」



地元住民の方々ににぎわう店内の様子



ちまきに使う笹の収穫・調整も地域の皆さんと



学校の食品加工室で地域の皆さんとちまきづくり



できあがったちまきはちのりんショップで販売



出張！ちのりんショップ！第1弾は地域の福祉施設

森林科学科ではものづくりを通して社会貢献をしていこうと、地元小学校の前にバス停を作ったり、公共の場所にベンチを作り寄贈してきた。また12年前から格子戸を作成し、地元の家庭に取り付けるといった取組もしてきた。これらの取組は、建具製作所の方に指導していただき、課題研究の一環として取り組んでいる。また、予算に関することや募集方法の仕方についても智頭町と協力して行っている。この活動も定着しつつあり、単に技術の継承だけでなく、製作を通して地域の方とのふれあいを大切にしている。



森林科学科が制作した小学校前のバス停



町内の民家に取り付けされた格子戸



木材加工の実習風景



格子戸制作の様子

4 まとめ

実態として本県でも高齢化はどんどん進んでいるものと思われる。そんな中で若者が農業に取り組んでいくために必要なことについて考えてみた。

①農林業の良さをどのようにしてPRしていけばいいのか？

- 1) 体験場所を増やす。
- 2) 身近な場所に、農林業の魅力を発信するようなポスターを掲示する。

②どういった農業ならば、若い世代が取り組みたいと考えるのか？

- 1) 定期的な休みがあり、収入が安定する農業。
- 2) 機械化等を取り入れ、あまり重労働とならない農業。

③持続可能な農業とするためには何が必要なのか？

- 1) 付加価値を付け、売れる農作物を生産する。(G I 認証制度の活用等)
- 2) 生産から販売までを一貫して行い、地域ぐるみでのブランド化。

これらの課題を解決していくことが、若者が取り組みやすい持続可能な農業につながると思う。私たち高校生の若い力を生かし、課題解決に取り組んでいきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 茨城県立水戸農業高等学校
園芸科 3年 大谷 悠斗

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

学校や地域のSNSを活用し、農業クラブの行事や理念を広報することが必要だと考える。
一般的に、農業高校関係者以外には農業クラブの存在はあまり知られていない。そのため、地域や学校間の繋がりを深めるためには、農業クラブの存在をより多くの人に知ってもらい、理解を得ることが必要である。そうした結果、行事の規模の拡大や地域の人との交流に繋がり、農業クラブが大きく盛り上がると考える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

「タンポポ調査」のような全国のクラブ員が取り組める活動をすべきだと考える。例えば、高校の周りの気候や気温に関する調査や農業高校らしく土壌や雑草に関する調査などのフィールドワークがよいと考える。クラブ員なら誰でも自分の高校の周りで調査できるものを新しく実施し、クラブ員の興味や関心を深めることが大切である。そのため、フィールドワークであれば、さまざまな農業高校の特徴を知ることができ、クラブ員の探求心が膨らむと考える。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

多くの若者が農業について関心を持ち、持続可能な農業の重要性を社会に訴えることが必要だと考える。現在、農業の後継者不足が深刻である。その理由として、農業の労働環境や収入が原因で、農業に対してマイナスイメージを持っている若者が多いからである。しかし、農業は第一次産業であり社会に必要不可欠な仕事である。そのため、若者が衰退する農業に危機感を持ち、現時点の農業体制を改革し、農業従事者を増やす活動をすべきだと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立藤岡北高等学校
ヒューマン・サービス科 3年 佐藤 奏多

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

多くの人が楽しめる動画を作成し、高校のSNSに投稿することです。内容は農業高校らしく、高校生が活動している映像を含めながら農業の知識や農業クラブの内容を含んだ動画を作るのが良いと思います。

学校間の繋がりに関しては、各県の学校農業クラブ連盟の理事会や代議委員会、新役員研修会などの活動を常に動画におさめ、それもSNSに活動報告という形で投稿することで、認知度や学校間の繋がりを大切にすることになると思います。SNSの中でも、若年層が多い動画投稿プラットフォーム。TikTokやInstagramを活用するのが良いと考えます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業高校というところに何となく入ってきたクラブ員も少なくないと思います。そのような方々に興味関心を持ってもらえる為にできる活動は、例えば農業高校合同で農業に取り組むカリキュラムを授業内で組むことです。他にも、地域の農家さんをお願いして共同で農作業を行う、というのも、地域との交流を高めつつクラブ員の農業への関心も高まると思います。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

高齢化が進み就農人口が減少している日本の農業において、IT技術を利用しない手は無いと思います。今更就農人口を改善しようとした所で、少子高齢化社会ですので、焼け石に水という状況になると思います。IT技術の導入ということで、既にロボットトラクターやスマホを使い遠隔で水田の水管理をするシステムはあります。他にもそのような技術は多岐に渡りますが、ほぼ導入できていないのが現状です。調べたところスマート農業に関する資機材、ドローンやトラクターを購入するのに数百万円します。明らかに初期費用が高く、農家さんたちの収入ではなかなか個人では購入出来ないと考えました。助成金や補助金制度は国や地方自治体もあるそうですが、高齢の農家さんたちはインターネットに不慣れな方も多く、そのような制度を調べることをしない方や、面倒くさいから活用しない方もいます。つまり、持続可能な農業を広める為には、若者がSNSを駆使し、そして直接農家さんたちへのそのような制度を周知し、スマート農業の導入をインターネットに慣れている若者がサポートし、促すことが大切だと思います。これからだんだん農業がきついかそういった考えも覆り、若者の新規参入も今よりは改善されると私は考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立児玉高等学校
生物資源科 3年 高橋 涼風

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・Instagramなどで活動を面白く投稿し、農クや農業について興味をもってもらうようにする。（授業の様子、収穫作業や動物と触れ合う様子、農業高校ネタ、行事の写真、動画など）
- ・文化祭で農業クラブの企画や宣伝、動画配信などを行い、興味をもってもらう。
- ・各都道府県連の活動をSNSや新聞、ポスター、チラシなどを作成し、配布する。
- ・高校生が主体となって中学生や小学生向けに体験型の農業実習を行う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・農クのTシャツやスタッフジャンパーなどを作る。
- ・SNSを活用した各校の農ク紹介を行う。
- ・全国大会でブロック対抗クイズ大会などのレクリエーション企画を実施する。
- ・役員研修など集まる機会ごとにレクリエーション企画を行い、交流を深める。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・中学生や小学生に対してのイベントを開催し、農作物を栽培したり加工したりする楽しさや農業のやりがい、魅力を伝える。（達成感や普段の生活のとの関わり、やりがいを伝えることによって農業をより身近に感じてもらう）
- ・地域の農業を体験してもらい、農業の楽しさや達成感を実感してもらう機会をつくる。
- ・スマート農業の技術を積極的に導入し、その成果を広くPRする。（ドローンでの農薬散布、自動運転トラクターなど）

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立園芸高等学校

園芸科 2年 米山 咲太郎

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

現在、農業クラブ役員同士での交流はあるが、その他の生徒や地域の方との交流は少ない。そのため、農業クラブがどのような活動を行っているかあまり認知されていない。そこで、都連盟で行っているような交流会を、農業クラブ役員以外の生徒や地域の方が参加できるような形で行うというのはどうだろうか。交流会をすることで、地域・学校間の繋がりを持ちながら、農業クラブについて知ってもらいきっかけになるのではないかと。しかし、大勢の人が集まって交流するのは難しい。しかし、SNSを使い情報発信をし、そこから興味を持った人がオンラインで交流することでその問題は解決できるだろう。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業クラブ員の興味・関心を高めるには、農業クラブの活動に関わる機会を増やすことが重要だと思う。さらに、現在は農業クラブ員としての活動があったとしても、農業クラブの活動だと実感しづらいと感じる。このような状況を変えるには、農業クラブで毎年行っている環境調査の結果を学校や都道府県単位で発表すると良いのではないかと。各校が集めたデータをその高校内で発表することで、より身近に感じることができるようになり、自分が農業クラブの一員だと実感できるようになると思う。そして、興味・関心高めることができれば農業クラブの活動に積極的に参加できるようになり、全体の活動も活発になるだろう。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

現在は農家になろうと思っても簡単にはなれないと思う。特に東京などの都市部に住んでいる人は農業に触れる機会も少なく、何をすれば良いかわからない人が多いだろう。しかし、実際には地方自治体や政府の就農支援があったり、グリーンツーリズムや週末農業などで農業を体験することができたり、農家になるために始められることは意外とある。特に週末農業は、家の近くの貸し農園で今までの仕事を続けながら農業をすることで、地方に移住して本格的に就農する前の一步として適していると考えられる。だが、貸し農園の認知度は低い。私の地元にも貸し農園があるが、その事を知ったのは高校に入学してからだ。そのため、貸し農園や週末農業について地域の人に知ってもらいイベントを開催したり、学校で紹介したりすると若い世代が農業に関わるようになり、持続可能な農業に近づくのではないかと。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立吉田島高等学校
環境緑地科 3年 佐藤 美優

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

神奈川県のアgricultureクラブでは、これからの活動の案として「小田原」「新横浜」「海老名SA」の3ヶ所に本部役員が出張して、各校で作った花や野菜、ジャムやクッキーなどの加工品を販売するという意見が出ました。さらに試食をしてもらうことで、もっと気軽に手に取ってもらえるのではないかと考えました。人通りが多い場所なので、他県の人や外国の人などに農業高校のことを知ってもらいきっかけになると思います。

また、農業体験については、すでに実際にいくつかの学校で取り組みが行われています。例えば、平塚農商高校では小学生と一緒に田植えを体験おこなっています。相原高校では地域の人に向けてポニーの餌やり体験などを行っています。

こうした活動は、地域の人に農業を身近に感じてもらえるだけでなく、私たち生徒にとっても地域とつながる良い機会になると思います。これからもこのような活動を広げていくことで、地域や学校同士のつながりがもっと深まることが期待されます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

現在は、学校全体での行事である文化祭などを通してミニ鑑定競技やポスターなどによる広報が多く行われていますが、農業クラブ以外が主体のイベントでは、興味・関心を集めにくいということが分かりました。

そこで、農業クラブが主体となるイベントを実施することで興味・関心を持ってもらいやすくなるのでは、ということで話がまとまりました。

その具体案として、三浦初声高校の収穫祭を参考にした催しや鑑定競技の内容を引用したクイズ大会、LHRなどの時間を利用したクラブ員全員での交流会、専門部と連携した販売などの案が出されました。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

神奈川県のアgriculture各高校は地域住民に農業を伝える活動をする意見が出されました。

中央農業高校は瀬谷区の小学生を対象に、酪農や養蜂、小麦、オリーブを使った調理体験を行い、吉田島高校ではアジサイ祭りで開成ブルーを販売、平塚農商高校は小中学生との農業体験を計画し、相原高校は幼児・小学生に向けた農業体験や出張授業、食育活動を実施しています。

このような活動を通して農業への関心を高めることで、持続可能な農業の普及を広められるのではと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立長岡農業高等学校
生産技術科 3年 杵渕 綾音

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- noteなどのSNSを活用する
→学校noteに本校直売所情報などを積極的にPRしてもよいのでは？
- 農業高校との地域連携、学校間で連携した活動の写真や動画、概要などを発信する。
- 農業クラブや各校で地域連携や学校連携を積極的に行い、その情報を重点的に掘り下げ発信する。その際に、ただ活動を発信するだけでなく、地域の歴史や文化、協力した高校についても紹介する。
- 地域連携で連携している、企業や施設に積極的にHPやSNSで本校の活動をPRしてもらう。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- 農業クラブの活動内容や実績などについて発信する。(noteの活用)
- 各校の取り組みについての意見交換会などを行う（新潟県は夏休みに交流会を開催）
→各種発表会後に、その発表についての意見交換会を開催。各校の独自の取り組みや工夫点などを共有する機会があっても良い
- 各校の学校内でも農業クラブの活動についてnoteで発信する
- リーダーシップを読む時間をもうけ、クラス代表者が大事なポイントを紹介する。
→他校のプロジェクト学習などを学び、課題研究や専攻学習の意欲を高めていく。
- 実際に農業を営んでいる農家によるリアルな話などを聞ける講演会を開く。または、それらの話を複数まとめた動画や、農家同士、学生と地域の方との対談形式の討議の動画を作成する。
- 農業鑑定競技の学習会を全県で開催しており、お互いの学習意欲を高め合っている。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- 最新の農業の現状や技術発展による働き方の変化などをより多くの人に知ってもらえるように説明会などを開く→現場で働く若手農家の講演を授業内で積極的に開催している。
- 若者の農業についての関心を高めるため、農業をテーマにした小説、漫画、ゲームを作成し、触れてもらう。(農業の絵本などを作成し発信していくのはどうか)
- 近隣こども園と連携を図り、野菜専攻がゴーヤのグリーンカーテンを園に設置。秋には、芋ほり遠足を実施して、農業に興味を持たせている。
- 体育祭で、高校生とこども園児との連携競技を実施して、農業高校が魅力的な学校であることを伝えている。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県上伊那農業高等学校
生命探求科 3年 白鳥 響太

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブの認知度を上げるためには各クラブ員の意識ある行動が必要だと思います。例えば、地域との交流を行う学校活動の中で、農業高校の魅力を発信すること、農業高校だからこそできる自由な学び、他校との連携をした授業など高い意識を持ちながら取り組んでいくことで、持続的に関わっていける関係を築き、地域や学校間での繋がりを大切にできると思います。そして、その活動のなかで小中学校交流や地域交流で学んだこと、経験したことなどをSNSやHPなどで発信していけば多くの方に知ってもらう機会になるのではないかと思います。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

これからの農業クラブの活性化に必要なことは認知度を高めていくことだと思います。そして、クラブ員がより高い意識を持つことだと思います。そのためには学校外での活動、地域交流をおこなっていく、その地域での課題に取り組んでいくことが必要だと思います。その取り組みには僕たち農業高校生が関わっていくことも大事だと思います。そして、より多くの人達と関わることで認知され、必要とされ、活性化していくとおもいます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

持続的な農業に着目して、栽培している人の年齢に合わせた植物を育てるなどの考え方があります。例えば若い世代の人はどんな植物を育てても問題はありませんが、高齢者になると育てた植物を運ぶことに課題が生まれます。持続的に育てていく事を考えると重い植物から年を重ねるにつれ段々軽い植物にするなど持続的に農業に取り組める環境を肉体的な面も考えて作っていく事が必要だと思います。そこに自分達、農業高校生が関わっていくことが大事だと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立稲沢緑風館高等学校

園芸科 2年 中村 優茉

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- Instagramのストーリー機能を利用し、常に最新の情報を公開する。
→農産物販売、ふれあい農園、時期の植物や旬の野菜など
- 各校で行われている行事や日常を発信できるHPまたはブログを作成する。
→農業高校生だけでなく、進路を考えている中学生、SNSを利用し始める年代が多い小学生の目にも止まり、農業への興味や農業クラブでの活動の理解を深めさせることができる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

<校内>

- テスト週間の1週間前に、1年生に向けたテスト対策講座を2,3年生で行う。農業鑑定競技会も同様に勉強会を行い、教える側と教えられる側両方が得をする活動を行う。

<校外>

- 各学校数人の生徒同士が他校の活動を学びに行き、交換留学のような形で活動する。
→山に近い学校、海に近い学校など環境の違う学校での授業を通して学びを深めることで、他校との交流ができ、農ク活動や農業についての知識を広げることができる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- 体験型イベントの開催
農業高校を会場とし、農家をしている高齢者の方々と一緒に、小中学生などを招き、実際に作業をすることで、農業に対する偏見を無くしたり、楽しさを知ってもらったりする。
- 1年間交流農業を行う
地域の小中学生と1年間様々な植物を育て、販売までの流れや普段知ることの出来ない内容を一部公開することで「大変そう」「儲からなさそう」「農家は嫌」というマイナスなイメージを少しでも無くす。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立明野高等学校

食品科学科 2年 中西 奏人

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

① SNSの有効活用

各学校の農業クラブごとにInstagramアカウントを新たに開設し、日々の活動や実習の様子を写真や動画で発信する。生徒の熱意や農業の魅力を伝えることで、若い世代や地域の人々にアピールする。

② 出前授業や体験活動の実施

地域の方や小中学生を対象に、農業に関する出前授業や、収穫体験・農業体験などの課外授業を企画・実施する。これにより、子どもたちや地域の方々が農業に触れ、興味を持つきっかけを作ると共に、実際の農作業や体験を通じて、農業の魅力を伝える。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

① 季節行事を活用した企画・運営

役員を中心に、季節にちなんだ農業体験や行事を企画し、実施する。例として、明野高校では1年生の学年行事として4月に田植え、9月に稲刈り、1月に餅つきなどを行っている。これらの行事を学年全体で参加できるように工夫し、季節ごとの作物栽培や収穫体験も企画する。実際の農作業を体験することで、農業の楽しさや奥深さを伝え、クラブ員の興味・関心を高めることを目的とする。農業高校ならではの季節行事を通じて、実践的な学びと交流を深める機会を作る。

② 生徒主体の農産物販売会と地域活動

学校で収穫した農産物や加工品を販売する「農産物バザー」などの活動を行う。生徒が直接お客様に販売し、栽培方法や工夫を伝えることで、やりがいや達成感を得ることができると考える。また、地域のマルシェやイベントに参加し、学校外での活動も積極的に展開する。特に、親や地域の方々をターゲットにした販売活動を通じて、農業高校の魅力を直接アピールし、地域の認知度向上や交流の促進につなげる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

① クラウドファンディングの活用による支援と知名度向上

クラウドファンディングを活用して、農業の魅力や持続可能な農業の良さを広める。支援者たちと一緒に農業体験や交流イベントを企画し、支援金を使って農業の未来を支えるコミュニティを形成する。

② 最先端の技術とスマート農業の導入

まず、ロボットやICTを使ったスマート農業を高校でも導入する事で、最先端の技術について学ぶことが重要だと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 兵庫県立上郡高等学校
農業生産科 2年 菅 歩夢

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

農業クラブと地域とのつながり

- ・農業クラブ員が農業体験イベントを主催し、地域の子供たちに向けて実施する。
 - ・農業クラブ員が地域の施設を訪問し、花や野菜、加工品の寄贈をする。
 - ・農業クラブ員が地元の企業や農協と連携し、共同で商品開発、商品販売をする。
- これらの活躍をInstagram、X、ケーブルテレビなどで、発信する。

農業クラブと学校間とのつながり

- ・近隣の農業クラブ、他府県の農業クラブと合同イベントを開催し、交流を深める。
- ・意見交換会や活動報告会などをオンラインで実施する。
- ・SNSの投稿にコメントしあい、ネット上でも繋がる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・作物コンテストや加工品コンテストなど、栽培や加工のコンテストを開催する。
- ・ドローンの操作体験、ICT農業体験など、農業技術の体験会を開催する。
- ・農業法人や企業、大学の人達から最新技術や経営方法の話を聞く。
- ・休耕地の活用、特産品の開発など、地域と連携して活動する。
- ・出前授業、学校内の農場体験など、大人や子供向けのイベントを開催する。
- ・イベントでの販売や展示、ボランティア活動など、地域のイベントに参加する。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・スマート農業（ドローン、AI、IoT、センサーなど）を活用し、省力化や効率化を図り、魅力的な仕事であることを伝える。
- ・ICTを使って栽培記録や出荷管理を行い、初心者でも農業が始めやすい環境を整える。
- ・農業の魅力や日々の活動をInstagram、YouTube、TikTokなどで発信し、同世代とのつながりを広める。
- ・地域の農家と協力して、技術や知識を継承する場（農業インターン、地域協働活動など）を設ける。
- ・兼業農家・副業農家として始める柔軟な働き方などの新しい形の農業経営を支援する。
- ・安心して農業ができるサポート体制（研修、補助金、設備のシェアなど）をつくる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立瀬戸南高等学校
生物生産科 3年 谷口 芽衣

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

- ・販売会を地域などで活発に行い、InstagramやFacebook等のSNSにその状況を投稿することで、情報を共有する。
- ・県内の農業高校で行ったことなどを農業クラブ新聞にまとめ、各農業高校に送りあう。
- ・岡山県の農業クラブのInstagramを作成し、各学校がログインできるようにして、自由に農業クラブ活動についての投稿ができるようにする。
- ・地域の耕作放棄地を使い、地域の方と共同で育てる農業体験を行う。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

- ・文化祭で他校の農業高校生も招待し、農業クラブで出店した模擬店等に参加してもらい交流することで、他校の農業クラブ員との連携を深める。
- ・新入生のオリエンテーションで、クラブ員が参加できる競技について実演しながら詳しく説明することで、興味関心を高める。
- ・県内の農業クラブ員がバラバラに混ざって交流する機会を増やす。
- ・農業クラブ役員全体で、1つの目標を決め、各校で実施する。そしてその内容や過程、結果をオンラインで発表し合い、さらにSNSに上げる。
- ・農業クラブ掲示板を作り、好きな時に活動報告や各校に対する連絡がスムーズにできるようにする。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

- ・耕作放棄地を使って、その地域の名産物を育て販売し、魅力を発信することで、地域を活性化させる。
- ・農業クラブ員が農業経営者を訪問・インタビューを行い、そこで得た技術を校内で活用することで技術の継承を図る。
- ・耕作放棄地で農業残渣を堆肥化し、化学肥料を使わない「環境にやさしい農業」を農業クラブで実行し、その地域の若い世代（幼稚園・保育園・小学生）にも体験してもらう。またスマート農業を活用した、負担が少ない農業を知ってもらうことで、持続可能な農業につなげる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 香川県立笠田高等学校
植物科学科 2年 平尾 健真

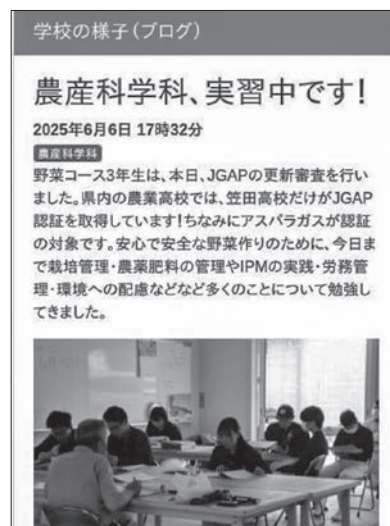
1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

学校のホームページにブログを掲載しています。学校の行事や部活動、授業の様子、実習の様子、即売会の案内、農業クラブ活動など、内容は農業に限っていないため、色々な年齢層に見てもらっていると思います。



学校のホームページ（トップページ）



JGAP審査の様子を載せたブログ

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

県内すべての農業高校が集まり「産業教育フェア」を実施しています。即売会やコケ玉作りなどの体験コーナーを設けて農業高校の活動に興味を持ってもらうようにしました。



R7.8.30 体験コーナーの様子

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

まずは我々世代が農業に興味を持ち、次世代につないでいく必要があります。年に1度行われる農家実習では農業の実習があるのはもちろん、直接農家と話す機会があり、そこで理解を深めることができます。



令和6年度の農家実習

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 長崎県立西彼農業高等学校
食料サイエンス科 2年 宮崎 伶於

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

校内での農業クラブ活動の認知度が低いため、まずは校内のクラブ員に対する農業クラブ活動の認知度を上げる必要がある。そのうえでSNS等を利用した外部への情報発信を行う。また、文化祭や校外のイベント等で、農産物などの販売物にQRコードのついたシールを貼りInstagramなどのSNSにアクセスしやすい状況を作る。そして、県内の農業クラブでの共同の取り組み（地域のイベントや体験会等への参加）を企画し、地域連携の入り口を広げる。そのためには県内の農業クラブ役員のネットワークや連携を取り合うことが必要であると考えられる。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

一般のクラブ員は農業クラブへの興味・関心が薄いため、まず農業クラブ役員が核となり農業クラブを意識した交流の場を作っていくことが必要と思われる。できるだけ多くのクラブ員が参加し何らかの役割に携われるような行事のあり方を模索する必要がある。参加して楽しいと思える活動を企画し、行事（イベント）に参加して何らかの成就感や達成感を味わうことのできるクラブ員間の関係性を構築する。これをきっかけに農業クラブ活動への参加の輪を広げていけるように努力する。農業クラブ活動の活性化は、これまでのあり方にこだわらず各学校の良さを認め合い、行事（イベント）を見直しを行い、連携を深め継続していくことが必要であると考えられる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

近年、SDGs（持続可能な開発目標）として世界的な解決・改善が求められている課題が17個のゴール（目標）としてある。そのほとんどが身近な生活と農業において深く関係している。とりわけ農業とSDGsの関係性については「食料不足による飢餓問題」、「自然環境の保護」、「生産者の雇用促進」、「健康的な食生活」などの目標と密接に関連しており持続可能な農業の実現において重要である。地域社会は高齢化が進んでおり、SDGsを学ぶ若者世代がこれらを念頭にSNS等での情報発信を行うとともに、いかに地域農業に関わっていくかが重要である。とくに中山間地における耕作放棄地が増えている。これに対応するため管理が比較的省力化できる代替果樹としてブルーベリーやアボカドなどの栽培が試みられている。また、収穫繁忙期にクラブ員がインターンシップとして参加していくことも考えられる。いずれにしてもグローバルに考え、ローカルに実践をする姿勢が重要と思われる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立智頭農林高等学校

森林科学科 3年 山根 充希

森林科学科 2年 伊藤 瑛斗

森林科学科 2年 児玉 真智瑠

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

【現状】①活動内容をSNSなどにアップしている。②SNSを利用し、多くの世代に農業クラブを知ってもらおうとしている。③生産物販売等で地域と繋がる機会を設けている。

【課題点】①教員のみがアップを担当する学校が多く、更新ペースが遅い。②SNSを見る高齢者が少なく、幅広い世代に伝わっていない。③販売実習を行う場所が限定的であり、地域の中でも局所的な範囲の人々しか交流できない。

【まとめ】農業クラブの認知度を上げるためには、SNSはもちろん、SNSを使わない世代にも活動内容を知ってもらえる方法（チラシやポスターの作成および掲示等）を取り入れていく必要がある。また、日頃、学習している農業について地域（地元）の専門家である農家さんに技術指導をしてもらい、地域と学校が繋がる機会を設けつつも、より高度な専門技術の習得を目指す。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

【現状】①そもそも農業クラブ員の関心が少ない。②活動内容が少ない。

【課題点】①クラブ員一人ひとりが関心を持つような取組を考える必要がある。②活動内容を知らないクラブ員が多い。

【まとめ】農業クラブの活動内容を知ってもらう機会を増やす必要がある。例えば、農業クラブに関連するクイズ大会やFFJ検定の勉強会を実施する等、工夫を凝らした取組を実施していくことで興味・関心を持つようになるのではないかな。また、校外で実施される研修会や大会へ参加する機会もあり、自分自身を大いに成長させるチャンスを得ることもできる。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

【現状】①重労働かつ収入が不安定 ②生産性が不安定 ③若年層の減少、就農者の減少

【課題点】①農業に対するイメージが悪い。②農業を行うための費用やリスクが高い。③若者が農業に魅力を感じていない。

【まとめ】まずは若い世代に農業に興味を持ってもらうことが大切である。農家さんや農業高校の生徒たちが主体となって農業の良さを伝えていくとよい。ICT技術を熟知している世代がSNSを利用して若者へ農業の楽しさを広めたり、クラウドファンディングで資金調達をする等の役割を担いつつ、専門的な知識や技術を熟練者から学ぶような流れを作ることによって持続可能な農業を目指す。また、子ども向けの農業体験だけでなく、大人向けの農業体験イベント等を実施することで、就農や農業関連産業への就職率向上につながるのではないかと考えられる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立小笠高等学校

総合学科 3年 松本 拓也

総合学科 3年 鈴田 七海

総合学科 3年 原田 權瑠

1. 第1分科会

「農業クラブの認知度を上げるためにSNSなどを有効活用し、地域・学校間などの繋がりを大切にするためにはどうすればよいか。」

地域の人達と連携して農業を行うことや、季節ごとにイベントを開催することが良いと考えます。作物（農業）の魅力はそれぞれの旬があり、播種や収穫でも作物ごとに違うという点があると思います。小学生や老人ホームの方々と一緒に交流しながらそのような活動を行い、その様子をTikTokやInstagramに掲載することによって認知度をあげつつ地域間での交流も図ることができると思います

また、各学校で農業について学んだことや発見したことをSNSを使って共有することも一つの方法ではないかと考えます。場所が離れている学校でもコミュニケーションを取ることができるといったことも考えられます。

2. 第2分科会

「クラブ員の興味、関心、交流、連携を高めるため、また、農業クラブを活性化させるにはどのような活動があるか。」

農業に関する問題を各校でつくり、ゲーム形式で各校ごと出し合うことで、農業クラブ員間の関係を深め、かつ農業のことも更に詳しくなれるのではないかと考えます。「農業」というものを学んでいる仲間でも各校によって、栽培している種類の農作物や栽培の仕方など学んでいる内容が異なっていると思うため、新しい発見と気づきの場にもなると思います。

さらに、そのような活動を動画またはSNSに残しておくことによって次の世代の農業クラブ員の活性化にもなるのではないかと考えます。

3. 第3分科会

「高齢化が進んでいる農業に若い世代がどのようにして持続可能な農業を広められるか。」

まず農業の担い手が不足している理由として「農業は大変」「収入がすくなそう」などの社会的なイメージが一つとして挙げられます。そのため、最近ではドローンやAIを使用した農業（スマート農業）というものがあるということを伝えることが一つの手段だと考えます。また、若い世代に農業があまり理解されていないことや、おもしろさをわかってもらえていないことも一因だと考えられるため、近年では小学校から学校でタブレットなどの電子機器が活用されつつあるので、興味を持ってもらう・知ってもらうだけでも農業が発展する一歩になると思います。更に資金面での支援を強化することで金銭面での不安をなくすことも大切だと考えます。



氏名	高等学校	年	科・組
----	------	---	-----